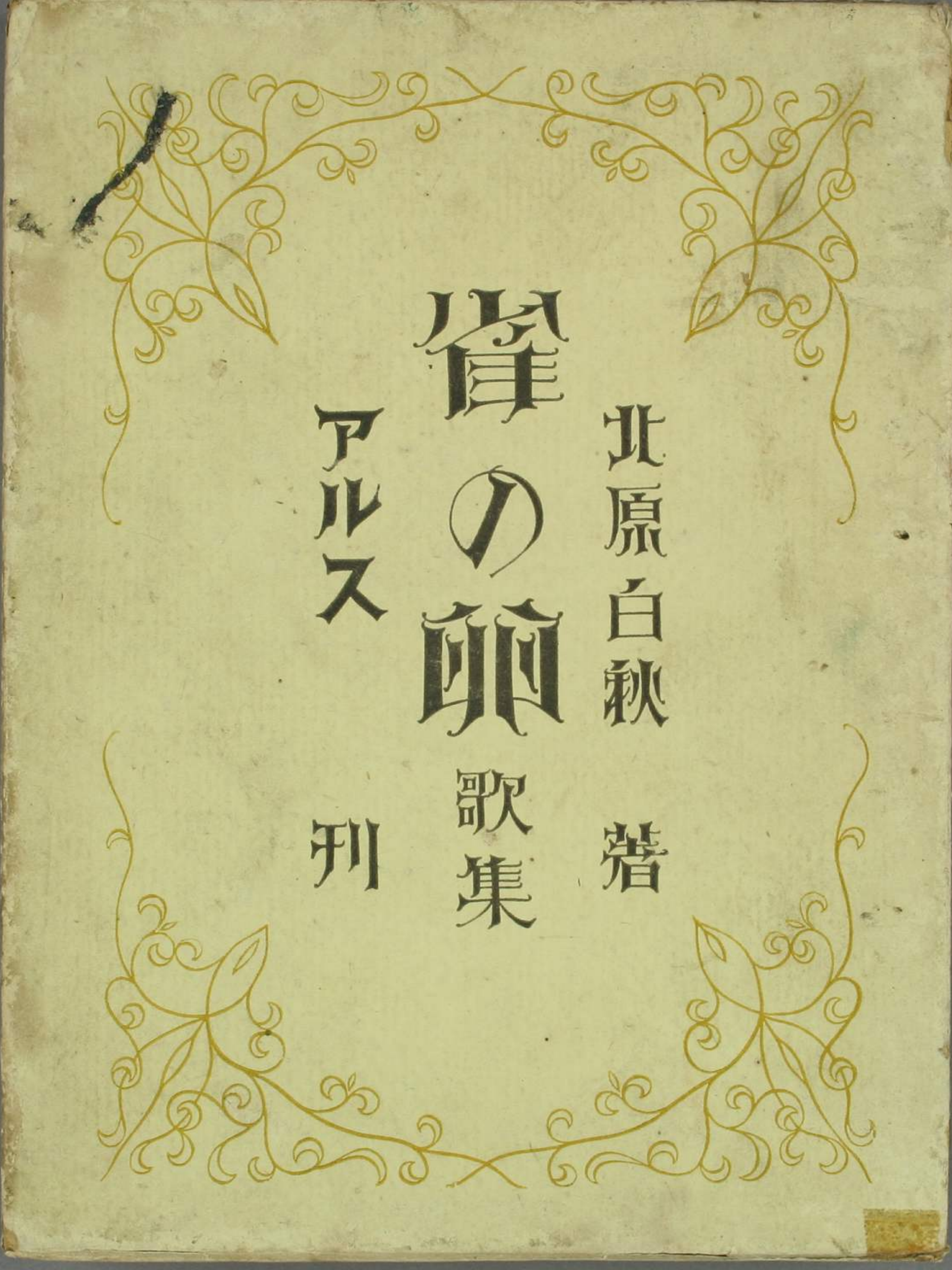
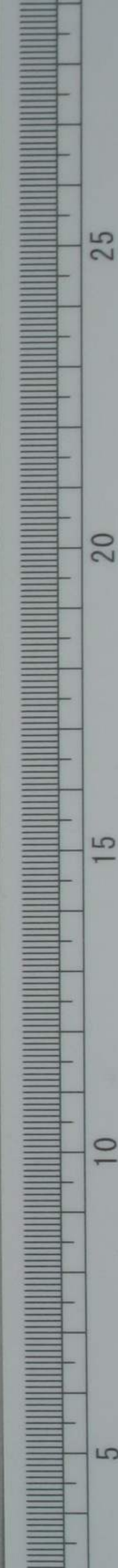


LICENSED PRODUCT  
Black  
3/Color  
White  
Magenta  
Red  
Yellow  
Green  
Cyan  
Blue



北原白秋 著  
雀の囀 歌集  
アルス 刊





集歌

雀の卵

北原白紱

ARS

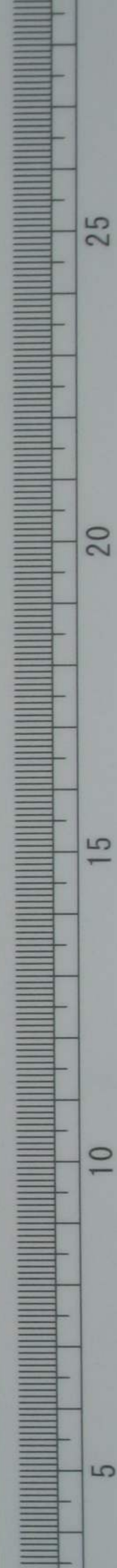
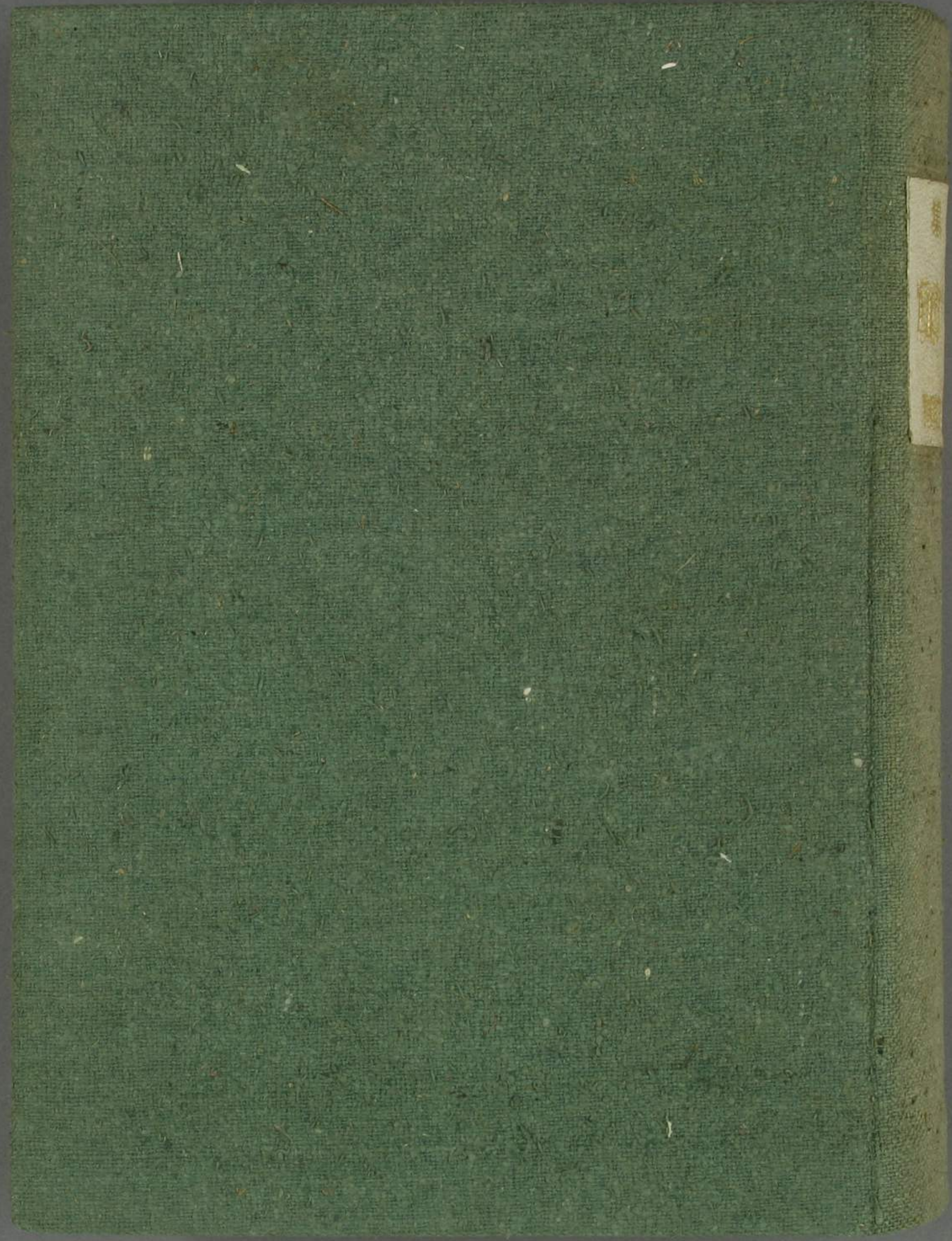




ア  
スル









集 歌

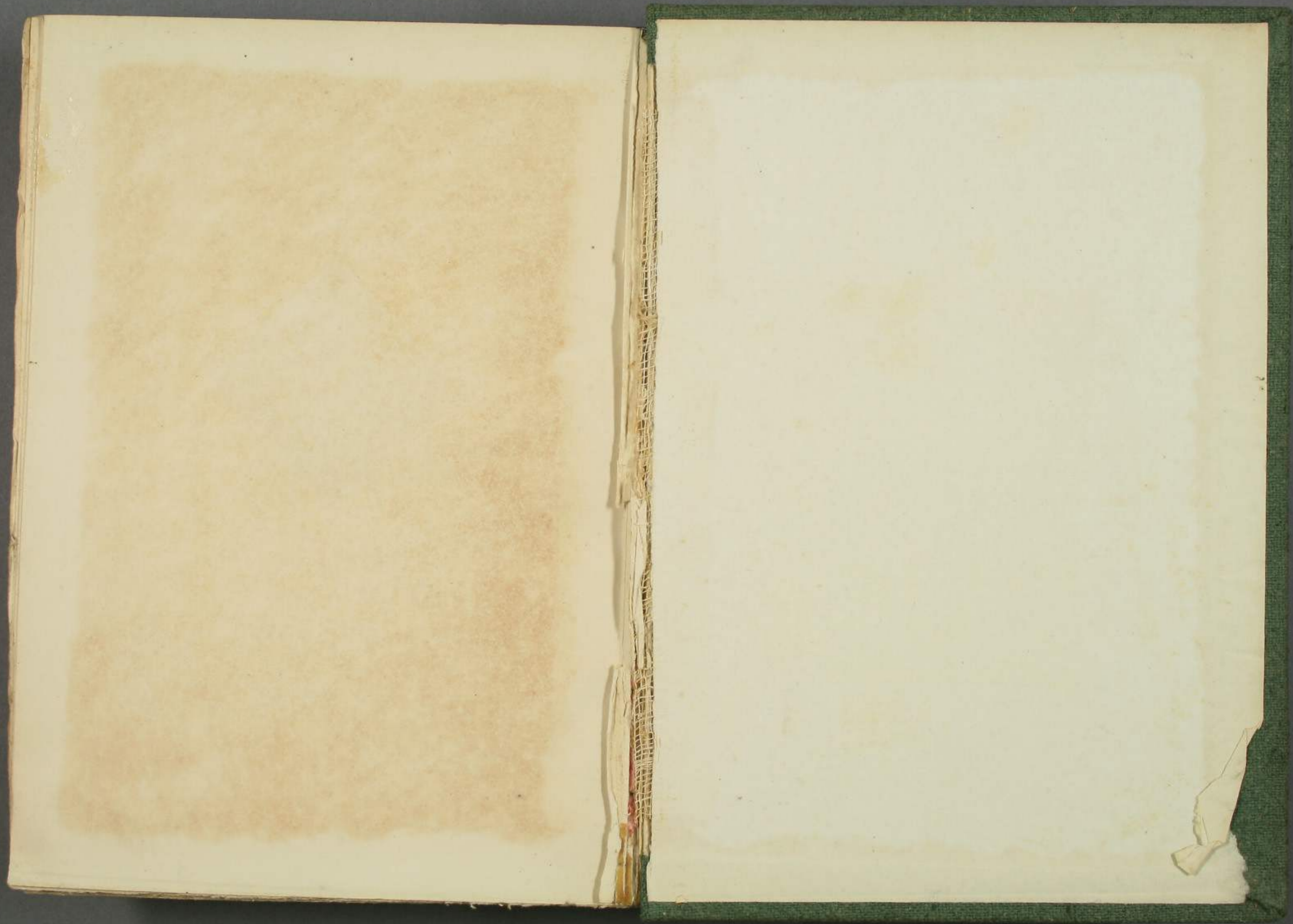
蘭の窟

秋白草花











三詔歌集



業原白采著

アスル刊



大  
序



大  
序

「雀の卵」が完成した。いよいよ完成した。と思ふと思はず深い溜息がつかれた。ほつとしたのである。

今、四校目の訂正をして、やつと済ましたところである。窓から見てみると裏の小竹林には鮮緑色の日光が光りそよいでゐる。



丘の松には蟬が鳴いて、あたりの草むらにも草蟬が鳴きしきつ  
てゐる。南のバルコンに出て見ると、海がいい藍色をしてゐる。寺  
内の栗やかやの木や孟宗の涼しい風の上を燕が飛び翔つてゐ  
る。雀も庭の枇杷の木の上で何かしてゐる。瀬の音もするやうだ  
が、向ふの松風の下から浮々した笛や太鼓の囃子がきこえる。今  
日は孟蘭盆の十四日である。

長い苦しみてあつた。かう思ふとまた、目の中が火のやうに熱  
くなつた。

〔雀の卵〕此の一卷こそ私の命がけのものであつた。この仕事を

仕上げるばかりに、私はあらゆる苦難と闘つて来た。貧窮の極、  
死を目前に控へて、幾度か堪へて、たうとう堪へとほしたのも、み  
んなこれらの歌の爲めばかりであつた。だからたとへ拙くとも  
これらの一首一首にはみんな私の首が懸つてゐる。首の坐に直  
つて歌つたものばかりだ。

そしてたうとう今日が来た。

此のこれらの歌は大正三年からぼつぼつ作り出して、足かけ  
八年目の今月今日、大正十年七月十四日午後三時にたうとう最  
後の朱を入れて了つたのである。



私の前に今冷たい紅茶が運ばれて来た。私はぐつとそれを一息に飲み干して了つた。

蟬の聲がする。涼しい海の風が吹きぬけてゆく。私は生きかへつた。

二

大正三年の七月に私は小笠原父島から東京へ歸つた。さうして「輪廻三鈔」の中にあるやうな生活に入つた。それから「雀の卵」の生活が續いて来た。「葛飾閑吟集」の生活は五年の五月から初まつ

てゐる。六月の末に眞間から小岩村の三谷に移つて、其處で新しい紫煙草舎の閑寂三昧に入つた。哥路といふ小犬と、黒い子鴉と村の子供たちが私の朝夕の遊び相手であつた。私が外へ出る時には子鴉と小犬とがよく後を慕つて来た。子鴉は私が歩く時も私の頭や肩の上に留つて啼いてゐた。百姓どもは私を鴉の先生と呼んだ。内にある時には私が詩や歌を書いてゐる机の上に留つてゐたり、悪戯したりした。私は時々歌の反古で、爲ちらした鴉の白い糞を拭いて廻らねばならなかつた。秋の末に此の子鴉が本物の鴉になつて空へ飛んで行つて了ふと、冬が来て草舎は



雀ばかりのお宿になつた。此の「雀の卵」の編纂にかかつたのは恰度その頃であつた。

尤も、その時はこんなに大冊の三部歌集にならうとは思ひもかけてゐなかつた。小笠原から歸つて以來の、東京麻布での所謂「雀の卵」の生活に屬する者が主で、それには「輪廻三鈔」中の大部分も含まれてゐた。が、葛飾のものはその後だんだん慾が出て附け足す事になつたのである。で、六年の一月から六月までは、「雀の卵」の中の歌の推敲や新作と、一緒に葛飾の歌を作る事に夢中にされた。冬枯のさびしさに雀の羽音ばかり聽いて、食ふものも着る

ものも殆ど無い貧しい中に、私は坐り通してあつた。私の机の周圍は歌の反古で山をなした。何度も何度も淨書し清書し換へた。はては狭い部屋中に散らかつて、手もつけられなくなつて了つた。で、半ヶ年の間はその中で埋まつて、掃除一つ爲ずに夜はその隅の方に片寄つて寝た。それを寒い雀が廂から逆さ頭をして覗いたり、小犬の哥路カゴロが泥足のままで搔きちらしたりした。私は一心不亂であつた。

その初夏、私は深く決意するところがあつて、東京へ出た。さうして紫煙草舎を閉づると同時に、歌の上の門下にも解散を宣し



た。さうして愈々一人ぼつちになつた。雀の卵に命を懸ける覺悟で、層一層の貧苦を欣求した。八月に本郷動坂の長屋生活が初まつた。此處で何度も餓死しかけたが、私は同じく山なす歌反古の中に埋つてゐた。

ここで紫煙草舎解散の辭を書いた。その中に左の一章がある。

「藝術家が自己の藝術の爲めに苦しむのは當然である。その苦しみが如何ほど深くとも、それはしかくあるべき事で、それは些いささかも矜はりとす可きでは無い。それはよく知つてゐる。然しその爲

めに拂はれた犠牲が豫想以外に多大であり他に累を及ぼす事があまりに慘酷である時、私はつくづく自分が詩人として生れた事を呪ふ。又、詩人として生きねばならぬ事を呪ふ。

最近、それはこの八ヶ月の間、私がただ一冊の歌集「雀の卵」の爲めにどれ丈精根を盡したか、それは私の妻がよく知つてゐる。それは詩人たる自分としても、殊に一家の窮境を救ふ爲めにも、どうしても一日も早く完成させねばならなかつたのである。その爲めに私は萬事を放擲して、雀ばかり凝視めてゐた。阿蘭陀書房（弟の經營してゐるものである）の危機は日に日に迫つて來た。私



は苦しんだ。然し私はその爲めに自己の藝術上の良心を賣る事はできなかつた。私は一切の妥協に耳を傾けなかつた。紫煙草舎の仕事も後廻しにした。私は親達にも弟達にも舎中の諸君にもそむいて、ただ推敲三昧に入つた。そのうちに時は過ぎ月日は徒らに私を取残して行つた。私と私の妻は食ふや食はずになつた。着のみ着の儘になつた。ただ残つてゐるものは書籍の幾百冊と妻の琴と仕舞の扇とそれにあはれな書齋の器具だけになつた。私の歌は拙かつた。洗練に洗練を経るほど、磨けば磨くほど私は嚴肅になつた。一字一句の疵瑕も見逃せなかつた。或時は百首

の内九十首を棄て、十首の内九首を棄てた。或時はたつた一句のため、七日七夜も坐つた。ある歌のある一字は三年目の今日に到つて、やつとの確な發見ができた。それは初めからの確にその字で無ければならなかつたのだ。

天才無くして詩に執するは謬れり。全く其の言葉は眞理である。私はこれが爲に親には不幸の子となつた。弟妹には不信の兄になつた。而して舎中の諸君には師として不親切の限りを盡した。而して私の妻を餓えさせ、その衣をはいだ。

親達は怒つた。怒るより却て泣いた。弟達は恨んだ。恨むよりも



二四  
訴へた。弟子達は責めた。責めるよりは迷はねばならなくなつた。ただその中に私の妻だけが私を正當に理解してくれた。私は私の妻を信じ、私の妻は私を信じた。私達は貧しかつたが却つて仕合せであつた。二人はただ互に愛し合ひ、尊敬し合ひ、互に憐憫し合つた。

然し、私の仕事は容易に仕上げを急ぐ可き種のものでは無かつた。日を以て時を以て責められるにはあまりに勿體ない。藝術の路は一つである。

私は覺悟した。妻も覺悟した。餓死が目前に迫つて来る。それは

いゝ、然し私達の背後をふりかへると、そこには肉身の兩親がある。弟がある、妹がある。私は血を吐く思をした。妻は日に日に瘦せて行つた。

犠牲は大きかつた。幾度か危急に瀕して、盛り返して來た阿蘭陀書房も終に人手に奪はれた。私はみすみす弟を見殺しにし、親を再び暗闇に突き墜した。

詩を作るより田を作れと云ふ。全くである。私は遂に父親から、三十にして親を泣かす、俾挽き土を掘り石を擔かげと罵られた。道理千萬である。私は父の前に何を云はう。ただ頭を深く垂れるの



みである。

All or Nothing. 彼のイブセン劇中のブランドの歩いた道は私の道であつた。

畢竟するに私は一徹者である。」

私はまたかうも續いて書いた。

「最近たつた一冊の歌集『雀の卵』に對する苦しみ、それも或は空な苦しみて無かつたか知れぬ。殆ど鍊金道士のやうな苦しみが、

幾日幾夜續いたか、而も私の得たものは何であるか。

それを思へば私はただ涙が流れる。ああ、あはれな私はただ歌の前にたゞ深く頭を垂れた私自身を見出したのである。

それは莊嚴な光であつた。仰ぎ見るだに目が旨ひさうになる。深いもの、高いもの、恐ろしいもの、やさしく、寂びしく、美しいもの、手を觸れるだに勿體ない光であつた。

苦しめば苦しむほどその光は尊くなつた。進めば進むほどその光は遙かになつた。而して驚けば驚くほど複雑になり、突き詰めれば突き詰めるほど、手も觸れ難いものになつて了つた。



正直に云ふ、私は今は詩も歌も全くわからなくなつて了つたのである。

正直に云ふ、私は號泣した。

恐らく、その時私の理智の腫が正しく開いてゐなかつたならば、私はキツト自殺したであらう。

無慘、私の凡てが根柢から覆滅した。

これらの文章は可なり氣を負つて書かれてある。今見ると非常に赤面するけれど、當時の心持としては全くこれに違ひな

つたのである。

葛飾から出京した時、私は弟の手に第一期の「雀の卵」の原稿を手渡した。早速それが組みに廻はされた。初校が出た。活字になつて見ると、また安心ができなくなつた。私はまた推敲し出した。やつと一通り了ると、すぐに再校が出た。見ると愈々満足しなくなつた。で苦しきほどほしてゐるうちに、阿蘭陀書房の危急が一日と迫つた。たうとう私のその集は間に合はず了ひになつた。私のが遅延したといふ事が主としてその覆滅の原因でなく、四圍の情勢が必然的にさうなつて了つたのではあるが、兎に角私が



知りつつ救ひ上げ得なかつた事は苦しかった。私としてはどうしても藝術上の良心を賣る事はできなかつたが、何よりも母親から泣かれる事が一番苦しかった。早く済ましてくれと泣かれたところで藝術家として恥知らずの事はどうしてもできなかつたのである。

再校分の校正刷を擁へたまま、築地の假寓から愈々動坂へ移つたのは恰度盛夏の頃であつたが、それはその儘握りつぶしになつて了つて、また新らしく原稿紙を散らかし出した。山のやうにそれが身のまはりに積つた。さうして秋が來、冬が來た。

極貧が來た。考へて見ると、その頃の私としては相當に聲名も地位もあつたし、さう物質的に苦しまなくともよささうなものであつたが、全くその日の糧にも差支ながらをかしい程金にならぬ事ばかりに没頭してゐたのである。それに書いたものさへ持つてゆけば何處の本屋でも喜んで金に換へてくれたにちがひなく、再三いろいろと申込んで來た向きもあつたが、一々頭から斷つて、全然眼も向けなかつたのは、全く弟の復活する迄弟と同じく赤貧のどん底で終始しようと覺悟したからであつた。それに外の仕事に氣を移せば折角のこれまでの眞純な感興を破



壊して了ふので、遮二無二死んでもこの一事にかぢりついでる外に途が無かつたのであつた。

何もかも賣り盡して了つた。いくら残つてゐる書籍類も大概手放して了つた。妻の琴もまげた。残るは彼女が仕舞の舞扇だけになつた。それももう破れて了つてゐた。

その頃よく遊びに来る人に歌人の森園天涙君があつた。遊びに来ては焼薯でも買ひませうと買ひに出かけてくれた。その森園君が見兼ねて四海多實三君に通じて七十圓なにがしの補助金を取り次いでくれた。そのお蔭でどうにかその年は越せて、貧

しい乍らの春は来たが、妻がたうとう病氣になつて了つた。それと一緒にこの小田原へ轉地する事になつた。かう書いてゐるながら、その當時を思ふと、私は森園、四海兩君にどんなに感謝していかかわからない。

私の歌はその頃から漸く曙光を見出しかけて来た。すつかり趣が變つて今までの強ひて澄み入らうとした嚴いつい不自然さが無くなつて来たやうに思へた。然しそれもほんの曙光を見出しかけたばかりで、私は突然無言になつて了つた。

一つには貧しい生活が貧しい乍らに愈々複雑になつて、愈々



一人ばかり歌つたり歌ばかりに苦しんでゐられなくなつたのであつた。二つには歌と云ふものに命をうち込んで行つてゐるうちに、眞の沈黙の尊さと云ふのが自然と了解されて来て今は三十一字の短歌でも冗漫に過ぎ言句が多過ぎるやうに思へて来たのである。それでもつと短い、極々煎じつめただけのものに畢竟は徹底して行くのが自分の藝術に取つて最も落つきある正しい道ではあるまいかと思へてならなかつた。三つには歌の舊門下と私との間に起つた不祥事が私を愈々沈鬱にさせて了つたのであつた。もう二進も三進も動けなくなつて了つた。

その儘四年間、私は歌一つ作らなかつた。

その間に、私は同じ生活を別な方面から筆をつけ初めた。散文詩の「雀の生活」がさうであつた。尤もそれは雀が主になつてゐる。がそれらの韻文と散文と、その行き方は違つても畢竟は同じ観照から來てゐる。これは是非にも本集と参照して讀んでほしいのである。

昨年、私は葛飾以來の妻と別れた。その一年間、私は愈々何一つ仕事をしなかつた。閑寂ないい生活が全然破壊された爲め、靜か



に獨てそれを取りかへす事が何より大切に思へた。さうして冬の暮から次第に私の心は閑雅な寂光の中におとなしく浸つてゆけるまてになつた。さうなつて再び、永い間凝り固つてゐた歌の感興がこんこんと溶けて溢れ出して來た。雀の卵の歌、反古がいよいよ押入の中から引つ張り出された。それは破れ行李にいつばいつまつて、まだ外にはみ出してゐた。で、一先整理をするにしても何處から手をつけていいかわからなかつた。私はただ、それに武者ぶりついて了つた。新しい切々たる哀情が私の胸をうつつた。

云

それからまた永い事かゝつて、それらの全部の歌を善いのも悪いのもその儘に一應分類して見た。それからまたまた一首一首に見直して行く事にした。そこでまた改めて點檢する段になると愈々暗い失望が私を囚へた。殆んどその五六を除く外、これと云つて満足な歌は無かつた。葛飾以來の苦行も遂にはまだ半途にも出てゐない事を知つた。それで全然また遣り直す事になつた。第一期の校正刷の「雀の卵」に至つては殆んど見る影もない。あはれなものに目に映つた。ああ、あの時に急いで公刊しなくてよかつたと、つくづく吐息がつかれた。本當に今まで永い間藏しまつ

二七



て置いてよかつた。飛んでもない耻さらしをする事であつた。あの蕪雜な「雲母集」をつくづく私は懲り果ててゐたのであつた。

黙つてゐれば今度もまた五六年かかつて完成しないだらう。さういふ弟の配慮で、アルスから鎌田敬止君が来てくれた。それで、反古の整理や分類や清書を改めて手傳つて貰ひ乍ら、また私は推敲三昧に入つて了つた。朝から夜、夜明かけて坐つてゐて、それたつた一文字を修正する爲めだと云ふ事は、傍にゐる同君には嘸切なかつたらうと思つた。さうしてぶつ續けの徹夜を八日あまりして、どうにか一先原稿ができた。

で、アルスに一旦手渡したのが第二の「雀の卵」であつた。この時まではまだ「葛飾閑吟集」が百首に満たなかつた。

今年の一月になつて、また遣り直す事になつて原稿を取り戻して、ちよいちよい手を入れたり作り直したりしてゐたが、色々極めの雜多な仕事に追はれて充分の時間が無くて三月になつた。三月の中旬から愈々また鎌田君を相手に坐り直した。さうして十日間ぶつ續けの徹夜苦行をやつた。四月にまた二度前後合せて十三日間、五月には十四日間の通して、やつと最後の「雀の卵」が完成された。この時は二人とも氣絶しさうになつた鎌田君



には毎朝午まで寝て貰つたけれど、私は殆ど三日位一氣に徹夜して間に一二時間そのまゝで寝てまた起きて、またぶつ通した。鎌田君は病氣になつた。全く今度雀の卵が完成したのは鎌田君が傍で氣勢を添へてくれたお蔭である。全部の淨書もすつかり同君の手を煩はした。非常に有難く思ふ。今年になつてから何ても原稿紙を二千枚使つたと云ふからそもくの初めからは一萬枚以上は確かに使つた事だらうと思ふ。

それから初校再校參校四校と、やつぱり四五日づゝの徹夜してまだ充分と行かないで、まだ訂正の葉書を今以て飛ばしてゐ

るのである。

〔葛飾閑吟集〕には新作の短歌が百首以上同じく長歌が八章ある。これは主として五月の苦行で自然とすばらしい勢で湧き出したものである。この四年間歌一つ作らなかつたけれど、以前から見るといつのまにか段違ひの高さにのぼつてゐる自分を見た時に、やつぱり黙つて獨て堪へてゐたお蔭が今やつと目に見えるて來たのだと有り難かつた。

兎に角、そこで私はほつとして、一時に心が軽くなつた。



何故こんなに表現に苦しまねばならぬか。ある人は一旦作つたものを後で修正するのは不自然だと云ふ。然し、初めの表現に不自然な個處があり、的確で無い文字が一つでも挿まつてゐる、それが目につくから、それを眞に自然に、眞の表現にまで還すが爲めに苦しむのである。

それは眞の天才であつたら、私ほどの苦しみもあるまい。初めからすらすらの的確に思ふ儘の表現ができるだらうけれど、私ごときには、それにまだ歌には極々の不丹練者であるから、人の

十倍二十倍の苦しみを經なければとてもと云ふ觀念の臍を固めてゐた。無技巧の技巧などと澄まし反つてゐられないのであつた。まだそれを云ふ丈充分に手に入つてゐないのであつた。

私は曾て小説「よほよほ巡禮」の中で、かう云ふ事を主人公の素春に云はせてゐる。素春は私だと考へて下すつていい。それにこの中に出てくる詩といふ字を歌として讀んで下さるといい。

「あゝ、私は決して天才では無からう。さういふ自分を天才視す



るほどの驕慢も自尊も今の私にはさらさら無くなつて了うた。全く身の程を思ふと恐ろしくなる。が、何と云つても私は詩を離れて生きてゆけない人間だ。端くれでも矢つ張り私は藝術家の一人だ。藝術家の藝術に奉仕する苦しみと云ふものはまた格別なものだと云ふ位は知つてゐる。あの葛飾にゐた頃にしろ、私は字を削り句を削り、一念に彫心鏤骨の極を盡したが、了ひには思ひつめた「白金の唾」のやうになつて、ただ燦々とした涙ばかりが頬を傳うた。何にも云へなくなつて、ただ「むとかおむとか云へば、それによかりさうにも私は思へた。然しそれきりになつては

詩が無くなる。そこから切端つまつて溢れ出したので詩になる。詩は詩の形で表現されなければ詩とは云へない。だから、歌はなほ詩人などと云ふ語は意味を成さない。結局は詩の表現が必要だ。その表現にしてからが、無論最上最的確のもので無ければならないのだ。表現などはどうでもいいと云ふ人があるが、それはあまりに詩の徳詩の妙といふものを知らない人の言葉である。一枚の木の葉を畫くにその一生を以てした貧しい畫家もあつた。ただ一點をうつ爲めに十年の酸苦を嘗めた大愚な畫家もあつた。そこまで行かなければ眞の藝術とは云へない。眞の天才眞



の名人とは云へないてはなからうか。詩の徳といふものはそれほどに靈驗いんげんなものだ。それを僅かでも私が知つてゐるからこそ苦しむのだ。愛の藝術と云ふものは決して愛そのものの概念を蕪雜に演述したものでは無く、愛そのものを藝術として眞に體現したものに外ならぬ。空力からりきみでは何にもならないのだ。

つくづく慕はしいのは芭蕉である。光悦である。太雅堂である。利休、遠州である。また武藝、神宮本立心である。私はどうかしてあそこまで行きたい。風流が風流に了らず、眞に自然に還つて、一木一草の有るが儘におのれをその中に置く、さうした自然に任せ

た、あなたまかせの境地こそ眞の藝術では無からうか。私はその心を以て心としつゝある。さうなりつつある。

私の此の超脱的閑居の精神もそこにある。人から見れば極めて弱氣な消極的なものに見えやう。然し私に取つてはこれ以上の積極的生活は無い、見てゐてくれ、どちらが眞に光つて来るか。實際私はいかと思つてゐた。今も思つてゐる。

第一に内容と形式とをよく二つに引き分けて考へる人があつた。これはあまり淺薄である。二に技巧と云ふ事を化粧若くは虚



飾の謂に思意してゐる人がある。これも眞の技巧と云ふものを知らない人の謬見である。眞にいい歌はおのづから内容と形式とがただ一つに渾然として融合してゐなければならぬ筈であるし、眞の技巧は内容そのものをその儘に形に表現した眞に自然な、雜り氣のない、極めて本質的な満ちて、さうして思ひきつて素直に單純化された、その尊い境地にまで押し進んだものでなければならぬわけである。ある種の歌が怪しく空虚に見えたり、虚飾に見えたりするのは、主として觀照の態度、物に對つての精神の据ゑ方、感じ方が先づあやふやな上に、不純な小主觀を交

三

へ過ぎたり、不謙讓だつたり、身構へしたり、才情の放恣、無節度と云ふ點から來る。これが最大原因で、さういふのは、畢竟、抑から所謂レンズの度がピタと合つてゐないのである。だから、それ等は引き續いて表現上のまやかしが必然にやつて來る。眞によく觀、鋭く感じて、その儘正直に表現すればこれより越した事はない。たとへばそれが拙たない子供の描く畫のやうなものでも、虚偽では無いだけに空つぽなものにはならない。それは手馴れ過ぎ、巧み過ぎた虚偽の技法よりどれだけいいか知れない。これに反して觀照の態度が初めから不正直だつたら何にもならない



のてある。ただ、自然の眞實相に徹し得る丈の藝術上の精神修業を度外して、歌としての外形的技法のみの修練を先きにする。と云ふ事は恐ろしい誤謬であると云はねばならない。初めが大事でそれから先きは苦行次第である。だから無論先きには先きがあつて、表現の上でも眞の妙境に澄みきる迄には中々測り知られぬ幾層の段階を眞實に我から苦勞して上つてゆく丈の充分の覺悟があつて、初めて成し遂げ得る事と思はれる。これはさうした苦行の末には自然と自身に體得できる筈であるから、早急に焦り散らす必要は無い。寂びとか滋味とかさうした究極に

落ちつくのは何れにしても相當の年代が経つてからで、じつくりと苦勞爲抜いてゐるうちには自然そのあたりに到達するものだ。

そこで正直に觀照し正直に寫生せよといふ事は無論正しい。正しいが、それは歌作上の根本義であると云ふだけで、それだけではまだ初歩だと考へる。そこから當然出發すべきではあるが、實相の觀想そのものが正直でも鈍く、形は寫しても神に徹せず、無爲で平凡で無選擇である場合、殊に眞の音樂を知らず、眞の愛なき靈ひを通じてのさうした作品は詩と云ふ第一の見地から



見て決して優秀なものとして遇する譯にはゆかない筈である。世常にはこの種の寫生歌が多いやうに見受ける。だからすぐれた特殊性の光輝は見るに難い。さうした個性は本質的に詩人としての卓越點をたいして有しないものと見做すのが相當であらう。

寫真と繪畫とは違ふ。その寫真にしてからが撮影者の個々によつて、その選擇が違ふ。矢張り優れた個性が初めて優れた構圖を取るのてある。これを思はなければならぬ。

だから寫生の唱道は啓蒙運動として見る時に價值があるが、

眞の藝術の絶對境はその寫生から出てもつと高い、もつと深い、もつと幽かな、眞の象徴に入つて初めてその神機が生き氣品が動く。さうして彼と我、客と主の兩體が、眞の圓融、眞の一如の状態に合して初めて言語を絶した天來の靈妙音を鳴り澄ますのである。

寫生よりさへ出でず、ただ放恣な根據の無い空想と、機智若くば才氣より發した比喩隱喩交りの概念的象徴、或は誇張された生の儘の情熱を幼稚な矜驕と粗雑な激越調とを以て遣る種の歌はもとより論外である。



私は少くとも實相を離れて眞の美眞の寂無しとする者の一人である。眞實相の寂光を眞に識る事こそ所謂世に云ひ古るした物のあはれを識ると云ふ事であらう。眞の愛、眞の雋銳なる官感を通じて世の眞實相に徹する時、眞の生命は初めてその神秘の光を放ち、歌も愈々眞の象徴に達する。さうして彼の縹緲たる神韻なるものはさうした妙境の奥にあつて、搖曳する。

東洋藝術の眞髓はかうした自然の眞實相に端的に直入する。細微の寫生を避けて直接にその本質そのものを把握する。即ち

一視に機を識り、一線に神を傳へ、一語に生を活かす底のものである。短歌俳句の類は、その自然觀照に於て、此の如き象徴的筆法を必要とする。ここまで行かなければならない。

で、これを表現するに當つての私としての信條は、何は措いても歌は言葉を以て表現せねばならぬ藝術である故第一に大切なのは言葉の吟味と云ふ事であると思つてゐる。言葉の幸ふ國に於ては猶更の事である。言葉は生物である。この生物それ自身の聲色香味觸を深く、識別し、これらを色々につなぎ合せて、眞の



微妙な一連の交響體と成さねばならぬ。さうなつた時三十一字の短歌は一尾の響尾蛇のごとくその肉身の底の底から揺れ響くであらう。私は永い間これが爲めに苦しんで來た。言葉に對する感覺は極めてデリケートなものになつてゐる。一音でもツボから外れたが最後すぐに顔色が蒼くなる。だから言葉をたゞ意味さへ通じればいゝ位に粗雑に取り扱つてゐる作品に接すると、たちまち耳を覆うて走つて了ふ。世の中の歌人達の間にはこの言葉をさながら平殻のやうに軽く振り廻したり、石ころのやうにかち合せたり、殺したり弄び爲過ぎる。日本に生れて日本

の言葉の本質さへ知らない人が多いのは驚くべきである。

それから此のやうな一連の調子を整へると云ふ事は何より大切ではあるけれども、單にただその調子に流れ過ぎて表現せんとするものの本體のリズムを等閑に附する事は由々しき一大事であつて、さうなつたら全く生命のない表現に墮して了ふ。雀ならば雀の羽ばたきのリズムがその儘に言葉となり、躍動する雀の諸種相が、その儘の形に言葉を以て表現されなければならぬのである。そこまで行かなければ眞の象徴詩とは云へない。ただ雀が羽ばたく、雀が動くだけでは意味だけのものではあ



る。だから吹かれ吹かれて雀が一羽と一羽雀が吹かれつつをり  
とは格段の相違となる。前者には幾度もと云ふ語は無くとも幾  
度も吹かれては羽ばたき吹かれては羽ばたく状態がそのまま  
に出てゐる。後者にはそれが無い。意味だけである。かうなると雀  
は不用意な言葉によつて全然殺されて了つてゐる。

かういふ例證は擧げれば限りが無い。私のさうした歌につ  
いて見てほしいと思ふ。

それから何と云つても一點一語である。如何なる場合にもそ  
の一點に於て動きの取れないといふ言葉はただ一つしか無い。

それがなかなか手に入り難いので苦しむのである。

それからまた言葉と云ふものは弾みさへつけてやると際限  
が無く跳ね上るものである。これを深く壓へつけなければなら  
ない。自然を言葉の上だけで強調してはならない。言葉は自分の  
出て入る呼吸そのもののやうにおのづから流露して來なけれ  
ばならない。

兎に角私が人以上に此の事に苦しまなければならなかつた  
のは、何と云つても人以上に未熟だつたに違ひない。それに何と



云つても根本の觀照の態度そのものに隙が有つた隙と云ふよりも寧ろ小我をあまりに早急に出し過ぎたが爲めに従つて中途半端な表現に留つて了つたのが多かつた。表現よりも觀照そのもの、それより心の据ゑ方が第一だと云ふ事がつくづく思はせられた。

耻を云ふと、私は「雲母集」で失敗した「桐の花」で完成したものを思ひきつて破壊してかからうとした。あれは蛇皮を脱ぐの類で、一旦はあれ丈の自己革命をやつて見ないと収まらなかつたのである。活氣活力のみで何も彼も無理押しに押し通さうとし

た。我見がのさばり、自然相が極端まで強調され、言葉が事實以上に飛躍し過ぎてゐた。これに詩として表現すべきを強ひて歌にした爲め一首一首に獨立性を缺いだ連作のものが出來上つた。後になつて稍しみじみとした處に落ちつかうとしたが、兎に角、あれは三崎の歌とは云へ、小笠原島の光耀燦爛たる麗空麗光麗色に眩暈して了つてからの作が多かつたので、何も彼も麗かづくめて躍り跳ね過ぎてゐたのであつた。今から見るとたとへ甘くとも「桐の花」の方がずつとすぐれてゐた。

その後の作にも随分「雲母集」の餘焰の抜けきらないのが多か



つた。それに、どうにかして眞の短歌の行くべき道を發見しよう  
と焦つた爲め、あても無いかうでも無いと事毎に迷ひどほし  
であつた。そこへゆくと素人のかなしさであつた。強ひて澄み入  
らうとした傾きもあつた。ただ畏れ入つて了つて固くなり、肩ば  
かり張つて息もつけない苦しさ、に自繩自縛して了つた。かうな  
つたら手も足も出せる筈はないのである。で、實際に觀てる乍ら、  
ついその傍まで行つてゐながら、その眞生命にピタと手を觸れ  
る事ができないで、ふつと片傍に逸れてゆく。どうしても主體と  
客體との間に一分の隙があつた。此の隙を乗り越えるまでのつ

まりこの數年間の必死の苦しみてあつたのである。

今、齋藤茂吉君の「あらたま」のそれに倣つて、私も二三の例證を  
擧げて見よう。ここにそれそれ當初の原作と最後の改作とを並  
べる。尤もこの間に數十階の階段を経て來たものと見てほしい。  
さうして成程と合點して貰へば有り難い。

(1) 月の夜の白き狼煙もくもくと見れども盡きず朧らかながら (原作)  
月の夜の白き霧雲もくもくと流れて盡きず夜灯の上 (改作)

(2) 玉蜀黍かがよふ中にうつら來てしばらく光り誰か消えつも (原作)  
玉蜀黍かがよふ中にうつら來てしばらくはぬしか誰か去りたり (改作)



(3) ひと色に黒くにしめる冬の山雨過ぎぬらし竹のみな靡く  
ひと色に寒くにしめる冬の山雨過ぎぬらし竹のみな靡く (原作)  
(改作)

(4) 冬の日の光つめたき笹の葉に雨蕭々とふりいでにけり  
短か日の光つめたき笹の葉に雨さぬさぬとふりいでにけり (原作)  
(改作)

(5) ふる雪の小夜の眞澄となりにけりふと湧き起る牛の底吼  
吹雪やみて月夜あかりとなりにけりふと湧き起る牛の太吼 (原作)  
(改作)

(6) わかるみの中に求食れど白鶴はさびしいかなや音をのみぞ啼く  
春泥の上に求食れど腰ほそく清らなるかな鶴の姿は (原作)  
(改作)

(7) 白妙の丹頂の鶴やるせなく地の淡雪に嘴つけにけり  
鶴と云へどひもじきものか松ヶ根の凍れる苔に嘴つけにけり (原作)  
(改作)

(8) 一つ火のさ緑の螢大きく光り雨しとどふりし闇を今上る  
一つ火のさ緑の螢息づき明り雨しとどふりし闇を今上る (原作)  
(改作)

(9) 安心して子供が遊んでゐる玉蜀黍はそばに真紅な毛を垂れてゐる  
そよかぜに子供が遊んでゐる玉蜀黍はそばに真紅な毛を揺りてゐる (原作)  
(改作)

(10) 百日紅の花も咲きたり時折は遊びに來ませせはしかりとも  
百日紅の花も咲きたり時折は遊びに來ませせや遠くとも (原作)  
(改作)



(11) 日向吹く風のほとりの稗草はこまごまと寂し光りそよぎつつ  
(原作)

(11) 日向吹く風のほとりの稗草はこまごまと弱し光りそよぎつつ  
(改作)

(12) ひとつひとつ目につく秋の草の穂の夕そよめきもあはれなるもの  
(原作)

(12) ひとつひとつ目につく庭の草の穂の架毛（ひた）は白しそよがぬぞなき  
(改作)

(13) かつしかの友なし雀心して飛べや風吹き日は暮れかかる  
(原作)

(13) 日の暮の友なし雀心して飛べや田づらの風吹きかはる  
(改作)

(14) 松が根にひとむら光る薄の穂あはれとし見つつ我もいそぎぬ  
(原作)

(14) 松が根に夕さり光る薄の穂ほとほとに寂しうちそよぎつつ  
(改作)

(15) 雀が二羽（ふた）纏（まと）れて羽はたく美しさ落ちむとしてはまた飛びあがる  
(原作)

(15) 雀が二羽ころげ羽はたくうつなき落ちむとしてはまた飛びあがる  
(改作)

(16) 枯れ枯れの唐黍（とうもろこし）の秀（ほ）に雀（すずめ）ゐてそこに風吹く聲こそすなれ  
(原作)

(16) 枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと遠し日の暮の風  
(改作)

(17) 刈小田（かりこゝ）に落穂（おちく）掻（か）きぬる雀（すずめ）の中（うち）うしろ向けるはいとど寂（さび）びしき  
(原作)

(17) 刈小田に落穂掻き掻く雀いくつうしろ向けるは尻尾上げて忙（いそ）し  
(改作)

(18) 鼻（はな）づら反らし角（かど）低（ひ）め来る眞黒牛（まじろ）の片眼（かたまな）輝（きら）けり穂薄（ほ）の下  
(原作)

(18) 曳（ひ）かれ出（で）でてうしろ振り向く眞黒牛の片眼輝きぬ穂薄の風  
(改作)



(19) 蒲の穂のさむさむと立つ澤の曲くま白鷺はぬれど聲ひとつせぬ  
蒲の穂のさむさむ明る澤の曲鷺多くぬれど聲ひとつせぬ (原作)  
(改作)

(20) ふと見つけて涙こぼるる月讀の光に白い蛾が飛んでぬる  
ふと見つけて寂しかりけり月の夜の光に白き蝶の舞うてぬる (原作)  
(改作)

(21) 竹あちこちちよるく川の川下に水車廻れり黄なる陽の射し  
竹あちこちちよるく川に日の射して水車かかれり寒き鷄との聲 (原作)  
(改作)

(22) 竹あちこちちよるく川に日の射して尾花光れり石ころの上  
竹あちこちちよるく川に日の射して尾花輝けり寒き石の上 (原作)  
(改作)

一々枚舉にいとまなほほどである。それから全然駄目なものは思ひきつて根本から改作して了つた。

(23) 雨霽れて早稲の青田の中空に虹あざやかに立ちにけるかも (原作)  
雨霽れて早稲の青田の夕空に虹の輪あか明う立ちにけるかも (改作)  
右抹殺代ふるに左の連作を以てした。

(24) 思はぬに虹立つ空の夕明り笠ふりむけて誰ぞや仰ぐは (新作)  
虹の輪の七色ふかき片裾に雨しとどなり早苗田の上 (同上)  
虹の輪にひとしほ沓ゆる早稲田の水田の遠の燈火ともしびの列 (同上)  
雨ふくむ野良の新樹の空ちかく消ぬかの虹のまだ斜なる (同上)



なほ、

(25) 陽に向きて宙に羽たたく稲穂雀飛びは上られ輝りしきり落つ (抹殺)  
脚ちぢめて雀飛び上る稲穂の揺れ揺れかがやかし金色の風 (抹殺)  
右の二首を改作してゐるうちに左の二首が出来たので、以上のは抹殺した。

(26) 風に見えてしきり羽ばたく稲穂雀遠き穂づらに散りまぎれつつ (新作)  
ちりぢりに雀まぎるる垂穂波風は入日の田に吹きかはる (新作)  
小笠原の正覺坊の歌十四首などは殆ど棄てて了つた。中に一首どうにか物になりさうのがあつた。それを拾つて、またすつ

かり改めて了つた

(27) 輝る日麗ら萬劫経たる海龜のこの諦めたまきの大きなるかも (原作)  
日に照られ波にさらされ海龜の甲羅の苔も青寂びにけり (改作)

凡てがかういふ風であつた。

自分で見ても改作毎に素直にありの儘に、その本質に近づいて行つたのがわかつた。愈々これで動かぬといふ最極まで行くと、全くふたつとなき完成のよろこびが來た。涙が流れて來た。



それによつてこの集の「葛飾閑吟集」の新作のあるものは、たとへば螢四章の「晝」「揚羽蝶」左の「庭前秋景」の二首などは、愈々象徴に入り得たものと信じてゐる。

(28) ふと時をり木賊とくさの蔭を眞白き猫耳立ててをどり何の氣はひなき  
うつつなく木賊とくさにうつる秋日の蝶驚きて立てど何の氣はひなき

それにうれしいのは、澁く寂びしくなりまさる私の觀想の中に、再び忘れられてゐたあの「桐の花」の明るさが目に立つて還つて來たやうなけはひがするそれも明るい乍ら以前の明るさと

は違つた澁さを見せて、再び私を訪づれて來た。

考へると、退いてゆくやうでやつぱり一段上の螺旋を廻つてゐるのでは無いか。

私の生活も、幸に今度の妻が來てくれて以來、和らかな靜かな明るさに満たされてゐる。

何れにしても、少くとも此の八ヶ年の苦しみは私にとつては決して徒爾では無かつたと信ずる。殊に葛飾以來、私の詩境は自分ながらその以前とは比較にもならないほど立ち勝つて來た



やうに思へる。兎に角苦しみ苦しみやつと此處までは登つて來たが、これから先きが峻路である。

※

この序文を書きかけてから三日経つた。今日は風が涼し過ぎる位である。浪の音も騒立つてゐる。後丘の栗や臭木が白い葉裏を見せて揺れてゐる。松の根には日あしがかげつて、蟬時雨がしつきりなしにふりそそぐ。

私は今白い持飯<sup>モチイ</sup>を三つ食べて、冷めたい紅茶を一杯ぐつとあほつたところだ。

たうとう「雀の卵」が完成した。上天に向つて私は感謝する。生きてゐてよかつた。生きてゐてよかつた。

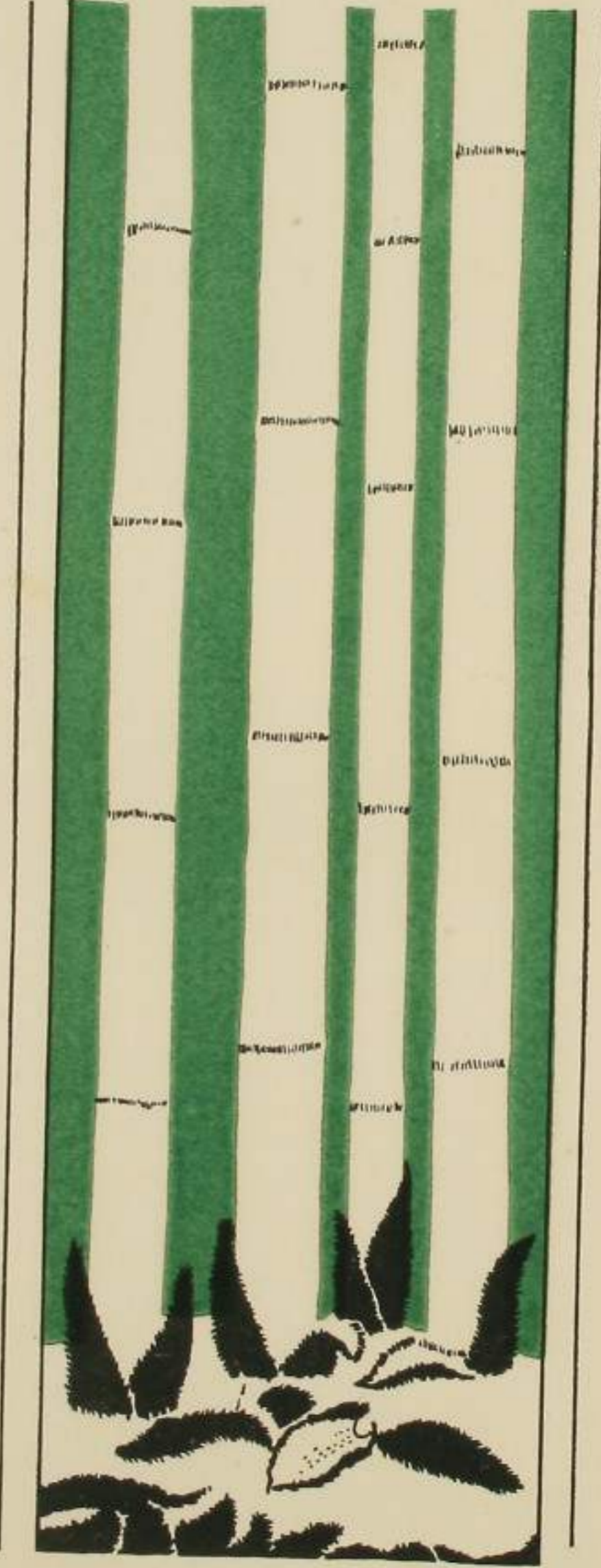
大正十年七月十八日

小田原天神山にて

白 秋 識



葛飾閑吟集



葛飾閑吟集





序に代へて

大正五年五月中浣、妻とともに葛飾は真間の手  
兒奈廟堂の片ほとり、龜井坊といふに、假の宿<sup>やどり</sup>を  
求む。人生の命運定めがたく、因縁の數寄豫めま  
た測<sup>はか</sup>りがたし。森羅萬象日<sup>ひ</sup>日に新<sup>あらた</sup>にして、いつし  
か春過ぎ夏來ると雖も、流離の涙しかすがに乾



く暇なく、飛ぶ鳥の心いや更に泊る空なし。われ  
一人の女性を救ひ、茲に妻となして、永恆の赤繩  
を結ぶと雖も、いささかも亦浮きたる矜を思は  
ず。人間の悲願いよいよ高けれども、又あながち  
世の鄙俗びやくきを棄てず。赤貧常に洗ふが如く、父母  
にわかれ、弟妹にわかれ、いまだ三界を流浪する  
と雖も、不斷の寛濶また更に美しからむ事をの  
み希ふ。されば玲瓏として玉の如く、朝あしたに起き、夕ゆふ

に寝ねて、いただくはありふれし米の飯、添ふる  
に一汁一菜の風韻、さながら古人の趣に相かな  
ふを悦ぶ。まことや簡素は自然の徳、われ敢て強  
ひて衒はずとも、おのづから身に驕る實なけれ  
ば、常住水に魚鱗の苔を洗ひ、野に出で丘にのぼ  
りて、時に鮮菜の土をはたく。閑雅、閑雅、われ汝を  
慕ふ事久し。願くば田園疎林の中、行住念々汝と  
ともに處して、閑寂さらに寂しからむ。



うきわれを寂しがらせよ閑古鳥 芭蕉

(真間の閑居の記)

葛飾前歌

薄野

薄野すずきのに白くかほそく立つ煙あはれなれども消  
すよしもなし



黍

朝ぼらけ一いつ天晴れて黍の葉に雀羽たたくその  
こゑさこゆ

蓮花

絡驛ちやくえきと人馬じんばつづける祭り日の在所ざいじよの見えて白  
蓮の花

白馬

ほのぼのと白馬びやくば曳かれて濁り川濁れる水に口  
つけに来ぬ



雀子嬉遊

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見  
居りその揺るる枝を

飛びあがり宙に羽たたき雀の子聲立てて還る  
その揺るる枝に

真間に移る

一

葛飾の真間の繼橋夏近し二人わたれりその繼  
橋を



葛飾の真間の手兒てこ奈なが跡あとどころその水の邊べの  
うきぐさの花

二

住みつかぬ山の庵いほりはけうとけどまだそぞろな  
り一日ひ二日ふたひは

堪まへがてぬ寂さびしさならず二人來て住めばすが  
しき夏立ちにけり

この夏や真間の繼橋朝なさなゆきかへりさく  
青蛙あしがへのこゑ

路の葉に龜井の水のあふるれば蛙かはづ啼くなりか  
つしかの真間

二



野ゆき山ゆき

一

おのづから心安まるすべもがと寂しき妻と野  
に出でて見ぬ

三

鴉カラス鳥トリの葛クワ飾カサ小野の夕霞ユフカ桃モモいろふかし春もいぬ  
らむ

二

この妻は寂しけれども浅茅アサチ生ナの露ツルキけき朝は裾  
かかけけり

三



草の葉に生れしばかりの露の泡螢はいまだ光  
りえなくに

三

山ゆくと妻をいたはりささがにのいふせき絲  
も我は拂ひつ

たまさかに來り眺めし山の池早や美しくしう水  
草生ひにけり

かるがろと雀飛びつき小枝の揺り揺りもやま  
ねば下覗き居る

香ばしく寂しき夏やせかせかと早や山里は麥  
扱きの音



紫蘭咲く

紫蘭しらん咲いていささか紅かき石の隈くま目に見えて涼  
し夏なつさりにけり

うしろ向き雀すずめ紫蘭しらんの蔭かげに居りややかに射さし入る  
朝日の光

月夜

月の夜のましろき躑つとむ躑つとむくぐりくぐり雉き子すひそ  
みたりしだり尾を曳ひき



燕

燕とまるただち揺らめく楊の枝時の間水につ  
きつつ反る

翔り翔る夕焼つばめ幾羽つばめ羽振疾けば裂  
尾のみ見ゆ

一羽とまりまた一羽とまる頬紅つばめ楊はい  
よよ揺れにけるかな

つぎつぎに留れば深し小枝の揺れひた縄りつ  
つ燕が四五羽

抗み騒ぎ枝にひた縄る燕の揺れ一羽は宙にま  
だ羽うちつつ



雨のころ

物の芽

何の芽か物の芽かをす雨ゆゑに今朝ふる雨を  
めづらしみぬる

雨滴

枇杷の葉の葉縁にむすぶ雨の玉の一つ一つ揺  
れて一つ一つ光る

枇杷の葉の葉縁にゆるる雨の玉のあな落ちん  
とす光りて落ちたり





蟹と竹

かさこそと蟹匍ひのぼる竹の縁すがすがと見  
つつ晝寝さめぬる

雨しづく見のすずしさや庭の小竹の揺るるさ  
きより蟹ころび落つ





蝸牛

蝸牛の角の秀さきの白玉は消なば消ぬべし振  
りのこまかさ

上つ葉にふと角ふれて蝸牛驚きにけむ身ぬち  
すくめつ



驚きてつと角退きし蝸牛またつくづくと葉に  
觸るわはれ

二四

螢

葉蘭の間に螢か居らし息づきつとある葉裏  
の青う明るは

晴日小閑

朝

矢のごとく時たま翔る小鳥のかげ山蔭に見え  
て晴天の風

二五





一天晴れて今朝けさし吹きまくつむじ風に吹きち  
ぎられて飛ぶ木の葉青し

云

晝

朝鮮風俗の繪葉書を見て

白妙びょうたのころもゆたけく笙しょうの笛ふえ吹きて遊べり韓かん  
の人かも





白妙のころもゆたけき韓人かんじんがのうのと挽く  
長柄大鋸ながえおほのこ

夕

この山はたださうさうと音すなり松に松の風  
椎に椎の風



松風の下吹く椎のこもり風なほし幽かなり雨  
もかもかかる

元

雑木の風ややしづもれば松風のごゑいやさ  
らに澄みぬ真間の弘法寺

鳥の啼くこゑ

かおかおと啼くは鶉。びよびよと啼くは雛。鶏。雀  
子はちゆちゆとさへづり、子を思ふ焼野の雉子  
けんけんと夜も高音うつ。現身の鳥の啼く音の  
なぞもかく物おはれなる。天わたる秋の雁金春  
くれば遠き雲井にかりかりと消えて跡なし。

元



棗の花

棗の花の咲くところ、光は強く、陽は青し。棗の下  
に啼く蛙、蛙と呼ばひ恍惚遊ぶ。棗よそよげ、青空  
に。

おなじく

花なつめ軍帽紅き騎馬の兵のつきつきにかが  
み今朝通るなり

我が庵の厠の裏のなつめの木花のさかりも今  
は過ぎたり



三谷に移る

前庭

いつしかに夏のあはれとなり  
にけり乾草小屋  
の桃色の月

紫煙草舎

噴井べのあやめのそばの竹棚に洗面器しろし  
妻か伏せたる

噴井べのあやめの下のこぼれ水雀飲み居りあ  
ふるる水を



向う土堤

夏淺み朝草刈りの童わらわらが素足にからむ犬胡麻  
の花

飯を食みつつ

現うつしみ身と生れたまひて吾がごとか飯いひ食さしけむ  
越こしの聖ひじりも

庭にわさきに雀すずめの頭あたまがうごいてゐるそれを見なが  
ら飯ま食たべてゐる

葛くわ飾かざりのふくら雀すずめの聲こゑさけばつくづく戀こひし父母  
の家



農家小景

淺夜

夏淺き月夜の野良の家いくつ洋燈つけたり馬鈴薯の花

馬屋の前

みそ萩の花咲く庭の夕月夜尻向けて馬屋に馬這入りをする

月の夜の堆肥の前の百合の花誰ぞや野風呂の湯氣にかがむは



背戸

カンナの花黄なる洋燈の如くなり子供出て來  
よ背戸の月夜に

三

月夜よし厩のうらの枇杷の木に啼く鶉ゐて露  
しとどなる

藪蔭

夕野ゆふの良らの小藪のこさかが下したの合歡あいかんの花はなもも色薄いろうすう揺れ  
て霧きりの雨あめ

夕野ゆふの良らの小藪のこさかが下したの合歡あいかんの花はなさきり雨あめかかかる  
雛燕ひなつばめのこゑ

三



螢四章

朝

河土手に螢の臭ひすすろなれど朝間はさびし  
月見草の花

夜

月の夜の堆肥の露に飛ぶ螢ほつほつと見えて  
近き瀬の音

螢飛ぶ淺瀬の蛇籠濡れ濡れて薄けぶり立てり  
月夜明りに



晝

孟宗竹に孟宗軽くかぶさる里こんもりと見え  
て前の蓮の田

幽かなる翅立てて飛ぶ晝の螢こんもりと笹は  
上をしだれたり

晝ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて  
消えたり

雨

一つ火のさ緑の螢息づき明り雨しとどふりし  
闇を今あがる



涼味

樗咲く

羽根そよがせ雀樗の枝に居り涼しくやあらむ  
その花かげは

時化前

短夜の槐の虹に鳴く蟬の濕りいち早し今日も  
時化ならむ

風空に朝の虹立つ時化もよひ燕群れて迅し田  
の上翔りつつ



雨間

菅<sup>すが</sup>壘<sup>だたみ</sup>今朝<sup>けさ</sup>さやさやし風に吹かれ跳<sup>と</sup>び跳<sup>と</sup>び跳<sup>と</sup>び輕<sup>かろ</sup>ろ  
き青<sup>あを</sup>蛙<sup>かへる</sup>一つ

嘴<sup>はし</sup>太<sup>ぶと</sup>の雨<sup>あま</sup>間<sup>あひ</sup>の鴉<sup>あま</sup>しみじみあそび蛙<sup>かへる</sup>引き裂<sup>ひ</sup>けば  
青<sup>あを</sup>き液<sup>しよ</sup>流<sup>なが</sup>る

日ざかり

松山

松山に松蟬鳴きて久しければ立ちとまる母か  
子の手を曳きて



膠煮てゐて

四

遠天に雷雲の底びかり蝶一つ舞へりこなたの  
田には

蛙一つ鳴き出でてふつと浸り黙るこのひとと  
きの池の面の照り

太鼓一つとんとろと鳴れり炎天の遠ひた寂し  
かも青田見てゐて

膠煮て銀泥溶かす日の眞晝何かしひそむ暗  
きけはひはも

破垣に日の照りまぶし思はぬにほつつりと一  
つ雨の粒落ちぬ

四



蜻蛉

日の盛り細くするどき萱の秀ほに蜻蛉とまらむ  
として翅はねかがやかす

ややに避よけて蜻蛉日かげにとまりたりそよぎ  
かがやく青萱のもと

かくれんぼ

静かにはひそめぬものか草深ぶかにこもらふ子ら  
が息の粗きらけさ

子供らが息のこもども青草にふかくこもらふ  
晝ひるふけにけり



澄みとほる葦間の日ざし明るければ啼くよし  
きりか一羽啼きてゐる

三

かくるれど我がつく息のおのづから弾みあま  
るかそよぐ前の草

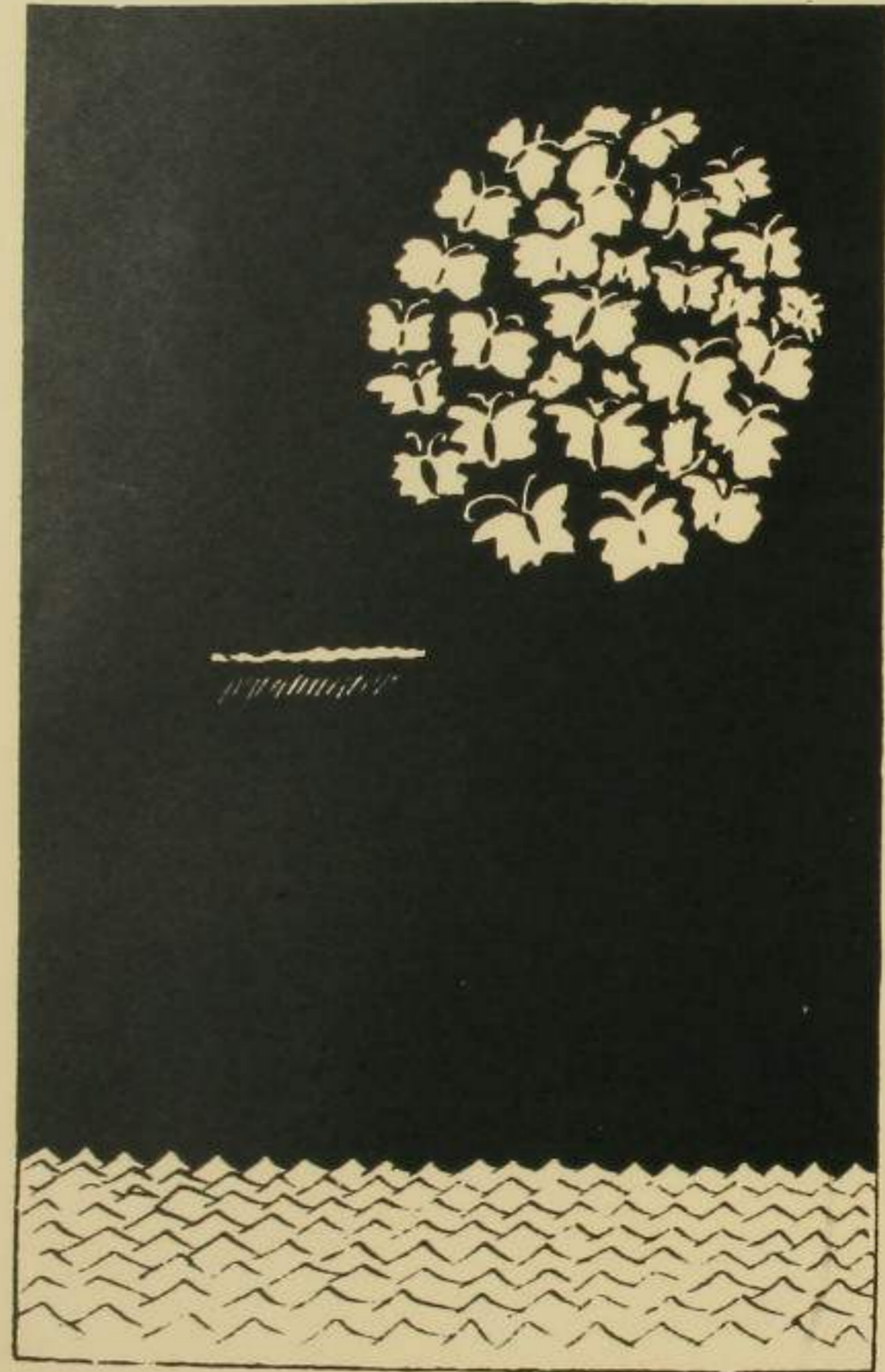
牛

何の花にほふ草生ぞ角さし入れうつつなく牛  
の勢ひ嗅げるは

白の牛寝そべる傍の野葡萄の瑠璃いろ玉の鈴  
生の房

五



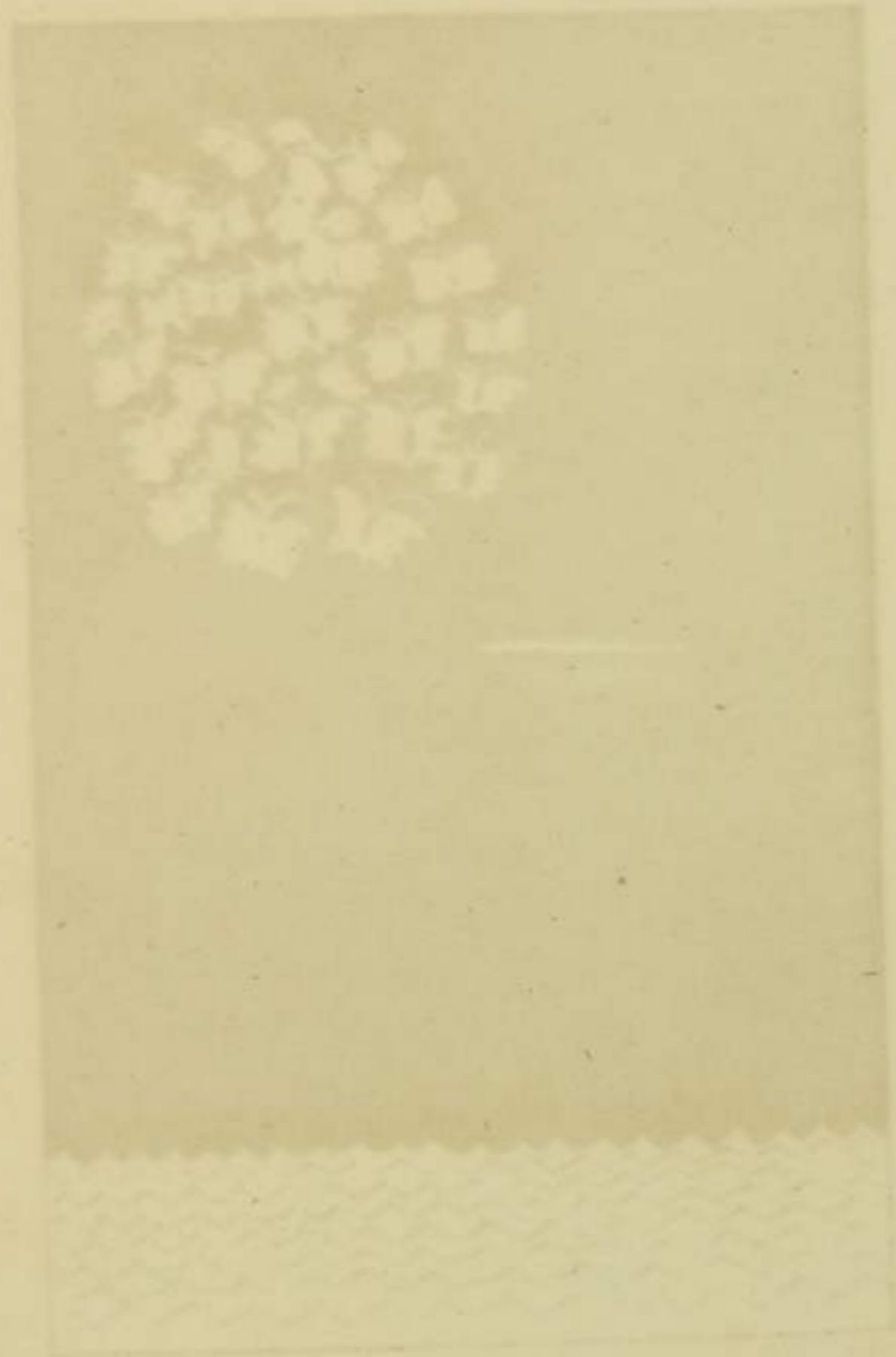


群蝶の舞

雪のごと湧きて翅ばたくまつ白の蝶下には暗  
きさざなみの列

鞠のごと空にあつまり翅ばたく蝶いづち指す  
らむいやさや上る





遠<sup>とほ</sup>雷<sup>いかづち</sup>とどろけば白<sup>しろ</sup>き蝶<sup>ちょう</sup>の鞠<sup>まり</sup>の耀<sup>かがや</sup>きてくづれま  
た舞<sup>ま</sup>ひのぼる

空<sup>そら</sup>ゆくは晚<sup>ばん</sup>夏<sup>か</sup>の蝶<sup>ちょう</sup>の白<sup>しろ</sup>き鞠<sup>まり</sup>いち早<sup>はや</sup>やほそく降<sup>ふ</sup>  
る雨<sup>あめ</sup>の音<sup>ね</sup>



揚羽の蝶

五

すれすれに夕紫陽花に來て觸る黒き揚羽蝶の  
毘大いなる

留まらむとして紫陽花の球に觸りし蝶逸れつ  
つ月の光に上る

アツシジの聖の歌

アツシジの聖フランチェスコの物語。フランチ  
エスコは雀子を愛しみ給ひき。雀子も慕ひまつ  
りき。現身の人にてませば、かの人も亦人のごと  
寂しくましき。寂しくて貧しくましき。寂しく貧  
しくましますが故、遼り、常に悲しくまします。

五



いといと悲しくましましき。それ故に末遂すゑに神  
を知らしき。その聖道ひじりのべに立たしたまへば雀  
子は御後のみごべ慕こひ、御手のみてにのり、肩にとまりき。さて  
ちゆんちゆんと鳴いたりき。あなあはれ、雀子よ  
とて雀子を撫でさすり、搔かい撫でさすり、僞いつはりりな  
せそ、むさぼりそよ、おのづからなれ、正ただしく、直ただく  
常童とこわらふにて、天地あめつちの神かみごころにも通へとぞ、悲かなしか  
れよと宣のたまりましき。御法のみほり説のたまかしき。雀子を愛をしみ

たまへば雀子も慕こひまつりき。雀子にも解ときや  
すき御言葉なれば、雀子も御言葉ををろがみま  
つり、羽根をすり頭つむぎさげてき、またちゆんちゆん  
と鳴いたりき。さて徒いたづらに物を欲ほり、浮うかれ、たばか  
り、盗ぬすまざりけり。僞いつはりらず、安やすらなりけり。かかる時  
草原に露満ちて、蟲鳴むしなきそそり、飾かざり無なき野の花  
のかをりも吹く風の涼すずしきままに、空は圓く澄  
みわたりにて、また、塵ちりひとつだにとどめざりけれ



ば、聖の御頭かすかに後光をはなち、差しのべた  
まへる兩つの御手の十の御指は皆輝きて、その  
掌の雀子さへも光るばかりに喜び羽うち、御前  
に輪を成す雀のむれもみなな雀の後光をか  
すかに立てて啼き、慌れ遊ぶ。フランチェスコは  
御空を仰ぎて、主よ、主の奴僕はかくありぬ、かく  
貧しきが故にこそ世のあらゆるもろもろの御  
寶をも却つて主のごとく、この身ひとつに保ち

まつる。ありがたや、ハレルヤとぞ涙ながして讚  
め禱りませば、雀もともに、ハレルヤ、ハレルヤと  
眼を上げ涙ながして御空を仰ぐ。現身の人の聖  
と現身の鳥の雀と、雀とフランチェスコと朝夕  
に常かくなりき。あなあはれ、よの常の事にはあ  
らずよ。温かき御心ゆゑぞ、大きな博き御心も  
てぞ、ありとある愛しみたまへば、御心は神にも  
いたり、雀にも通ひましけむ。あなあはれ人のこ



の世の現うつにもかかる聖みじのましまししものか。 三

贈り物

蓮の花と童

蓮の花を持って来よと云へばその莖もぎり花だ  
けを持って来この童わらはは



日の下もとに背伸しつのも兩掌もてにのせ白蓮の花を  
ささげたり子は

稲鉢いねばちに白き蓮はすをひとつ浮けて貧しき朝や乏とほし  
飯食めしふ

この朝や妻と眺めて白玉の米の飯めしはむ白蓮の  
花

曼陀羅村にて

赤茄子は麥藁帽を裏向けて受けてかかへつこ  
ぼれひかるまで

曼陀羅まんだらの爺おやが賜たまひたる蓮の實は黄蘗しやくさがりて  
よき纏まと如ごとす



こども

こどもがないてる、こどもが、こゑあげてないて  
る。どうしたどうした、こどもよ、わたしはあたま  
をさすつてやる。それでもないてる、こどもが、い  
つまでもないてる。どうしていいか、こどもよ、わ  
たしもなみだながれる。

おなじく

泣きやまぬ童<sup>わらわ</sup>が頭<sup>かぶ</sup>かい撫<sup>な</sup>でさすり泣くなとは  
云へど我も泣き居<sup>ゐ</sup>る



唐 黍

一

ながれ来て宙にとどまる赤蜻蛉唐黍の花の咲  
き揃ふうへを

六

二

Tobaccos の赤看板にとどくまで唐黍の花は延び  
揃ひたれ

微風に雀吹かれて唐黍の紅き垂毛に觸れつつ  
行くも

六



三

唐黍の紅<sup>あか</sup>き垂毛のふさふさと揺れて下ゆく人  
待つらむか

吉

今日もまた郵便くばり疲れ來て唐黍の毛に手  
を觸るらむか

四

そよかせに子供が遊んでゐる玉蜀黍<sup>とうもろこし</sup>はそばに  
真紅<sup>まゝか</sup>な毛を揺りてゐる

七



閑吟五抄

木の上に

とりどりに木の上にあそぶ雀子のそそり恍惚  
たる聲の羨しさ

貧しさに

貧しさに堪へてさびしく早稲の穂の花ながめ  
居りこのあかつきに

貧しさに堪へてさびしく一本の竹を植ゑ居り  
このあかつきに



朝咲きて夕にはちる沙羅の木の花のさかり  
を見ればかなしも 愚庵

沙羅双樹の花の盛りに赤と青の玩具おもちゃの雉子きじを  
賣ればかなしも

朝咲きて夕ゆふにはちる沙羅の木の花の木かげの  
山鳥の糞

百日紅咲く

百日紅の花のさかりとなりなりにけり眺めてを居を  
らな寂しがりつつ

百日紅の花も咲きたり時をりは遊びに來ませ  
やや遠くとも



寂しさや

六

寂しさやいつか挿したる酒甕の唐黍たうきびの花も盛  
り過ぎたり

寂しさや妻が盛りたる榼鉢かへちの夏菊なつぎくの中に雀飛  
び入る

米の白玉

一

ましら玉、しら玉あはれ、白玉の米、玉の米、米の玉  
あはれ。そを一粒、また二粒、三粒、四粒と數ふれば

七



白玉あはれ。うすき瀬戸白の小皿に幾すくひす  
くへどあはれ、かそかそと聲ばかりして、ころこ  
ろと音ばかりして、搔き寄せて十粒に足らず、ひ  
ろへれど十粒を出でず、かそかそところころと、  
聲するは音するは、空しき櫃かまの空櫃かまの米櫃かまの底。  
ましら玉、しら玉あはれ、白玉の米、玉の米、米の玉  
あはれ。

六

反歌

米櫃に米のかすかに音するは白玉のごとはか  
なかりけり

二

七



ましら玉、しら玉あはれ、白玉の米、玉の米、米の玉  
あはれ。そを一粒、また二粒、三粒四粒と數ふれば  
白玉あはれ、搔きよせて十粒に足らず、ひろへれ  
ど十粒を出でず。今は早や我は饑ゑなむを、我妻  
もかつゑはてむを、ましら玉しら玉あはれ。さは  
云へど米のしら玉、貧しとてすべな白玉、その玉  
を雀子も欲れ、ひもじきは誰もひとつよ、雀子も  
來ては覗き、饑ゑて鳴き、鳴きては遊び、遊びては

合

求食り、求食るを、米の玉あはれ。雀來よ、雀來よ來  
よ、いとせめて啄めよこの米、ひもじくばふふめ  
この米、汝らが饑ゑずしあらば、うまからば、うれ  
しくかはゆく鳴くならば、白玉あはれ。わがどち  
はこの我は、わが妻とても、今さらに食さずとも  
よし、食さずともよし。ましら玉しら玉あはれ、し  
ら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

合



反歌

饑ゑ饑ゑて雀がふむ米つぶはしら玉のごと  
かはかなかるらむ

三

ましら玉、しら玉あはれ、しら玉の米、玉の米、米の  
玉あはれ。絶ち絶ちて幾日をか経し、饑ゑ饑ゑて  
幾夜をか経し、この我や生きて貧しく、生きんす  
べせんすべだにもなきものを、米の玉、しら玉あ  
はれ。はづかなるあるかなきかの金を得て、かき  
よせて、市のちまたに米買ふと破れし囊を手に  
さげて、これに米、すこし賜べよと乞ひのめば入  
れて賜びけり、さらさらと入れて賜びけり。うれ



しくて走り出づれば金賜べと人の驚く。忘れた  
り、ゆるされませと赤らみて、金置きてまた駈け  
出れば、うしろより米はとおらぶ。驚きて、また忘  
れたり、ゆるされと、此度はしかと、しら玉の米の  
囊をひきかつかかへて戻る、米の玉、しら玉あ  
はれ。現なるこれや現か、ゆめならず、現なりけり。  
その現、現なるこそうれしかりけれ、果敢なかり  
けれ。しら玉の、ましら玉の、ましら玉の、しら玉あ

合

はれ。しら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

反歌

米を買へば金は忘れて金を置けばまたも忘れ  
つこれの米の玉。



犬と鴉

一

犬の子に白き飯皿、子鴉に青き飯皿、朝夕に同じ  
飯盛り、おのがじし食せよと呼べば、犬の子は己

六

が飯惜しと、子鴉は己が飯惜しと、犬の子は子鴉  
が飯、子鴉は犬の子が飯、ひたぶるに奪ひ取らむ  
と、ひたぶるに盗み食さむと、ただ啼きつ吼えつ  
噛みつす。己が飯はすでにあまるを、己が飯に足  
れりとはせで、なじかさは他の物欲る、なじかさは  
よその物欲る。同じことかはゆきものを、同じ  
こと飯は盛れるを、犬の子よ子鴉よあはれ。

七



あなあはれ、みぎりひだりに、子鴉と犬の子と寄  
 る。此方向けば子鴉あはれ、其方向けば犬の子あ  
 はれ。二方の鳥よ獸よ。ひとしけくかはゆきもの  
 を、同じけくかなしきものを、いづれ別きいづれ  
 隔てむ。かにかくに兩手あげつつかろく叩き、撫  
 でてあやせば、羽根はたき尻尾ふりきる。ひもじ

きかさらば食めよと、一つ掌に牛の乳盛れば、子  
 鴉はみぎりより来て、犬の子は左より来て、嘴と  
 口つつき合せて、啄き嘗め、啄き嘗めつす。また、そ  
 ねみ、惜み、にくまず。あなあはれ空飛ぶ鳥と、地を  
 匍ふ家の畜といつものまにかくや馴れけむ。なじ  
 かさはかくも親しき。これやこの人の我が掌に  
 相睦み和むを見れば、今さらに喜ぶ見れば、この  
 我やみぎりひだりに、とみかう見涙しながる。



月下の蝶

廿

ふど見つけて寂しかりけり月の夜の光に白き  
蝶の舞うてゐる

現まなき月夜の蝶の翅はねたたき藤豆の花の上に揺  
れてをる

田園の立秋

秋近し

目に見えて門田の稻葉吹く風もとりわけて今  
朝は秋めきにけり

九



百日紅の花の盛りを秋蟬のいち早はやに來て急き  
き啼けりあはれ

破障子ひたせる池も秋づけば目に見えて涼し  
稗草のかげ

おのづからうらさびしくぞなりにける稗草の  
穂のそよぐを見れば

門前の立秋

青すすき茅ち萱がおしなべ吹く風に鴉は啼けり空  
を仰ぎて

野分だつ薄の風に此方こ向きて子鴉が啼くよ口  
赤く開けて



畔

早や秋、早稲の穂づらを飛ぶ禽の一羽二羽輕し  
涼風の遠

風そよぐ早稲の穂づらの夕あかり先ゆく人の  
ふと振りかへる

空は晴れて

空は晴れて蓮と早稲田の間をゆく曳舟の子ら  
が聲の遙けさ

空は晴れて水遙かなり蓮の花風間に澄みて初  
雁のこゑ



蓮の花採り

六

下肥しもこえの舟曳ふねひく子らがうしろでも朝間あさまはすすし  
白蓮の花

足の泥落かどすひまなみ藁草履わらぢ手にもちて仰ぐ曉あけぼの  
の雁金

足の泥すすぎぬにけり蓮の花はすす風かぜの早稻はやいね  
の穂ほにあづけつつ

蓮の雨

鴉鳥からすの葛飾くわしやく野良のらの蓮の雨笠あまがさかたぶけて来るは  
誰が子たれがこぞ

七



木槿と雀

はらはらと雀飛び来る木槿垣ふと見ればすず  
し白き花二つ

はらはらと雀逸れゆく木槿垣風疾むらし花の  
揺れうごく

三日の月夜

鶉啼く粟穂が間の細り道三日の月夜に誰ぞ行  
き細る

人ひとり三日の月夜に行き消えてそのかの畑  
に齧蟲のこゑ



二百二十日

ほつほつと雀出<sup>で</sup>て來<sup>く</sup>る残り風二百二十日の夕  
空晴れて

月夜こほろぎ

久々に相見し父と湯をかかりて

大荒れのあとにしみじみ啼きいづるこほろぎ  
のこゑのあはれさやけさ

父の背に石<sup>シキ</sup><sup>ガシ</sup><sup>ツ</sup>つけつつ母のこと吾が訊<sup>き</sup>いてゐ  
る月夜こほろぎ



父の背に月の光は幅ひろく隈なけれども皺ふ  
かく見ゆ

101

父の肩眺め眺めてはたはたと叩けば愛し月夜  
こほろぎ

月讀の光明るし何處やらに歌ふをきけば我が  
幼な謠

### 庭前秋景

ふと時をり木賊の蔭を真白き猫耳立ててをど  
り何のけはひ無き

うつつなく木賊にうつる秋日の蝶驚きて立て  
ど何の氣はひ無き

101



良夜

月前秋景

月今宵背戸の畑の秋蕎麥に夜露ふりこぼれ晝  
のごと明し

月の前になびきそよめく黒き穂の蜀黍とうもろこしの穂の  
金色こんじきの縁へり

月の前に鎌ふり立つる蝸螂かまきりは青萱あおよぎの葉の光る  
葉にゐる

月讀おろての面に近くさらめくは青數珠玉あおずしゆぎよの秋風の  
こゑ



河べり

風立ちて雁啼きわたる横雲の今宵の月夜はろ  
かなるかも

せかせかと煙立てたり蘆間近く良夜の船か夕  
炊ぎする

庭前の秋

新らしく障子張りつつ茶の花もやがて咲かな  
とふと思ひたり

日向吹く風のほとりの稗草はこまごまと弱し  
光りそよぎつつ



稗草にをりふし紅くそよめくは水引草か交り  
たるらし

ひとつひとつ目につく庭の草の穂の絮毛は白  
しそよがぬぞなき

百日紅の落葉に明る陽の色はややうれしけれ  
ど秋も開けたり

松風

栗鼠

松が枝に太尾の栗鼠の耳たてて聴きすます風  
は山の秋の風



夕焼

110

山松の音のとわたる日の暮は夕焼の紅まき空も  
すべぞなき

山松の姿さびしき日の暮は障子早く閉めてひ  
とり飯食ふ

田圃の晩秋

向ひ風

稲いのみにひたむきに雀羽ばたく向ひ風いまや田圃たんぼは晩ばん

111



ひきひきに飛べばつれなし二羽三羽雀垂穂の  
野にひるがへる

三

日の暮の友なし雀心して飛べや田づらの風吹  
きかはる

夕照

華やかにさびしき秋や千町田の穂波が末をむ  
ら雀立つ

風に見えてしきり羽ばたく稲穂雀遠き穂づら  
にちりまざれつつ

ちりぢりに雀まざる垂穂波風は入日の田に  
吹きかはる

二三



穂づらはなれ風に羽たたく前向き雀あなかは  
ゆ白き頬がふたつ見えて

風に見えて雀羽ばたく穂波のすゑ今し大日は  
紅く落ちかかる

千羽雀騒ぐ田の面の垂穂波揺れて遙かや夕照  
寒く

庭前の晩秋

落葉

落葉多しすこし掃かめと掃さるたり夕さり寒  
き日射に向ひて



閑けさ

二三

閑けさ  
秋ふかむ夕日明りや枯小竹に雀羽ばたくその  
閑けさを

閑けさや雀飛び去る小枝のゆれ揺れてとまら  
ねまた一羽來つ

水邊の晩秋

薄に雀

ほつほつと雀飛び出る薄の穂日暮まぢかに眺  
めてゐれば

二二



泊り船

入り急ぐ時雨の船か蘆の外にまだはみ出して  
梶大いなる

冬日小閑

射干

かよわなる薄陽の光線射干の細葉は透けど早  
や消なむとす



椰子の實

椰子の實の殻がらに活けたる茶の花のほのかに白  
き冬は來にけり

椰子の實の殻がらにからびし葉煙草の刻きみの粉こなの  
觸ふりの細こかさ

獨樂

今やまさまさに廻り澄まむとする獨樂の聲かなし  
もよ地つちに据わりて

閑ひまかなる響のよさや獨樂ひとつ廻り澄みつつ  
正ただしく据わる



獨樂二つ觸れてかなしも地の上に廻り澄みつ  
つ觸れてかなしも

三

獨樂の精ほとほと盡きて現なく傾ぶさかか  
る揺れのかなしさ

新酒

鳩鳥の葛飾早稻のにひしほりくみつつあれ  
ば月かたぶきぬ 眞淵

鳩鳥の葛飾早稻の新しほりかたむけ笑らぐ冬  
ちかづきぬ

鳩鳥の葛飾早稻の新しほりころもに換へむい  
ざや酔はしてな



時雨

松風

松風のしぐるる寺の前まへ通とほとほる人はあれど日の暮れの影

松が根

松が根に夕さり明あかる薄の穂ほとほとにさびしうちそよぎつつ

松が根にときたま來きたる夕時雨薄は寒し濡れそよぎつつ



朝

こまごまとちらばり寒き小禽のかず木々の時  
雨に今朝も遠く見ゆ

木々うつる寒き小禽の羽のたたき時雨明りに  
濡れしぶきつつ

日の暮

夕されば裏の葭簀をはたはたと煽りし風もい  
つか落ちけり

破垣にはづかにのこる陽の明り消ぬかになれ  
ば雨そそぐ音





田圃

目に見えて冬の陽遠くなり  
にけりきのふもけ  
ふも薄くみぞれして

いよよ寒く時雨しぐれ來る田の片明り  
後あとなる雁が  
まだ明る見ゆ





初夜過ぎ

田<sup>た</sup>末<sup>すえ</sup>わたる時雨の雨は幽<sup>お</sup>かながら初<sup>はつ</sup>夜<sup>や</sup>過ぎて  
出づる月のさやけさ



霜の田

菱形ひしがたに白く霜置く田の畔あぜの寒さむ々さむしもよ遠く續  
きて

風さむき今朝けさの霜田の幾曲り馬に菰着せ吹か  
れ行くは誰ぞ

白妙の不ふ二にを畔あぜ木の遙はるに見て子らは犬追ふ霜  
田つづきを

鴉一羽霜田かすめてかおかおとこがらしの枝  
に今とまりたり



霜と雀

三

暗き空の下したに明りて一きは白く霜つけし枝は  
百日紅の枝

枝にゐて一羽はのぞく庭の霜雀つくづく鳴き  
ふふみつつ

むきむきに雀啼き出でる枝の霜まだ陽は射さね  
散きり霧らひつつ

雀が二羽ころげ羽ばたくうつなさ落ちむと  
してはまた飛びあがる

三



立枯並木の歌

霜ふかき野川の堰、あはれよと今朝見に來れば、  
いつとなく水量涸れつつ、隙間なく氷張りけり。  
枯すすき、土堤の枯草、凍りつき白くさびしく、雨  
側の立枯並木いよいよに白くさびしく、雪空の  
薄墨色にこまごまと梢明り、下空の小枝のほそ

枝立ちつづき見れども飽かず、入り交り網目し  
て透く。兩側の立枯並木下見れば一側並木、時を  
りにとまる鴉もその枝の霜にすぼまり、渡り鳥  
ちらばる鳥もその空に薄煙立つ。風吹けばかす  
かに揺れ、雪ふればいよよしづもり、さむざむと  
時雨るる夜半も、月あかり落ちゆく曉も、消なん  
とし消たずかすかに、現にもうつしけなくも、た  
だ寂し薄し果敢なし。霜ふかき野川の堰今朝も



また氷張りけり。その川の兩側つづき、隙間なく  
枯木つづけり。あはれあはれ立枯並木。

### 潮來の入江

すな真菰、真菰が中に菖蒲さく潮來の入江、はる  
ばると我が求め來れば、そのかみの潮來の出嶋  
荒れ果てて今は冬なる。旅やどり、消ゆるばかり  
に一夜寝て寝ざめて見れば、霜しるし水の邊の  
柳、何一つ音もこそせね、薄墨の空の霧らひにた



だ白く枝垂れ深めり。枝垂れつつ水にとどけり。  
また白き葦にとどけり。そのかげの小さき苦舟、  
いよいよに霜の凍りて、こまこまと霜の凍りて、  
舟縁も苦も真白く櫓も梶も絶えて真白し。つく  
づくと眺めてあれば、閑かなる入江のさまや、苦  
舟にのぼる煙も風無けば直ぐに一すぢほそぼ  
そとしばしのぼれり。廣重のその繪の煙、目に見  
れば浮世なりけり。あなあはれ水の邊の柳、あな

あはれかかりの小舟、寂しとも寂しとも見れ。折  
からや苦をはね出て、舟縁の霜にそびえて、この  
朝の紅き鶏冠の雄の鶏が、早やかうかうと啼き  
出けるかも。



潮來抄

一

軒下に四五羽擦り寄り庭つ鳥の雨間待ちつつ  
夜は近づきぬ

雨しぶく腰高障子あかあかと早や燈に明れ外  
にすぼむ鶏

二

うるこ雲月に片照り置く霜の楊に白し明けに  
けらしも



河真菰薄かすめて下りる雁の羽の音近し夜の  
明けの霜

三

この道の茶の花垣の寒霜に雀聲して陽の遠く  
射す

一四

田家の冬枯

一

枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと  
遠し日の暮の風

一四



かさこそと掛<sup>か</sup>稻<sup>い</sup>の裾<sup>すそ</sup>出<sup>で</sup>る畔<sup>ほとり</sup>雀<sup>すずめ</sup>陽<sup>ひ</sup>のまだ残<sup>のこ</sup>る穂<sup>ほ</sup>  
を搔<sup>か</sup>きわけて

ひとつひとつ雀<sup>すずめ</sup>出<sup>で</sup>て來<sup>く</sup>る掛<sup>か</sup>稻<sup>い</sup>の外<sup>と</sup>のこり陽<sup>ひ</sup>遠<sup>とほ</sup>  
し早<sup>はや</sup>や時<sup>とき</sup>雨<sup>あめ</sup>れつ

刈<sup>かり</sup>小<sup>こ</sup>田<sup>た</sup>に落<sup>お</sup>穂<sup>ほ</sup>搔<sup>か</sup>き搔<sup>か</sup>く雀<sup>すずめ</sup>いくつうしろ向<sup>むか</sup>ける  
は尻<sup>しり</sup>尾<sup>お</sup>上<sup>あ</sup>げて忙<sup>いそ</sup>し



野良の晩冬

枯尾花

ねんごろに夕陽宿せる枯尾花水車踏み出し揺  
れかがやさぬ

薄と牛

ふかぶかと揺れの近づく薄の穂いよよ輝き牛  
曳かれ出づ

曳かれ出でてうしろ振り向く眞黒牛の片眼輝  
きぬ穂薄の風



蒲の穂

蒲の穂のさむざむ明る澤の曲くま驚多くるれど聲  
ひとつせぬ

たまさかに明あかる薄陽うすひのか遠くて夕さり寒し蒲  
の穂の立たも

蒲の穂に葦の穂先はとどかねどとどかねなり  
に揺れの寒けさ

蒲の穂にひとひら白き冬の蝶ふと舞ひあがる  
夕空の晴はら



雀の宿

柿日和

わが宿は雀のたむろ冬來れば日にけに寒し雀  
のみ群れて

追はれ追はれ木へ逃げたかる田圃雀一としき  
り鳴けば夕かけり疾はやき

一しきり鳴きて飛び去るむら雀枯れしほづえ  
には赤き柿いくつ

百舌鳴けり柿のほづえにただ一羽雀つぐめり  
柳に四五羽



古池の朝

一五

古池に寒うしだれし枯柳向うに小さく白き不  
二見ゆ

古池に破れて陽の射す葭簣垣今朝も寒むそな  
雀が一羽

一色に

一色に寂びれはてたる冬の庭夕さり明るやや  
しばらくは

今さらに寂しと云ふもあはれなり荒れはてし  
庭をひとり眺むる

一五



ただ一つお庭に白しすべすべと嘗めつくしける  
犬の飯皿

一五

古池のそばにすがれし河楊不意にうごかす雀  
が白く

未廣に陽のかけららしほそり木の枯木の空の  
氣遠き見れば

咳すれば

咳すれば寂しからしか軒端より雀さかさにさ  
しのぞきをる

さびしきか雀廂の破れ間より頭うごかす逆さ  
頭を

一五



かげ

古池に破れし葭簣のかげうつり明るけど寒し  
日の傾きぬ

むきむきに雀すぼまる枯木の枝夕さり寒し陽  
のかげりつつ

ふと見たら

ふと見たら破れた垣根の隙間から銃口が出て  
る雀射つかあなや

誰ぞ誰ぞ雀射つなと荒らけく聲かけて寒し障  
子閉めたり



この冬は

二五

この冬は貧しかりけり庭つ鳥の餌をひろふか  
にひろふ飯の粒

貧しきは堪へむ然れどこの風のこの寒さには  
今は堪へ得ぬ

今さらに

たまたまに障子にあかる薄陽のいろうれしと  
は見れどすぐ畏りつつ

折ふし障子ひびかす羽根の音雀ぞと思へどほ  
とほと寂しき

二五



寂しさに堪へてあらめと云ひにけり堪へてあ  
りけりまづこの冬は

二六

今さらに云ふ事は無し妻とゐて夕さりくれば  
燈をとぼすまで

玄米の粉がらくさき飯ながらほかほかと食め  
ばあたたまるもの

追  
儼

貧しけば豆なとまかめと櫛かけてさびしき妻  
や鬼は外と云ふ

やはられて逃げゆく鬼のうしろかげ鐘馗が睨  
むふりのをかしさ

二七



冬枯遺抄

刈小田

暮近き日あし選り來て田の縁に出てる鳴か  
此方向けるは

田の畔

枯芝に枯芝いろの蝶ひとつやすらふほどの日  
の光あはれ

枯芝に冬の日暮の蝶ひとつやすらひて久しふ  
と離れたり



古利根

一人見つ二人また出つはるばるとそよぐ河原  
の風の穂すすき

風に出でてながめながめてゐたりけりはるば  
るしさよ河原すすきは

寒

路上

路に出でていつかちらばる野良雀今朝も寒さ  
かひとつひとつ動く



空

寒空を一羽風切る翼の冴え寂び極まるか雀ち  
ちと鳴く

野川

下肥しもごえの舟曳ふねひくならし夜の明けて野川の氷こゑ  
たつるなり

夕照

寒むざむし背戸の水田のうす氷茜あかねさしつ々夕  
焼早し



山松風

松ばかり生ふる山かも風吹けばたださうさう  
と松風の音

松風の澄み吹くところ寺ありてねうはち鳴ら  
すそのねうはちを

同じく山上

吹きとほる山松風の向ひ風群禽の團は早や近  
づきぬ

吹きとほる山松風の空近く吹き散らさるる群  
禽のこゑ



夜の雪

この夜も雪はふりけり。かの夜も雪はふりけり。  
その聲や靈も消ぬかに、降り積り消ぬる白雪。白  
雪のふれば幽かに、たまゆらは澄みてありけど、  
白雪の消ぬるたまゆら、仄かなるまたも消にけ  
り。白雪の果敢な心地の我身にも遣る方もなし。

竹あちこち

竹あちこちちよるちよる川に日の射して水車  
かかれり寒き鶏のこゑ

竹あちこちちよるちよる川に日の射して尾花  
かがやけり寒き石の上



浅春雑歌

椿

山ゆけばお山で赤い落椿ひとつひろはな道の  
なぐさに

春立つ

巢をつくる二羽の雀がうしろ羽根かすかにそ  
よぐ春立つらむか

軒の端に雨のしづくの白露のこぼるる見れば  
春は來にけり



雨後の月

雨ふくむ春の月夜の薄雲は薔薇いろなせどまだ寒く見ゆ

雨のこる萌黄の月の圓き暈いまだ寒けれど遠く蛙啼く

春の耕田

春浅み背戸の水田のみどり葉の根芹は馬に食べられにけり

夕雨のしみにそそぐ茨の垣萌えいづるそばに馬近づきぬ



春といへどまだ寒むからし茨の葉に面寄する  
馬の太く嘍る

三

雨ほそき破垣ちかくひそひそと田を鋤く人の  
馬叱るこゑ

春 雨

霧雨のこまかにかかる猫柳つくづく見れば春  
たけにけり

垣越しによきしめりよと云ふ聲のうれしくぞ  
きこゆ田を鋤けるらし

七



夕べの虹

二六

思はぬに虹立つ空の夕明り笠ふりむけて誰ぞ  
や仰ぐは

虹の輪の七色ふかき片裾は雨しとどなり早苗  
田の上

虹の輪にひとしほ冴ゆる早苗田の水田の遠の  
燈火の列

ひさかたの天の彩虹ふりあふぎ今わがどちは  
夕餉食す

雨ふくむ野良の新樹の空ちかく消ぬかの虹の  
まだ斜なる

二五



輪廻三鈔



鍊國三驗





序

大正三年六月、我未だ絶海の離嶋小笠原にあり。  
妻は曩なほに一人家に歸り、すでに父ちち母ははとよろし  
からず。七月我更に父母の許もとに歸り、またわが妻と  
よろしからず。我は貧し、貧しけれども、我をして  
かく貧しからしめしは誰ぞ。而も世を棄て名を



棄て、更に三界を流浪せしめしは誰ぞ。我もとよ  
り貧しけれど天命を知る。我が性玉の如し。我は  
これ畢竟詩歌三昧の徒、清貧もとより足る。我は  
醒め、妻は未だ痴情の戀に狂ふ。我は心より畏れ、  
妻は心より淫る。我父母の爲に泣き、妻はわが父  
母を譏る。行道念々、我高きにのぼらむと欲すれ  
ども妻は蒼穹の遙かなるを知らず。我深く涙垂  
るれども妻は地上の悲しみを知らず。我は久遠

の眞理をたづね、妻は現世の虚榮に奔る。我深く  
妻を憫めども妻の爲に道を棄て、親を棄て、己れ  
を棄つる能はず。眞實二途なし。乃ち心を決して  
相別る。その前後の歌。



流  
離  
鈔



風  
懷

一

大わだつみの波にただよふ椰子の實のはてし  
も知らぬ旅もするかも



小笠原三<sup>さん</sup>界<sup>がい</sup>に來て現<sup>うつし</sup>身<sup>み</sup>やいよいよ瘦<sup>う</sup>せぬ飯<sup>いひ</sup>は  
食<sup>は</sup>めども

珊瑚寄<sup>かり</sup>る嶋<sup>じま</sup>の荒<sup>あ</sup>磯<sup>いそ</sup>にいとまなみ昨<sup>きの</sup>日<sup>ふ</sup>も今日<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>も  
瘦<sup>う</sup>せて章<sup>た</sup>魚<sup>こ</sup>突<sup>つ</sup>く

一人のこる

南海の離<sup>り</sup>れ小嶋<sup>こじま</sup>の荒<sup>あ</sup>磯<sup>いそ</sup>邊<sup>べ</sup>に我<sup>わが</sup>が瘦<sup>う</sup>せ瘦<sup>う</sup>せてゐ  
きと傳<sup>つ</sup>へよ

あるかなく生<sup>な</sup>きて残<sup>のこ</sup>れば荒<sup>あ</sup>磯<sup>いそ</sup>邊<sup>べ</sup>や俊<sup>しゅん</sup>寛<sup>かん</sup>ならね  
身<sup>み</sup>は瘦<sup>う</sup>せにけり



愛妻を遠く還して離れ嶋に一人残れば生ける  
心地なし

一五

風疾き嶋の荒磯に立つ煙消なば消ぬべし歸る  
すべなし

我やひとり離れ小嶋の椰子の木の月夜の葉ず  
れ夜もすがら聴く

嶋の永日 一

嶋の子

嶋の子は嶋を廣しと海鼠突き章魚突き笑らぎ  
遊び廻れる

一六



海 龜

日に照られ波にさらされ海龜の甲羅の苔も青  
寂びにけり

荒磯の洞

小笠原嶋荒磯の洞に寄る波のゆたのたゆたに  
目の永きかも

小笠原嶋ブラボが岬に巻く渦のこほろこほろ  
に故國ぞ戀しき

三日月山三日の月よりなほそく傾く山にか  
かる白瀧



和田の原なだれ逆巻く波間より煙あがれり船  
通ふらし

一四

信天翁

日はひねもす信天翁のたいふといふ鳥ののろのろを  
をさけば悲しも

陸のに來てはころげ羽ばたく阿呆鳥のどり逃げよとす  
れど歩まれぬかも

弟嶋を眺む

沖つ嶋荒磯のの鷗こゑ寂びて飛びあへぬかも風  
變かるらし

一五



嶋の永日 二

椰子の實

椰子の實の椰子の梢にからからと鳴りて明る  
きひと日なりけり

永き日の椰子と椰子との葉ずれより氣遠きも  
のはあらじとぞ思ふ

玉

玉蜀黍かがよふ中にうつら來てしばらくはゐ  
しか誰か去りたり



しづけさや黍は黍とし照り恍ほけて遠き葉ずれの音立てにける

二六

金色こんじきの日の光ばかりそよぐなり丘のかなたの玉蜀黍は

護謨の葉

護謨ごもの木の畑はたの苗木の重き葉の大きな葉のふとひびらぎぬ

肉厚く重き護謨の葉かがやき久ひさしおのづからふかき音たてにける

晝深きかがやきのはてはつたりと護謨の厚葉が垂れ暗くらみたり

二五



歸途

歸心矢の如し

父嶋よ仰ぎ見すれば父戀し母嶋見れば母ぞ戀しき

ちちのみの父の嶋より見わたせば母の嶋見ゆ  
乳房山見ゆ

父嶋のそばに兄じま弟じま母のそばには嫁妹  
じま

歸らなむ父と母とのますところ妻と弟妹が睦  
びあふ家



松風と雀

青ヶ島一名鬼ヶ島ともいふ

波まくら幾夜經にけむほのぼのと今朝目さむ  
れば松風の音

恐ろしき鬼ヶ島ちふ鄙の島その荒磯邊の松風  
のこゑ

さうさうと松風騒ぐ青ヶ島悲しとはきけどこ  
こも日本邊

世の中は常かなしもよ沖の島ここの邊士の松  
風のこゑ

あな愛しここは日本の青ヶ島つくづくと聽け  
ば雀子がこゑ



鬼ヶ島沖の小島の荒磯邊あらいそに遊ぶ雀あひすのこゑの愛あなしさ

109

人にきけば鬼ヶ島ちふ鄙あひすの島その荒磯あらいそにも雀  
むれあそぶ

歸京

小笠原三界さんがい出でてはるばると歸りつきたりこ  
の戸開ひらかせ

小笠原の海の土産は何々ぞ珊瑚椰子の實大き  
ごむの葉

ひさびさに仰ぎまつれば涙なりこの父母ちちははを棄  
てて遊びき

110



別  
離  
鈔



蒼天に向つて

蒼天あそぞらを見て驚おどろかぬ賢まかしびと見ておどろけやい  
にしへのごと

ひさかたの四方よの天雲地あまぐもに垂りて碧々あざしかも  
蓋きりかざのごと



大空を見ておどろかぬ浦安の青人草がこころ  
知らなく

三〇

天つ日の光に馴れて世人みな眠たごころの未  
だ飽かなく

幼子を見よ彼等あそぶと蒼空の大圓蓋を我物  
にせり

常高く何か坐すとは仰げども遙ばろしかも空  
のあなたは

遙ばろし空を仰げばますらをのこぼるる涙と  
どめかねつも

わが行はのどにはあらずよ白鷺の浮足吾妹く  
るしくば去ね

三一



妻  
に

草の葉を見よ

思へ妻草の隻葉なまはのひとひらも天つ光に濡れか  
がやくを

我は貧し

天地あめつちを泣きくつがへし幾千日いせんじち泣きひたすとも  
我は貧しき

青山あおやまを枯山かやまになして泣きいざちて泣きおらぶ  
とも我は貧しき



金は無し

二四

父母の裂けしころものほころびを縫ふ針すら  
も無きを吾妹よ

金なければ憎し隔れば戀しちふかかるとかしき  
事あらめやも

この父この母この妻

一

老いらくの父を思へばおのづから頭ふかく垂  
れ安き空しなし

二五



ははそはの母に向へばおのづから涙はふり落  
ち来て答ふすべしなし

三六

二

うち背ひ妻を憎めば火と燃えて笑ひひたせま  
る大きな眼おもほゆ

三

垂乳根の親とその子の愛妻と有るべきことか  
仲違ひたり

垂乳根の母父ゆゑに身ひとつの命とたのむ妻  
を我が離る

三七



ますらをや貧しきばかりにうつしみの命とた  
のむ妻に嗤はる

噴あげて笑ふ男子が眼の痒ゆさ霹靂なし妻に  
噴ばゆ

別  
れ

今さらに

今さらに別れするより苦しくも牢獄に二人戀  
ひしまされり



今さらに別ると云ふに戀しさせまり死なば  
死ねよと抱きあひにけり

三〇

その時

うつし世の千萬言の誓言もむなしかりけり今  
わかれなる

わが妻が悲しと泣きし一言は眞實ならしも泣  
かされにけり

三界に家なしといふ女子を突き出したるまた  
見ざる外に

ほとほとに戸を去りあへず泣きし吾妹早や去  
りけらし日の傾きぬ

三一



妻を歸して

貧しさに妻を歸して朝顔の垣根結ひ居り竹と  
繩もて

の苗  
苗や苗胡瓜の苗や茄子の苗苗はいつくし朝顔

別後

苦しさに

苦しさに聲うちあぐるたはやすけどおとなし  
く堪へて幾日籠るは



思ふままに聲を放ちて喚く子がその朗らけき  
心ともがな

三言

追憶

代々木の白樫がもと黄楊がもと飛びて歩りき  
し栗鼠の子吾妹

淺編笠すこしかたむけ鳳仙花見入りてし子が  
細りうしるで

空はまるく海ははるけしここは妻よ牢獄なら  
ずとうち叫び寝し

かの庵よまこと佛のおはすかに聴きの澄みし  
か雪の夜さりは



別れては離れ小島の椰子の木のすべなき我や  
夜も一夜眠ず

三六

女色

たわやめの色に溺れてこの三年おぞや大事を  
我が忘れたり

大聲に笑ひすませば足るものをとほ云ふもの  
の涙こぼるる

憐憫

この我や心いたらぬ女子をあはれとは思へ憎  
みあへなくに

三七



現世の身のあはれさを思ほゆる憎しとは思へ  
女なりけり

三六

悲願

我を擧げて人をあはれと思ふ日のいつかは來  
らむ遙かなりけり

隼人

蟹味噌

蟹を搗き蕃椒たうがらし搗り筑紫びと酒のさかなに嗜む  
夏は來ぬ

三五





筑紫の三瀨男子が酔ひ泣くと夏はこぞりて蟹  
 搗きつぶす

三〇

蟹の味増強く噛みしめはしけやし夏は葦邊の  
 香に咽せてけり

蟹味増の辛き蟹味増噛みつぶし辛くも生きて  
 忍びつるかも





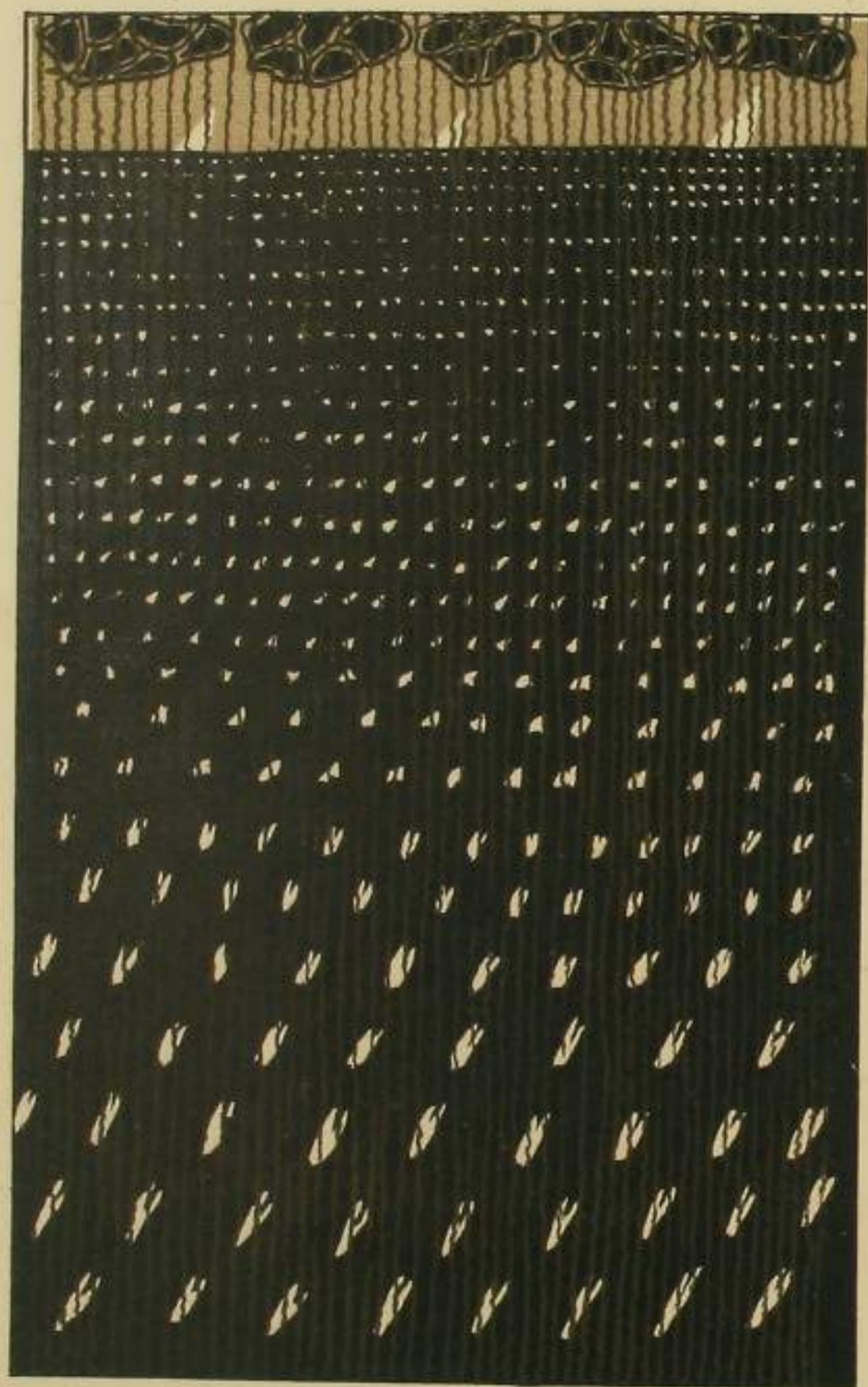
この我や響するどき蟹味噌の蟹し噛まずば慰  
まずけり

兵 兒

九州者な横道者青竹割つて兵兒にかく

青竹割り翠丸締め込む不知火の南筑紫のます  
らを我は





田打蟹をおもふ

黒崎潟潮干てゆけば田打蟹はるばると湧くこ  
ゑの寂しさ



途上所見

ろくろ

思ひ屈ししばし見惚れつ晝さがり陶器師の廻



見つつゐて寂しかりしかいつしかと我を忘れ  
つろくろ廻まはせる

父母も妻も思はずろくろ繰り廻るろくろをた  
だに見ほれつ

ろくろ見るろくろ廻るかただうれし陶器師すゑものは  
ろくろ廻せる

ろくろ見るろくろまたなし己おのれなし陶器師すゑものは  
ろくろ廻せる

子供の野球

球たまを打つ音のよろしさ聞くさへや心は晴るる  
悔くしき時も



球投ぐる振のよろしさ見るさへや心はをどる  
苦しき時も

三

眞向より飛び来る球待ち構ふる張りきらむず  
る立ちの雄々しさ

童こそはひたむきなれ火のごとく飛び来る球  
を音高くうつ

童こそはひたむきなれ火のごとく飛び来る球  
を身をそらし取る

童こそはひたむきなれ傍目ふらず飛び逸れ球  
をひた走り追ふ



夜祭のころ

十五夜

夜祭の萬燈の上にいよいよあがり大きなるか  
も今宵の月は

あかあかと十五夜の月街にありわつしよわつ  
しよといふ聲もする

何ごとも夢のごとくに過ぎにけり萬燈の上の  
桃色の月

今宵はも三五十五夜照る月の光もさやかわが  
ひとり寝る



朗らなる満月の夜に萬燈とぼり心さぶしも我  
が軒通る

満月と鴉

眺むれば満月光に飛ぶ鴉一羽二羽三羽五羽と  
飛ばなくに

鴉飛びて朱の満月過ぎるとき鮮かに見えつ太  
き嘴くちばし

ひさかたの満月光に飛ぶ鴉いよよ一羽となり  
てけるかも



發  
心  
鈔



良夜

路次

あかあかと十五夜の月隈なければ衣ころもぬぎすて  
水かぶるなり



月の夜に水をかぶれば頭より金銀瑠璃の玉も  
こそちれ

陰影

圓かなる月の光のいはれなくふと暗がりて來  
るけはひあり

月の夜の白き霧雲もくもくとながれて盡きず  
夜灯の上

現身

幅廣き月の光に在り馴れず我は心もいと細り  
寝る



今宵また寝なむひとりかかにかくにわれは佛  
にあらぬものをよ

二頁

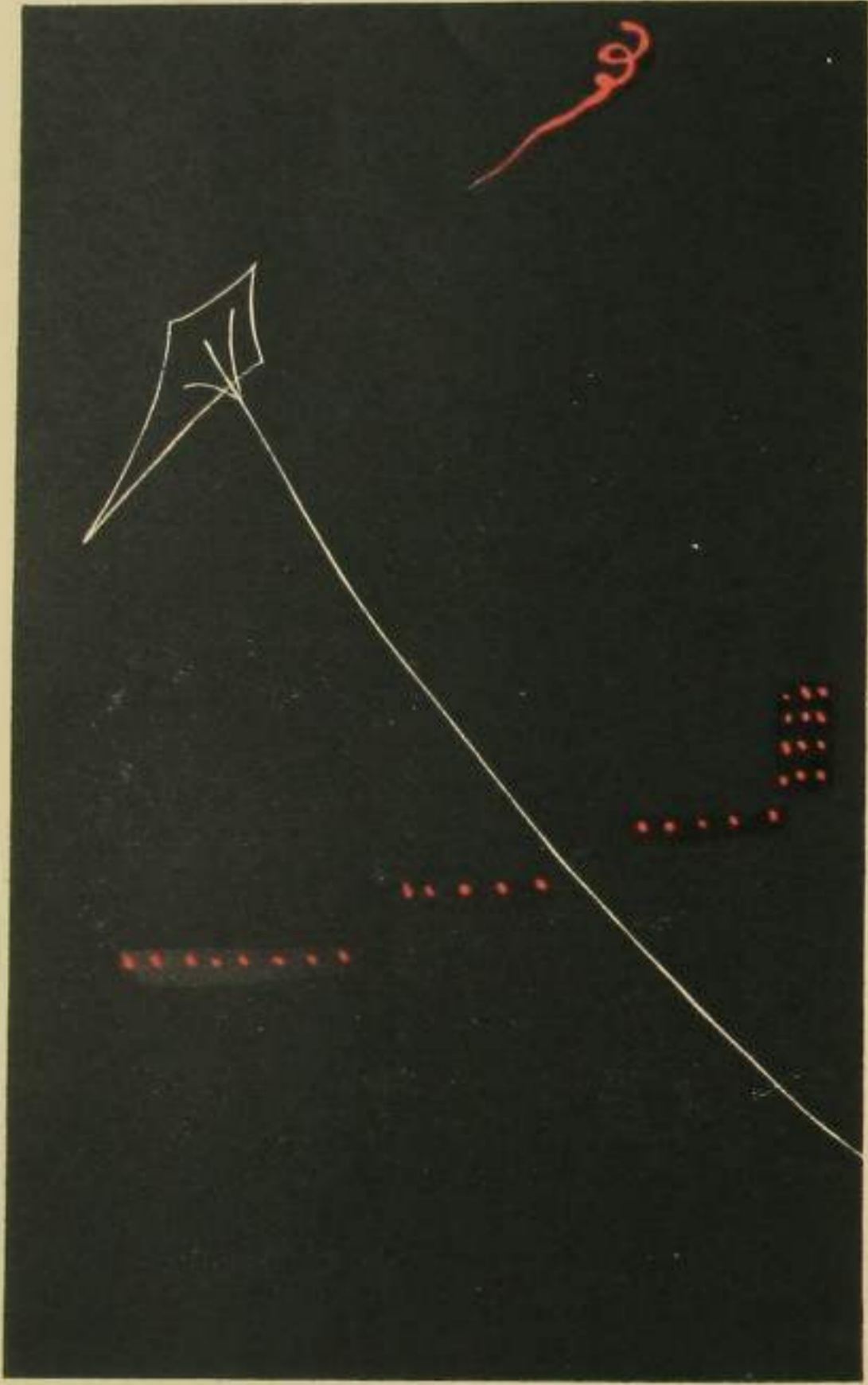
中秋

澄みに澄み澄みに澄みたる中空の月のまはり  
を飛ぶものあり

かうかうと月は明りてわたれども人の身我は  
飛ばれざりけり

しろたへの衣きぬなほ干す屋根の上に月いよよ澄  
みていよよ白しも



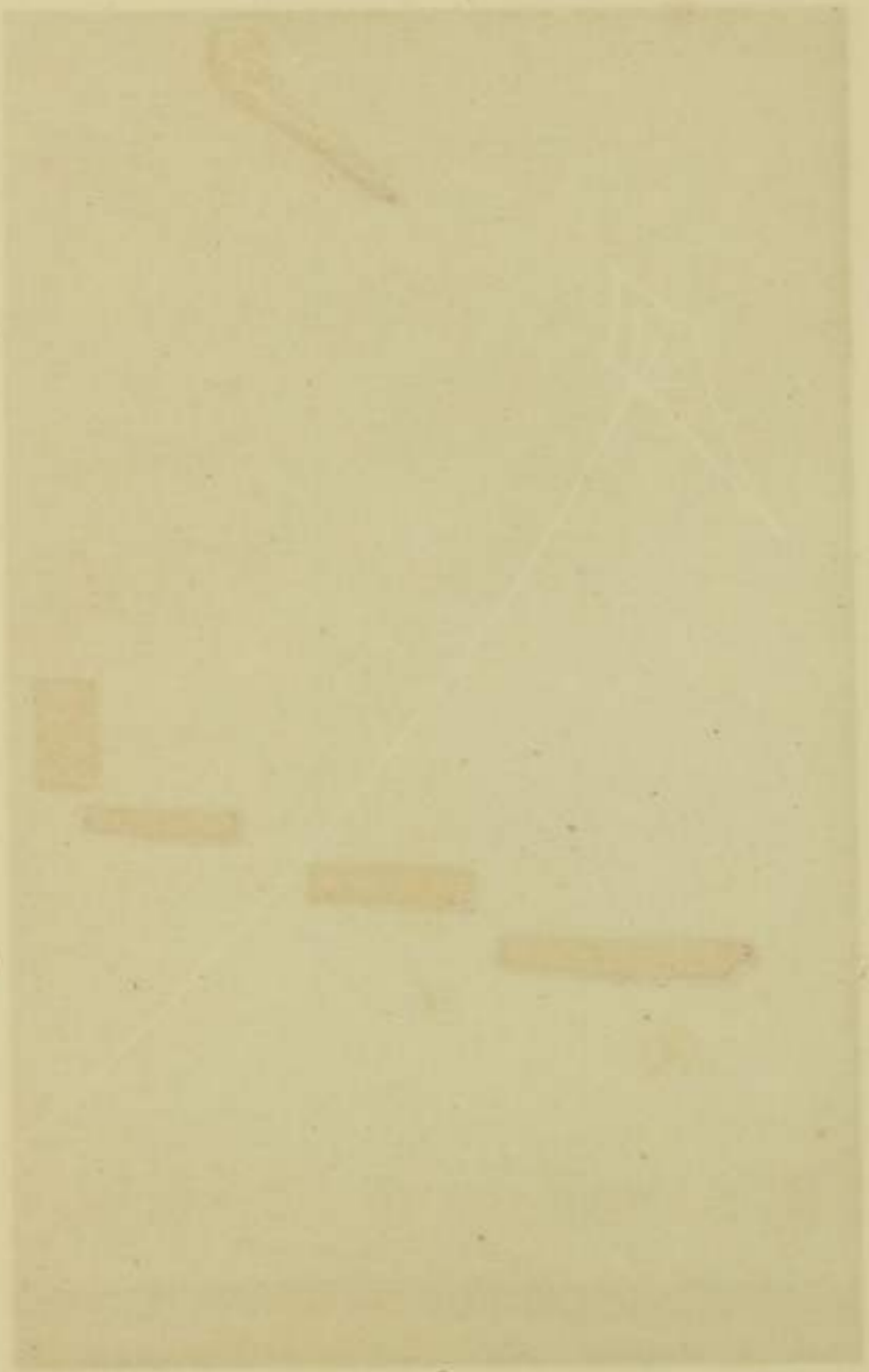


暗夜感電

鳥羽玉の暗き夜ふけに空高く風ひとつあげて  
ゐる人のあり

ただならぬ電光の赤き閃きの下夜空に揺れて  
風ひとつあがる





火花ちらす電光の下もとに放つ絲のそのひとすぢ  
の末に風舞へり

夜をこめて空に幽かに揺るる風の何かしら放  
つその火花はも



機  
縁

發電機

眞夏日の日照りはげしき街をわゆみふと耳に  
入る發電機の響

ああ發電機おほどかなれどおのづから澄みて  
愛しき聲放つなり

ああ發電機聽けばこもども忘れぬそのかの  
聲もこもらひにけり

發電機の鳴りの極みの細りこゑ澄みとほる間  
の一つ蟬の聲



鴉

澄みわたる光のなか  
にゐる鴉かあと一  
聲啼き

發心

圓

大きなるまんまる  
き圓ひとつかき  
ひとり眺めてあり  
にけり晝



大きなる信のぶ天翁のぶが云へらくはのそりのそりと  
あるべかりけれ

二五

變態

麗うらと大空晴れて人殺す鐵砲つくる音もき  
こゆる

そこ通る女子をんなとらへてはだかにせうといふた  
れば皆逃げてけるかも

雨ふれば

雨ふれば青き御空ぞなつかしきその青空も寂  
しと思へど

二七

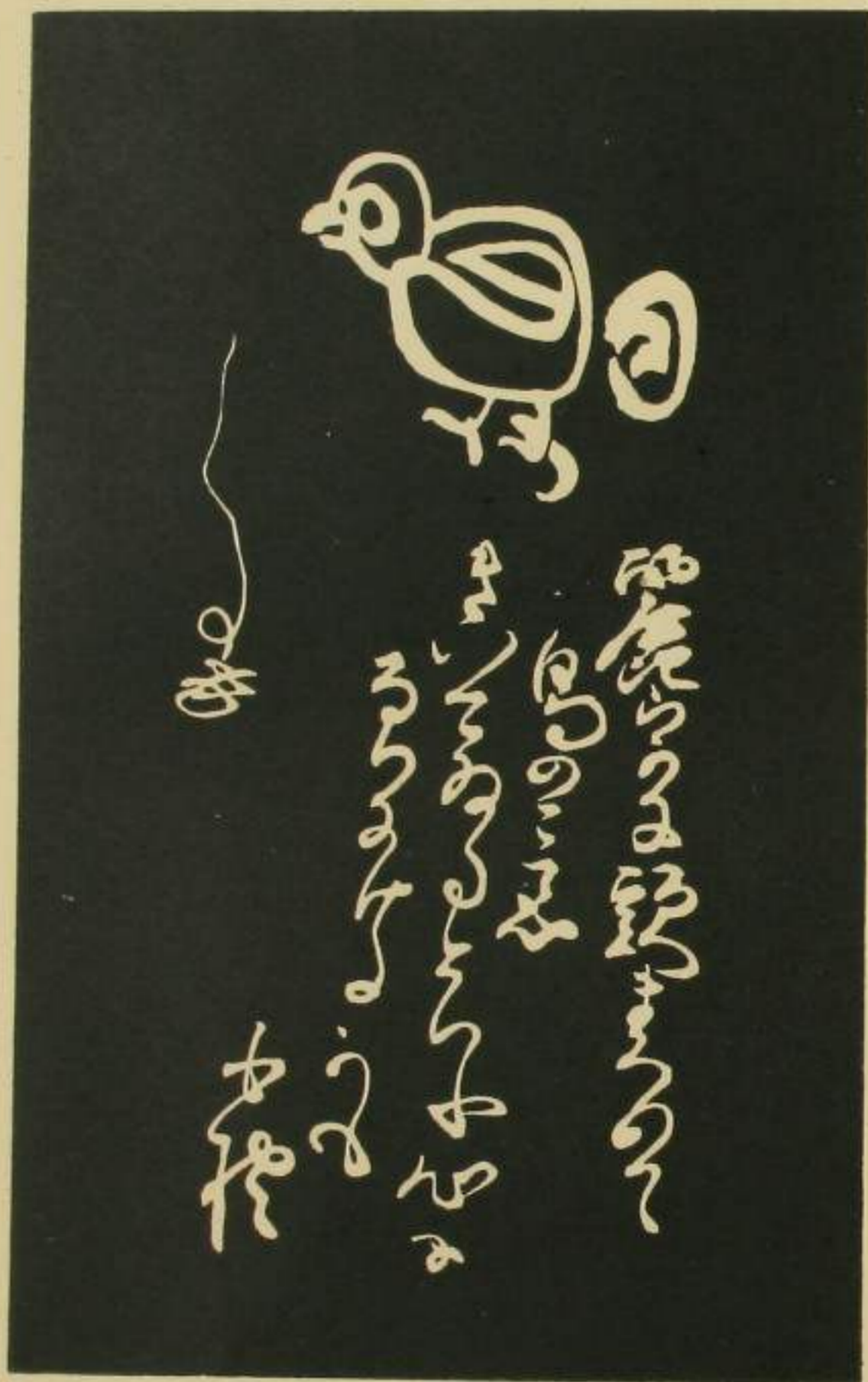


雨ふればおほよそごころねもどろに濡れてか  
をりぬ雫するまで

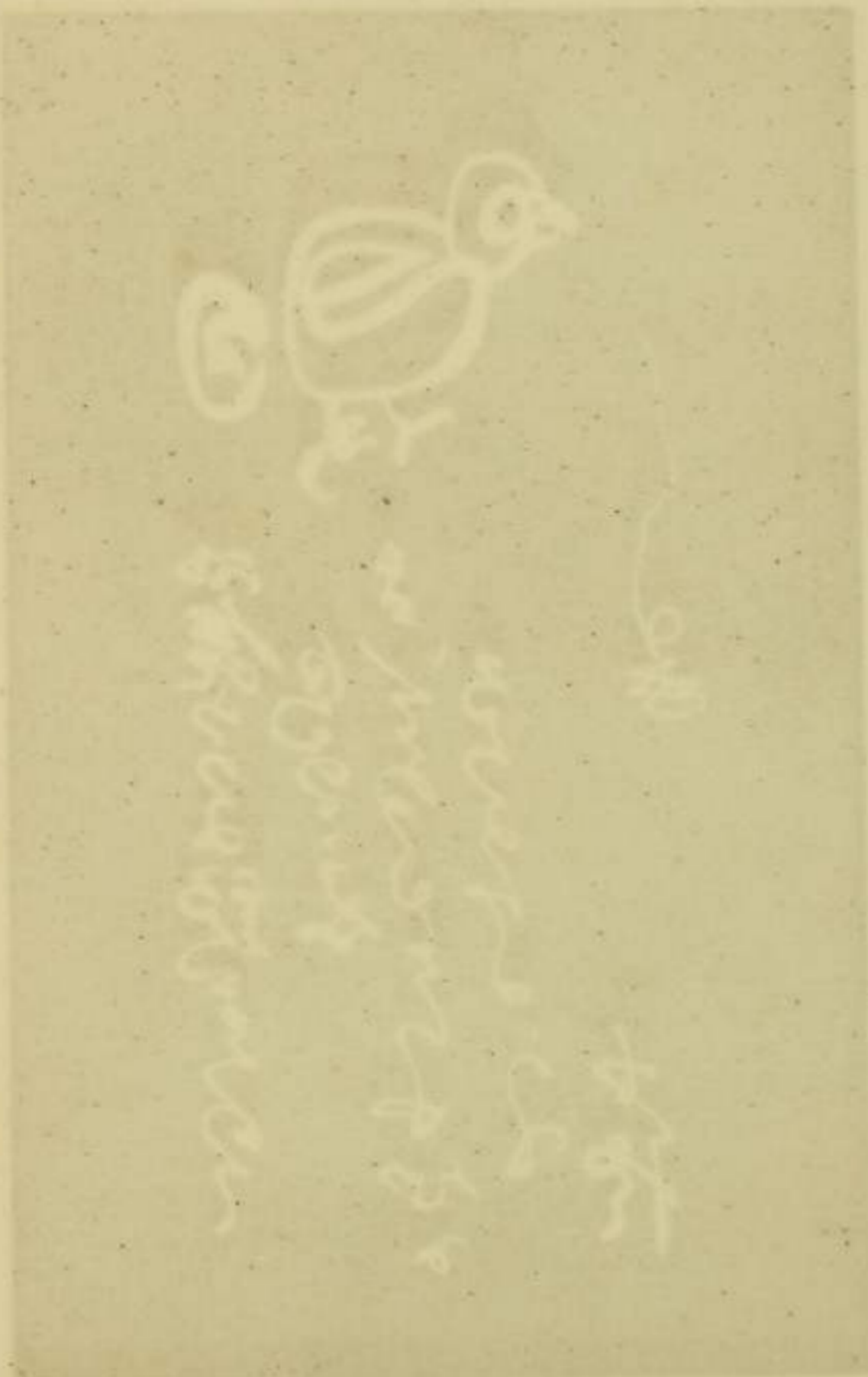
三

麗日

摩耶の乳長閑にふふますいとけなき佛の息も  
ささぬべき日か







鳥のこゑ

麗らかに頭あたままろめて鳥のこゑこゑきいてゐるといふ心こころになりなりにけるかも



雀の卵



雀の卵



序  
歌



幽かなれば人に知らゆな雀の巢雀ゐるとは人に知らゆな

雀のみ住みてささ啼く雀の巢卵守るとは人に知らゆな



春は軒の雀が宿の巢葉にも紅き毛絲の垂れて  
見えけり

月讀の光の紅く射すところ雀は啼けり軒の古  
巢に

巢の中にいくつ卵をまもればか雀は寝ぬぞ春  
の月夜に

天つ日の光の強く射すところ卵はひとつのこ  
されにけり



しら玉の雀の卵寂しければ人に知られで春過  
ぎむとす

三六

四

しら玉の雀の卵ひとつわれてまこと雀の聲立  
てむ何時いつ

時雨と霜



竹と山水

寒水臻る

おのづから水のながれの寒竹の下ゆくときは  
聲立つるなり



竹林に人あり

せうせうと降りくるものか村時雨寒竹林に人  
鉦かねをうつ

雨過ぐ

ひと色に寒くにじめる冬の山雨過ぎぬらし竹  
のみな靡く

小閑

枯れ枯れの石に日のあたりおぼつかかな寒竹の  
影がややや疎まばららなる



時雨の後

そば濡れて竹に雀がとまりたり二羽になりたり  
りまた一羽来て

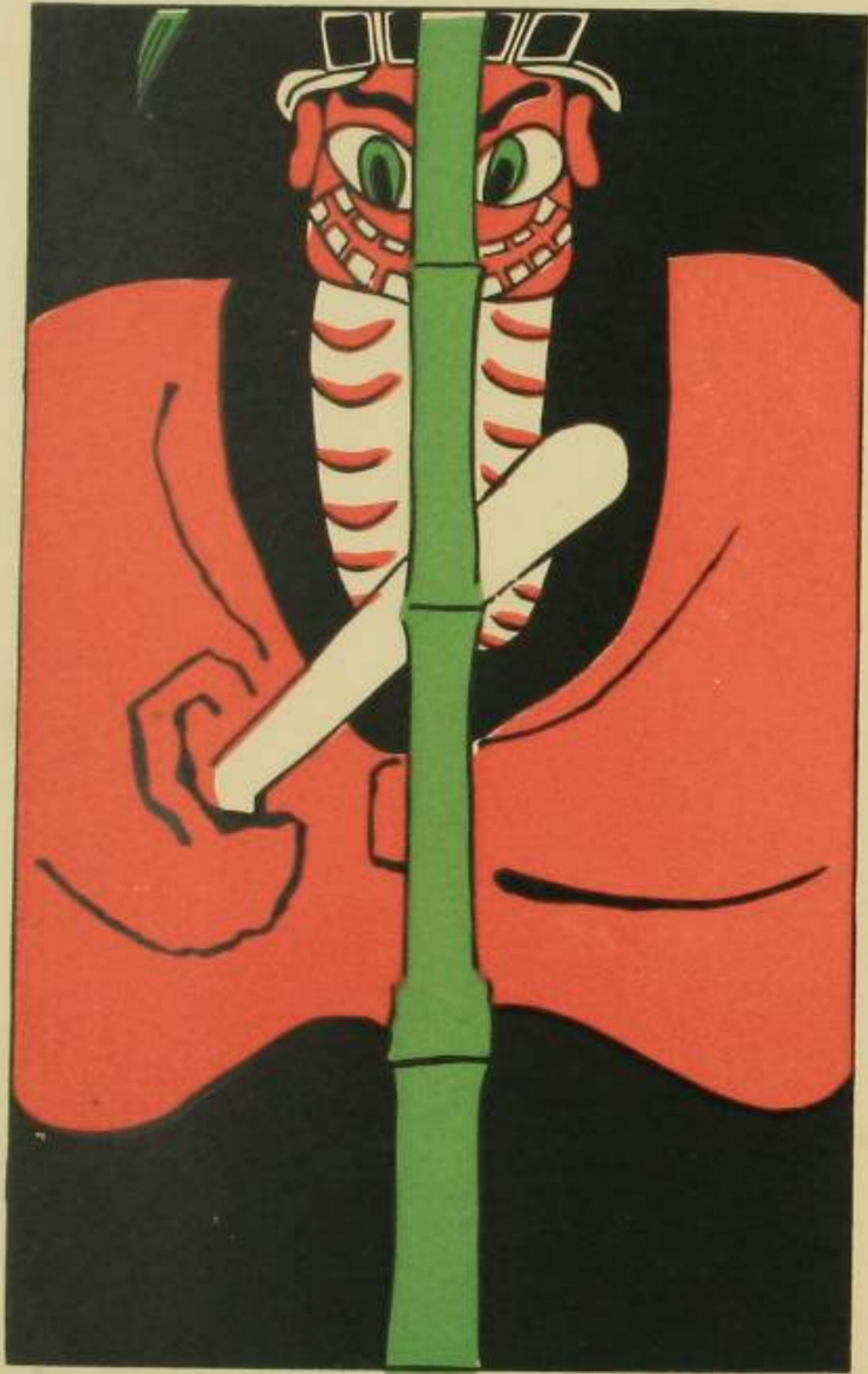
いそがしく濡羽つくろふ雀ゐて夕かげり早し  
四五本の竹

寒雀

風さむき孟宗の秀のゆれ近く吹かれ吹かれて  
雀が一羽

寒風に四五羽飛び出て藪雀また吹かれ還る群  
笹の揺れに



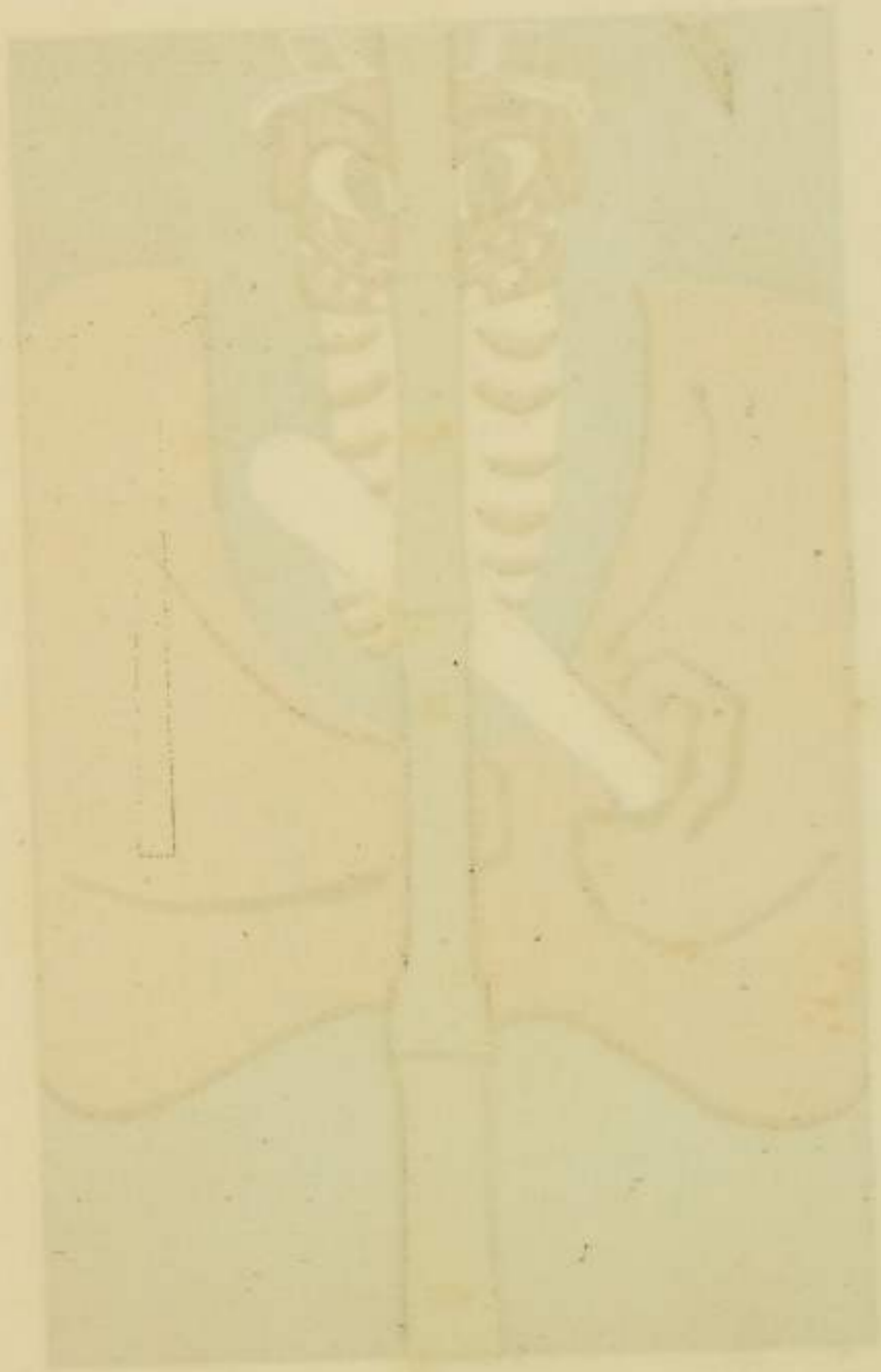


寒  
暁

閻魔の咳

冬の光しんかたるに真竹原閻魔大王の咳しはぶきの  
こゑ





口赤き閻羅が前の笹の藪しんかんとして雀の  
つるみ

雉子

澄みとほる青の眞竹に尾の觸れて一聲啼くか  
藪原雉子



雀の宿

一

短<sup>ひ</sup>か日の光つめたき笹の葉に雨さゝるさゝると降  
りいでにけり

三

さびさびと時雨ふり來る笹の葉に消えゆく遠  
き日あしなりけり

村時雨羽根をすぼめて寒竹の枝にかすかにゐ  
る雀かも

村時雨羽根をひろげて寒竹の枝から飛ばんと  
し飛ぶ雀かも

三



雨しぶく今朝の笹葉の寒風に頭すぼめて飛ぶ  
雀かな

二

深藪に人家の燈あかあかと入りとどかねば啼  
かぬ雀か

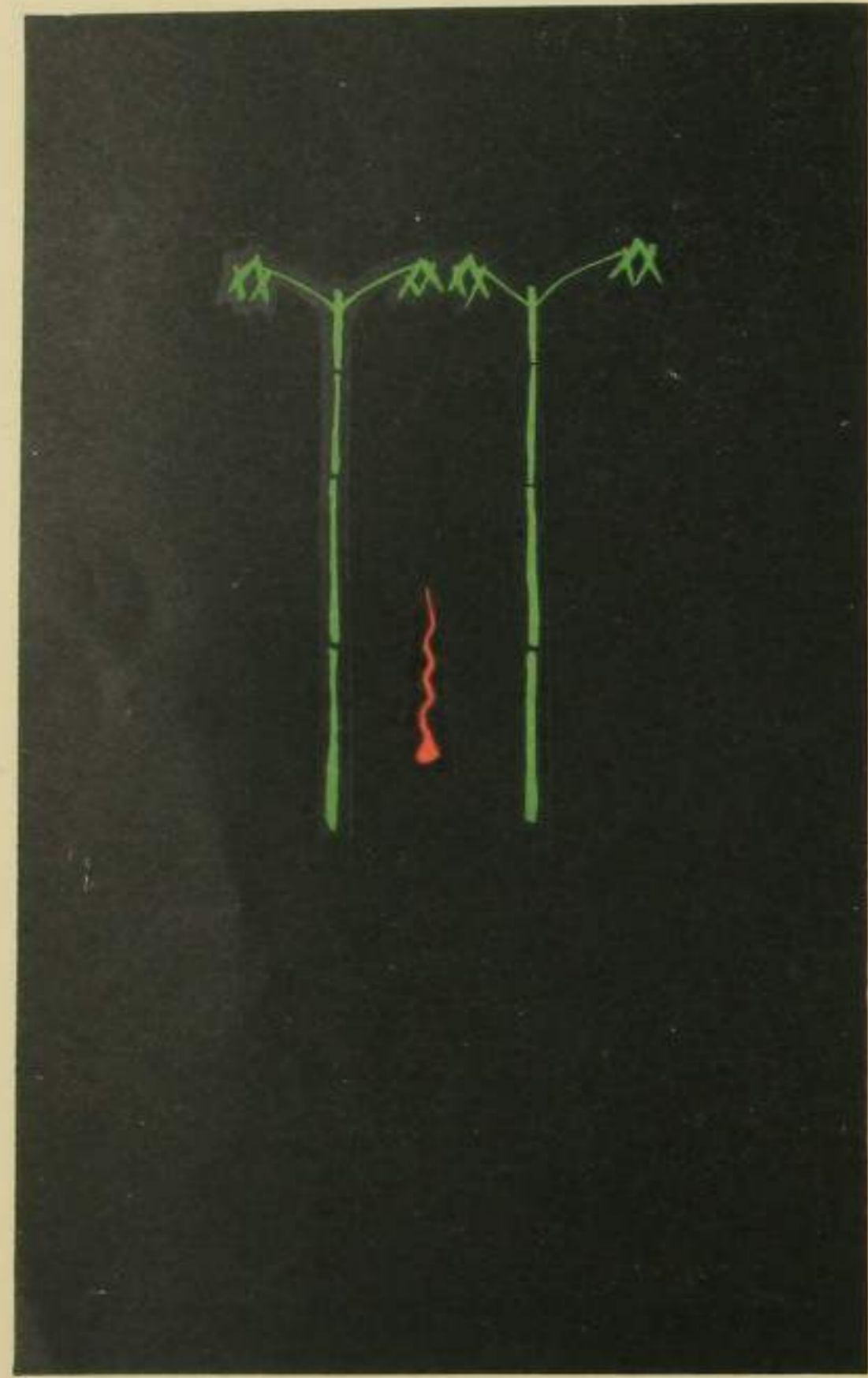
蛇窪村

一

篠竹の竹の撓みに置く霜の今宵は白しふけに  
けらしも

三九





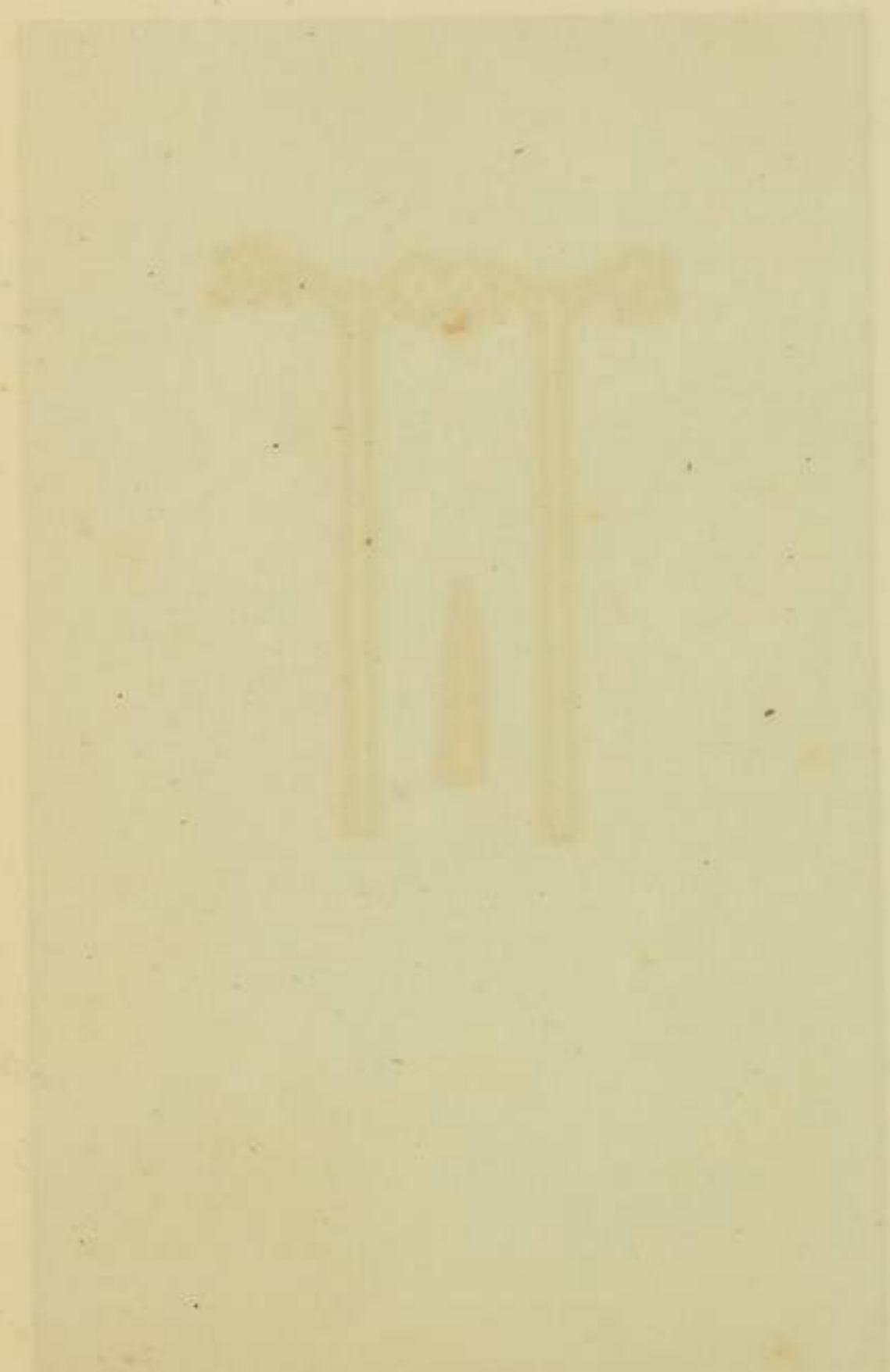
篠竹の笹の小笹のさやさやにさやぐ霜夜の聲  
の寒けさ

云

霜さむき孟宗原に燃ゆる火のほのぼのと赤し  
夜や明けぬらむ

しみじみとつめたき朝はとく起きてこちごち  
の畑はたけに人は火を焚けり





寒むざむと赤き日あがる田圃のすゑ工場いく  
つ見えて煙まだ立たず

野づかさの冬の畑の青菜の葉あはれと見つ  
つ俾くまにていそぐ



深藪に來かかる我の足の音ふと高くなりて我  
と竦みつ

三

深藪に一千萬本竹ありて人間ひとりなればさ  
びしゑ

深藪の中に實赤き冬青の木その實をたべて  
啼けり鶉の子

三

短か日の孟宗さむき田圃横藁家ひとつ見えて  
童雀追ふ

三



山内の時雨

二八四

三縁山増上寺の山門前にふる時雨日かな日ぐ  
らしふりにけるかも

鳩よ鳩よ風邪をなひきそ高窓の軒の張出雨雫  
する

鴉のこゑ遠退きゆけば雀のこゑ幽かにきたる  
霧雨の中

しげしげと時雨見送る鶇の子の一羽二羽とま  
るさいかちの枝

松が枝ともみぢの枝にふる時雨松には松雀も  
みぢには鶇

二八五



時雨ふる坂の紅葉の下明り鴉が飛び來かおか  
おと啼きて

三六

時雨ふる冬の夜寒に啼く鷄の赤羽根橋を我が  
わたるなり

電線の蜘蛛手の上の二十日の月あはれなるか  
も片時雨して

寒鴉

鴉一羽山の枯木にとまりたり向きを變へたり  
吹く風の中

木末の鴉ややに下りつつ下枝に下り遂に根方  
の地に下りむとす

三七



麻布十番

霜の夜ごゑ

この夜ことに星きららかに麻布の臺霜下り來  
らし聲霧らふなり

永久に青き常盤木その葉落ちずいよいよ経れ  
ば霜下りにけり

寝て聽けば寒夜の夜霜霧ふなりあはれなるか  
も前の筆

この夜ひと夜眼の冴え冴えて小床ふかく霜満  
つるけはひ聽き明すなり



揺れほそる母の寢息の耳につきて背そがひには向  
けど戀し我が母よ

三〇

寒かん天てんに吹きさらさるるいちゐの木いちゐひび  
けりふかき夜霜に

澄みとほる小こ夜よの雉き子すのこゑさけば霜こぞる  
らし笹の葉むらに

霜こほる真ま夜よの夜ぶかにかつかつと人こそと  
ほれ巡羅なるらし

なに削る冬の夜寒ど鉦かねの音隣なりの合せにまだかす  
かなり



厨邊の霜

路次の霜に桃色うすき鼠子の凍えし尻尾つま  
みつればあはれ

今朝見れば置く霜濃くて厨邊のごみための影  
も紫に見ゆ

霜ふかき路次の竈の釜の蓋に凍葉青き黄の柚  
子ひとつ

霜かふる蕪がそばに目つむるは深むらさきの  
首長の鴨



雪の翹ばたき



大王

大王だいおうの行幸ぎょうこうかあらし旗立はたたちてて雪ゆきの御門みかどを騎馬きば  
出づる見ゆ





白  
牛

瓦斯の燈ひに吹雪かかやくひとところ夜目よめには  
見えて街遙まちほろかなる

雪の夜にたまたま遇へる白き牛の荒々し息の  
觸ふりの暖ぬかとさ



しんしんと真夜の暗みをとほる牛の額角うつ  
牡丹雪の玉

小夜吹雪激しくは打て角を低めたじろぐ牛の  
眼かがやきぬ

吹雪やみて月夜明りとなりにけりふと湧き起  
る牛の太吼





巷の吹雪

1100

巷邊の眞夜の吹雪となりけり廣告の燈のみ  
赤く變りつつ

かうかうと佛うつつに見えまして立たすけは  
ひ近し眞夜の大吹雪

吹雪かぜ向き變りたらし引きすほめし夜の傘  
を急に吹きわほる

夜の吹雪ややあかるらし思はぬに吾が先ちか  
く袂はたく音

吹雪やみて夜のふけまさる路次の闇にふと立  
ちてさけば金よめる音

1101



笹の雪

朝

雪けふり立てて幽かに飛ぶ雀笹の葉の間に羽  
たたり見ゆ

夜

こんこんと笹竹原につもる雪紅き提灯つけて  
人來も

笹藪から雪の田圃へほつつりと紅豆提灯出て  
來てあはれ



雪  
夜

いまだ起きて火だね埋めたりさらさらとあ  
たりの沈黙に雪さやる音

この寒き雪の夜中にさらさらと澄みてひびく  
は何の葉つばぞ

雪の夜に麻布小衾ひきかつぎおもふは生みの  
父母のこと

衾かつぎ聴けばかすかやくらがりにてふてふ  
か何か翅たかさつつ

右の足を左の足にのせにけりまだも積むべし  
この夜半の雪は



足の指互かたみに觸るる夜のさむさ現身まゐ我と思へば  
眠ねられね

三六

いまだ世に親鸞上人おはすとき石の枕に雪ふ  
りにけむ

目のさめて待てば遅しも冴さ々ざしふくら雀の朝  
のさへづり

雪 曉

女ま犯た戒かい犯かいし果てけりこまごまとこの曉あけちかく  
雪つもる音

ははそはの母のおもとの水しわざ澄みかとは  
らむこの寒かんの入り



目のさめてややにふえゆく雀の聲あなあはれ  
我も目はさめてゐる

三六

人間のこゑ湧きおこるしのめどきすなはち  
走る新聞くばり

袖に来て白く飛びちる雪つぶてあなさびし子  
らが雪投げの玉

浅草の雪

金龍山浅草寺の朱き山門の雪まつしろに霽れ  
にけるかも

首出して神馬雪喰ふつつましさ見て通りけり  
朝の歸りに

三六



路次の朝

屋根の雪

硝子戸を強く拭きこむこの朝明隣の屋根の雪  
が傍に見ゆ

雀飛ぶ屋根の遠見の雪煙かすかに射すは朝日  
のかげか

屋根の雪霞みて暗き遠方はやや煙だてり風か  
吹きいでし

屋根をころげて騒ぎ乳繰る二羽の雀ばばと飛  
びわかる雪煙立てて



椎の葉の雪

三三

椎の葉に消<sup>け</sup>のこる雪の椎の葉に消<sup>け</sup>のこるなべ  
に朝日さしにけり

ほのかなる聲なりしかど椎の葉に一夜積りし  
雪のうれしさ

椎の葉のかそけき雪に朝日子のかがよふ見れ  
ば春さりにけり

石臼と杵

石臼と杵とましろし路次の奥あなわはれ今朝  
は一面の雪

三三



ふかぶかと雪盛りあがる石の白杵の柄も外そとに出でてましろなり

三二四

石臼のほとりに飛べや寒かんすずめ地面ぢめんの雪にあなうし蹴くつけて

石臼のふちに染み入る雪のこゑあな寂そとし外そとは一面の光

寂しさに

寂しさに起きて雪掃くかそけさは人も知らじな路次の白雪

風に起きて雪掃き寄すとまだ醒めぬ隣りの雪も片寄せにけり

三二五



霰と雀

あまりに速く冷えて凍れば霰の玉しら玉のど  
ともころげたりけり

白玉か米の粒かと見つるらむ雀聲立てて啄む  
は寒霰

いよよ疾く亂れたばしる霰の玉雀騒げと啄み  
もあへなくに

雀子は身ぬち暖きか霰の玉こまごまと消居り  
羽ににじみつつ

競り啄む雀の羽根にましろくたまり時の間消  
ゆる霰のしら玉



いそがしき雀の遊び必死なれあな暫時なれや  
霰ふりさやぐ

三八

現身

卵わりつつ

雪の日の笹竹がくり啼く鶏の鶏冠のみ紅き冬  
は來にけり

三九



重き雪の力竹壓すしまらくを卵にざりてわが  
わらむとす

三〇

現身の白の鶏が今朝し産みし暖き卵をひとつ  
割りたり

この吾れに吾れののますとしら玉の卵をいつ  
か割りてゐにけり

卵わりつつそぞろにたまる目のなみだ全く冬  
日は寒けかりけれ

朝の吸入

しののめの一本の竹雪しろし竹に雀が絶りつ  
つ見ゆ

三一



吸入器の痒ゆき湯氣ふくしまらくを幽かに雪  
もふれなとぞ思ふ

吸入器の湯氣の觸りの頬に痒ゆくいくたびか  
拭きてなほ暫時あり

しみじみと厠掃除をする人が頬かぶりしろし  
雪つもりつつ

夜明の鶴

雪霏いよよまんじとふるなかにあなかうがらし明  
けの白鶴

かうがらし鶴はこの世のものならず幽かに啼  
けば生きたるらしも



清らけき鶴の思ひのともすればくづるもの  
か羽根一つはたく

三三

嘴凍る鶴の一羽は見上げたり雪霏霧らふ空の  
暗みを

春泥の上に求食れど腰ほそく清らなるかな鶴  
の姿は

腰高に頸ぶす鶴のあはれさよ紅き頭に雪すこ  
しつけて

鶴と云へどひもじきものか松が根の凍れる苔  
に嘴つけにけり





高山の雪の秀つづき消え消えと行き行かしけ  
ひ役えんの小角せうかくは

山家抄

一





雪ふれば御嶽精進もえは行かぬ凄まじき冬と  
今はなりにけり

二 題 咏

足曳の山の獵男が火繩銃取りて出で向ふ冬は  
來にけり



高山の雪に火繩の火の消けなと拜をがみ希こひのるは  
愛あなし妻つまばかり

雪空に澄みつつ白き山ふたつその谷間たにまひの火繩  
銃の音

寂さびしさに堪へて眺むる白雪のほのぼのとして  
山家やまがなりけり

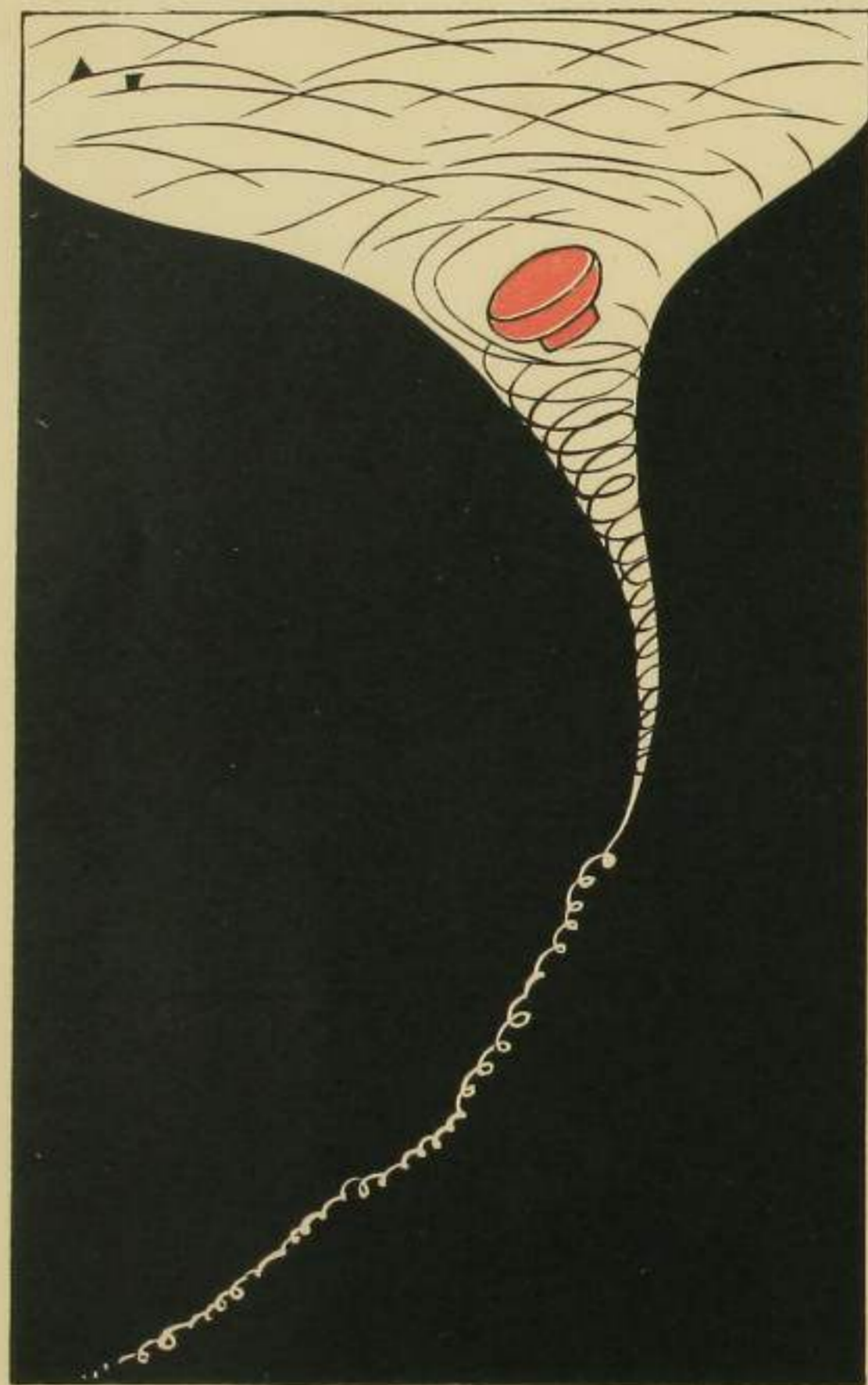
奥山の山の狭間せまにふる雪のほのぼのつもり夜  
明けぬるかも

白き尾の白き鷄けいあらはれて天上の雪に長鳴き  
にけり



茶  
の  
煙









茶の煙

茶の聖千の利休にあらねども煙のごとく消な  
むとぞ思ふ

茶の煙幽かなれども現身の朝餐の料に立てし  
茶の煙



茶の煙消<sup>け</sup>なば消<sup>け</sup>ぬべししまらくをたぎる湯玉  
の澄みて冴えたる

三言

茶の煙幽かなれかし幽かなる煙なれども目に  
染<sup>し</sup>みるもの

南畫景情

碧山

碧山の竹に雀の軸一つ掛けてながむる人にも  
らひて

三言



碧山の竹に雀の軸ひとつ掛けてながむる何も  
持たねば

三六

碧山の竹に雀の繪を見れば竹に雀が遊べるら  
しも

碧山の竹に雀の破れ掛軸竹も雀もむしくひに  
けり

永日

刷毛うすく引きて小鳥をほつほつと描けば霞  
に遊べるらしも

酒のまぬ人は窓から顔出して寂しく四方の雲  
眺めます



あきらめ

朝

寂しさに堪へてあらめと水かけて紅あかき生しやう薑がの  
根をそろへけり

生しやう薑がの根紅あかく染めたるものゆゑに幽かかに嚙かめ  
ば悲し小生薑

鈴 蘭

本ほん草さうのさびしき相あひのその中なかにことに寂しきは  
深山ふかみやま鈴すず蘭らん



現世まへよの身の成果なりはてもおもほえて寂しさびとぞおもふ  
深山鈴蘭

三〇

鈴蘭の寂しき花の繪の上にわが歌書けば人が  
賣りけり

冷たき微笑

微笑わらわみてほのかにあらむ白雪のありなし人と  
けふなりにけり

この思ひ幽かすかになりぬあきらめといふものに  
もか近づきにけむ

果敢はつなしといふもはかなし聲立てて訴こたへ泣き  
てし昨きのにしも似ね

三二



目つむれば思ひかけずも火のごとき忘わすられし  
ものもののしたたりにけり

三三

沙羅の木

鷗外先生の庭

あはれなる石のひとつぞ古びたるその石の邊べ  
の沙羅なの木の立た

さすたけの君が御庭の沙羅の花夕かたまけて  
見ればかなしも

童さび時に肩揺る大きな人の笑ひ聲さびし沙羅  
の花盛り

命二つ中に活けたるさくらかな 芭蕉

命二つ對あひまへば寂し沙羅の花はつたりと石に落  
ちて音あり

三四



ひとりの冬

寒 薔 薇

あはれなる人間の世の侘住居いちりんの花を  
床に活けてある

ありたけの金をはたきてくれなるの花を一輪  
買って來にけり

幾 夜

あなかそか雪と霰のささやきをききして幾夜か  
わがひとり寝む



折にふれて

人のごとく

我ひとり人のこの世に有りふれて生くとふな  
らね何か寂しき

飯を食<sup>は</sup>み酒をいただきしかすがにあり經<sup>む</sup>も  
のか人のごとくに

惟<sup>おも</sup>れば人とうまれて日に三<sup>み</sup>度<sup>たび</sup>なんぞ如何<sup>いかん</sup>ぞ飯  
食<sup>め</sup>るらむ

いそのかみ古きむかしのうまびとも色を好み  
き我も然りか



人みなが

人みながわれをよろしと云ふ時はさすがうれ  
しゑ心をどりて

人みながわれをわるしと云ふ時はさすがさぶ  
しゑ心ほそくて

財布

ある人より殊に軟らかきなめし革のを貰ひて

菅の根の永き春日に鳴く鳥の鶯色ぞわれの財  
布は

なつかしき人がたびたる革財布あはれなる金  
かきあつめ寝む



貧者と糧

米の飯

現身の人の日ごとに取り馴れて食ふる飯を我も食ふる

おのもおのも食べなれつつ米の飯をうましとも思はぬ飽かず食べつつ

おもしろき事いふものか米の飯己が嬌のごともいよよ良しちふ

人の世の味ひふるき米の飯飽かず食せばか我寂びにけり



とり立ててうましともなけれ米の飯いよよ嚙  
みしめていよよ知るべし

はだか鶉

粕漬の鶉幾匹平壓しに壓して入れつかこの堅  
き蓋は

頭くちかまるきはだか鶉つらみをつぶさに見れば腹は割きか  
れて さな足が二つ

火の上に鶉かざせばぢりぢりと脂あぶらたまり來く足  
のつけ根に

酒の粕に漬けて來し故この鶉酒の香がする焼  
きてくらひつ



頭よりかぢりかぢれば足が二つ遂にのこれり  
はだか小鶉

三五四

うき世

青空の山のかなたに人住みてあぐる煙の世に  
もかそけさ

山の媼の云はく

狼のこゑはいとはね住み古りて世にわびしき  
は雨漏の音

石版職工

日をこめて見れば涙もとどまらずあかあかと  
石に蓮花描きてゐる

三五五









あかあかと蓮花れんげ描くとして描きぬたり我も蓮花  
と見てぬたりけり

石の上に白髪かきたれ描く蓮丹れんたん念ねんなれどそこ  
ばくの金

馬なれば



仙臺坂石の車を曳きわびて馬倒れたり疲れけ  
らしも

三五八

馬なれば打つにまかせてひた喘げ若し人なら  
ば何といふらむ

馬なれば童わらわのごとなぐられて泣きて豆くふ坂  
のなかばに

石かつぎ

石かつぎ石かつぎ走る何んぞこの貧しきどち  
が暇いとまなげなる

石かつぎ石にひしがれ海つもの平目のごとく  
なりて死しににき

三五九



長屋者

路次の廁かまの屋根に干したり下駄いくつ鼻緒紅  
きは子らか多くゐる

ひたむきに箸を動かす長屋の子時をり打ぶたる  
むさぼりくらへば

山がつが手斧てのふりあげ打つごとし有るべき事  
か親が子をたたく

老いぼれの山の古狐ふるきつ蹴るごとし有るべき事  
子が親を蹴る

親ぞ子ぞたたくなかれとふるへゐつたたけた  
たけと人覗きゐつ



雉子の尾

合掌

し  
み  
じ  
み  
と  
今  
は  
乞  
ひ  
禱  
る  
神  
よ  
こ  
の  
貧  
し  
き  
ど  
ち  
に  
糧  
を  
あ  
た  
へ  
よ



父と母

あなかそか父と母とは目のさめて何か宣のらせ  
り雪の夜明を

あなかそか父と母とは朝の雪ながめてぞおは  
す茶を湧かしつつ



あなしづか父と母とは一言ひとことのかそけきことも  
書かは宣のらさね

三六

ちちのみの父のひとつの楽しみは夜に母刀自  
と書か讀ますこと

母刀自が父のみことの讀ます書かあなおもしろ  
と聞きかす樂たのしさと

あなかそか父と母とのふたはしら早はやや寢いねま  
しぬ宵よの寒ふきに

母父おととの生うみの御親おやのふたはしら寂さびしからせと  
子こは祈いのらぬを

三七



父母とその子

寂しき朝

三六

父母の寂しき間の御目ざめは茶をたぎらせて  
待つべかりけり

さざめ雪窓にながめて母父と浮世がたりをす  
るが寂しさ

父母と摘みてそろへし棕櫚の葉に霰たまれり  
米の粒ほど

父母と今朝もたばしる白玉の霰のさやぎ見る  
が幽けさ

三九



老いし父母

老いらく

老いらくの父に向へば嚴ごつかしき昔の猛たむさは今は  
坐まさなくに

ははそはの母よと思へば涙しながるははそは  
の母も老いまししかも

父の白髪

ちちのみの父の眉毛も譬ふれば雪のごとくに  
古りましにけり



はづか残る父の頭のうしろの毛を子ら騒ぎ刈  
るをかしと笑ひて

三三

馬の毛を刈るバリカンに刈られけり父の頭の  
白髪残り毛

この父のうすき白髪のおはれさとわが母泣か  
すをとめ子のごと

皺ふかき父の御咽喉の太骨の骨々しさを母と  
さすりつ

ちちのみの父の御咽喉をははそはの母のはら  
はら剃らすものかも

咽喉ぼとけ母に剃らせてうつうつと眠りまし  
たりこれや吾が父

三三



母の鏡

三七四

眞十鏡手にはとらせど垂乳根のむかしの姿か  
へるすべなし

その子らの生活立たねばあはれよと母は鏡を  
つひに賣らしつ

老いぬれば

老いぬれば子の云ふなりにならしけり泣かし  
まつるなこの父母を

玉の緒の絶ゆる事無く童にて遊び恍れてむ親  
の御前に

三七五



霜は置くとも

三

黒髪に霜は置くとも父母よまさきくおはせい  
つの世までも

貧しき食膳

ある日

中<sup>なか</sup>臣<sup>とみ</sup>の大<sup>おほ</sup>祓<sup>はらひ</sup>ほがらほがらにこの朝もなほ耳に  
あり飯のおいしさ

三



このわれの箸が鐵雄の箸よりも大きかりけり  
これのうれしさ

三六

吾がこぼす白き飯粒ひとつひとつ取りて含ませ  
す母は笑ひて

葱のぬた食しつとふともこの葱はかたき葱ぞ  
と父の宣らしつ

深く母の黙したまへば蠅の來てつきつぎにた  
かる飯の白さに

母よ母よ早く食しませ小翅ふりて御前の飯に  
蠅のたかるを

母の深き吐息きくとき最も深く母のところに  
ひたと觸りたり

三六



垂乳根の親とその子のあたたかく飯食す間さ  
へ笑ひがたきか

垂乳根の深き溜息今もなほ耳にのこれり街を  
いそげども

ある時

しみじみと眼を見合せて親と子が貧しかりけ  
り飯をひろへる

父母とぼつりぼつりとひろふ飯の凍ててかた  
けば茶をかけて見つ

父母の日日のなげきも事古りぬさはさりなが  
ら我の貧しさ



父の嘖び

たださへも術すまし知らぬを貧しとて貧しき子ら  
に父の嘖いばす

いはれなき父の嘖いびはさりながら頭かぶ垂れぬつ  
我は貧しき

もの云へば涙ながれむこの父になに反抗かたはむ  
我や父の子

いはれなき父の嘖いびもしかすがに貧しければ  
ぞ母よ泣かすな

父とこの父のこの子といかでいかで相離るち  
ふ事のあらめやも





いつまでか貧しき我ぞ三十路そぢ経て未だ泣かす  
 かこの生みの親を  
 父母の前をまかりてしみじみと見ほれるにけ  
 り空は高きを



麻布山

麻布山淺く霞みて、春はまだ寂し御寺に母と我  
が詣でに來れば、日あたりに子供つどひて、風を  
あげ獨樂を廻せり。立ちとまり眺めてあれば思  
ほゆる我がかぶる髪。ほほゑみて母を仰けば母  
もまたほほと笑ませり。けだしくや我がかぶる



髪母もまた忍ばすらむか。我が母は何も宣らさ  
ね、子の我も何もきこえぬ、かかる日のかかる春  
べにうつつなく遊ぶ子供を見てあれば涙しな  
がる。

三六

おなじく

垂乳根と詣でに來れば麻布やま子供あそべり  
御佛の前

垂乳根の母にかしづき麻布やま詣でに來れば  
童のごと

掌を合せ母のをがます麻布やまわれもをがま  
な掌をば合せて

垂乳根の母とまゐりて麻布やまをろがみて居  
れば鳩の啼くこゑ



童と母

垂乳根の母の垂乳に、おし絶り泣きし子ゆゑに、  
いまもなほ我を童とおぼすらむ、ああ我が母は。  
天つ日の光もわすれ現身の色に溺れて、酒みづ  
きたづきも知らず、酔ひ疲れ歸りし我を、酒のま  
ばいただくがほど、悲しくもそこなはぬほど、酔

うたらば早うやすめと、かき抱き枕あてがひ、衾  
かけ足をくるみて、裾おさへかろくたたかす、裾  
おさへかろくたたかす、垂乳根の母を思へば泣  
かざらめやも

反歌

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲  
團をたたかれ



ふつくらとした何とも云へぬかなしさよ蒲團  
の裾を母にたたかれて

三六

### 春日遊樂

御佛の御前の庭の山ざくら今日を盛りとにほ  
ひぬるかも

ひさびさに母にかしづきこの寺の花見に來れ  
ば思ふこともなし

三六



限りなき春と思へや垂乳根と永久とこひまに見る花と  
思へや

三

春はいかにうれしかるらむ子供らが櫻の下に  
鞠投げあそぶ

鞠もちて遊ぶ子供を鞠もたぬ子供見惚るる山  
ざくら花

母と子と花の木かげの廻り道廻りて永きひとひ一日  
なりけり

母と来て眺め見ほるる山ざくら春は今しか盛  
りなるらむ

三



うつり香

三九四

わが家の人々、ある人にあざむかれて、我々はじめ皆々着のみ着のまいとなりぬ。さて、ある知縁の人の死にあひたれど今さら包むべき香料もなし。弔問せんとするにも電車賃さへ無し。すなはち身につけたる衣を賣り何がしかの金を得たり。妹家子また自らの衣を賣りてその不足をたし、その残りの金にて葛飾より汚穢車に載せて來れる白藤の花を一株求め、それを鉢に移して我が書齋にかざる。その時の歌。

白藤の花

わがころも金に換へつつあるかなき香料つつ  
む白藤の花

白藤の垂れて愛しき小床邊に金かぞへ居りあ  
るかなき金

借 着

三九五



ははそはの母のころもは身にあはず父のころ  
もを借りてあそべる

三六

ははそはの母のころもは母の香どするちちの  
みの父のころもは父の香どする

ゆくりなく父のころもに手を差し入れ涙せぐ  
り來ぬこの父の香よ

童のころ

俚謠に曰く

素絹しろきぬを染めてくやしも藍染あゐぞめのあゐむらさきに  
染めてくやしも





蜻蛉つり

蜻蛉つり晝はさほどで無けれども日さへ暮るれば涙ながるる

蜻蛉つり蜻蛉のまろき目の玉のやうな涙をころげさせをる





柳河の玩具

ててつぶつぶ彌惣次けつけと啼く鳩のしろい  
鳩奴が薄紅の足

雉子ぐるま雉子は啼かねど日もすがら父母戀  
し雉子の尾ぐるま



白木蓮花

四〇〇

註 雉子ぐるまは筑後の清水山觀世音にて賣る。この古刹は行基菩薩の開基にかゝる。京の清水山はこのわかれなり。この山の近きほとりに行基橋といふもあり。



白木蓮花

一

白木蓮の花咲きたりと話す聲何處やらにして  
日の永きかな



白木蓮の花のあたりの枯木立鴉とまりて日の  
永きかな

四〇五

白木蓮の花の木の間まに飛ぶ雀遠くは行かね聲  
の寂しさ

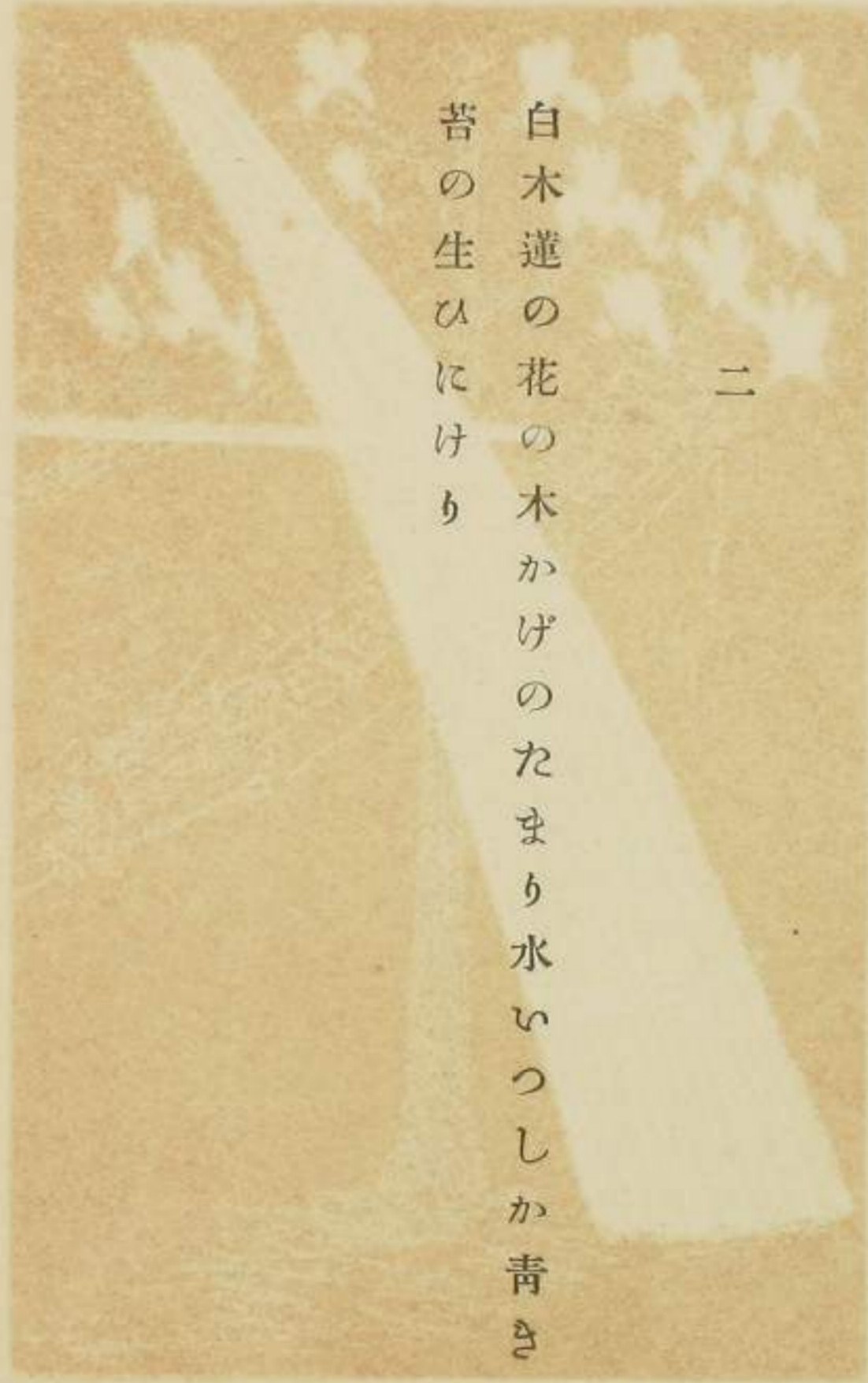
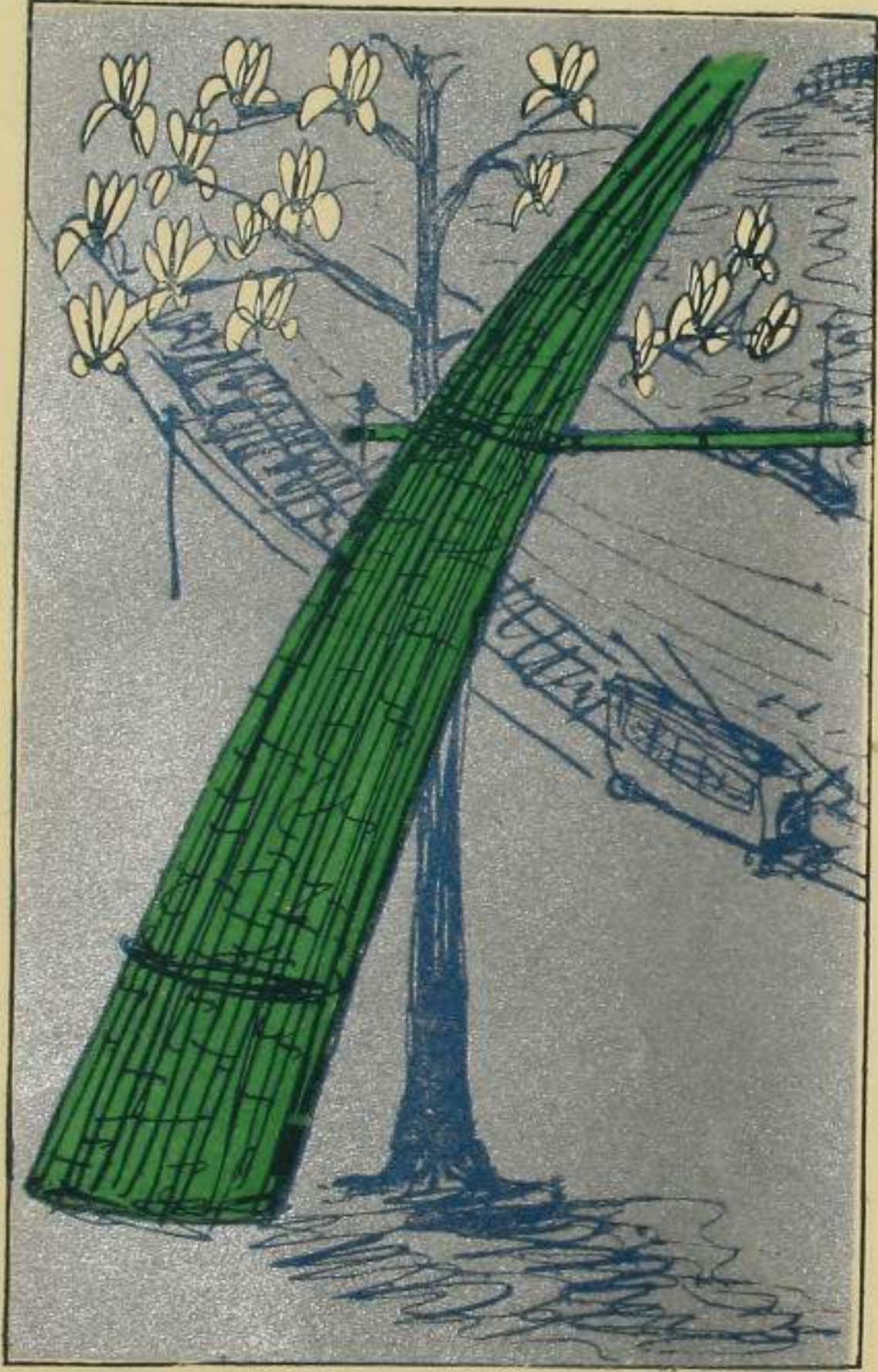
薄ぐもの春のけはひの寂しくてきのふけふ白  
き街の木蓮

白木蓮の咲きの盛りに燕のこゑなご微かにゆらぐ  
春はる闌らんけぬらむ

白木蓮の花のあなたに動く煙むらさきふかし  
今日けふも去いぬるか

四〇六





白木蓮の花の木かげのたまり水いつしか青さ  
苔の生ひにけり

二

BOX



竹屋の木蓮

遠く見て今朝こまかなりひしひしと竹立てか  
けし向う河岸の空

竹河岸に寒うひびらく音すなり竹立てかくる  
人ひとり見えて



寒々し夜明の星に目のさめて竹河岸に竹をゆ  
さぶる人か

四六

竹河岸に立てかけし竹の聲寒し細かに見れば  
その尖さきの揺れて

ひしひしと立てつらねたり真直の竹その尖さきに  
寒しまだ春の空は

竹屋の空春は浅みか一羽の鳥さひざひと翔たぎる  
竹の尖さきの上を

こまごまと立てかくる竹白木蓮の上に突き抜  
け陽にかがやきぬ

竹屋の路次今朝もさひみか竝なみ竹に手觸れつつ  
行く子供が一人



春のめざめ

睡眠ねむりさめておのづと目あくたまゆらは蓮花れんげ聲  
して開くかに思ふ

睡眠ねむりさめておのづとひらく朝の目に空青く晴  
れて木のそよぐ見ゆ

蒼空見え早やも子どもの聲すなり美しくしき春  
の今朝の目ざめに

目はひらけど朱墨つきたる掌てのひらなどしみじみと  
見つつ起きむともせず



郊外所見

病 鶏

空圓く光あかるし病鶏やまづなやめば安けか  
らぬを

病鶏かぎろひなやむ日のさかり榎の木の梢は  
すこし風あり

火葬場道

春深し今日の火葬場に立つ煙なみなみならず  
美しけれど



ちさの木に雀が三びき飛んで来てなかの一羽  
がころげけるかな

四四

雉子

春永うしていたづらに吹く微風に垂尾の雉子  
あらはれにけり

道のべに雉子あらはれ美しき尾を曳き過ぎる  
春ふけにけり

四五



## 卷末解説

本集は葛飾閑吟集「輪廻三鈔」雀の卯三部の合巻歌集である。で、個々獨立した歌集として見てほしい。總題を「雀の卯」としたのは、以前から深い因縁が全巻に満ちてゐるからである。歌の数は左の通りである。



右 總 計	長 歌	短 歌	雀 の 卵	短 歌	輪 廻 三 鈔	小 詩	長 歌	短 歌
	二 章	二 百 八 十 三 首		百 三 十 一 首		二 曲	十 章	二 百 七 十 三 首

○ この中で「葛飾閑吟集」の歌が最も新らしく「輪廻三鈔」の歌が最も古い。ただ私の生活を知らうとする人は「輪廻三鈔」「雀の卵」と読んでそれから「葛飾閑吟集」に引き返して読んでほしい。

○	小 詩	長 歌	短 歌
	二 曲	十 二 章	六 百 八 十 七 首

○ これらの歌は大正三年の夏から同六年の初夏までの私の生



活から生れ出た。然しその製作の完成には十年の今夏まで約八ヶ年かかつてゐる。

尤も七年の春から九年の冬まで満三年の間は一時中止してゐた。

ここに一言して置き度い事は、私の歌は、殊に自然静観の歌は半年若くは一年二年、長くて三四年充分に頭の中でこなしてから、新らたにその表現の機会を俟つて言葉にするのである。それでどうしてもその當時の生活より遅れる。蠶が桑を食べて充分にそれらを自分のものとしてから徐にすすしい絹糸を生み出

すやうなものである。即興はすくない。尤も抒情の歌には例外がある。

### 葛飾閑吟集

葛飾前歌の六首は葛飾へ移る前の年に、一二度市川へ遊んだ時に材を得た。その頃から葛飾と云へばなんとなく言葉の響からして好きであつた。それでおのづと其處へ住むやうにもなつた。

真間では真間閑居の記を書いたが、大正五年の五月から六月まで二た月しか居なかつた。そして三谷へ移つた。六年の初夏ま



てゐた。

小詩の中「棗の花は即興である」「子どももその當時の作である。長歌の中で「鳥の啼くこゑ」「夜の雪」はその年の冬に作つたが後の「アツシジの聖の歌」「米の白玉」「犬と鴉」「立枯並木の歌」「潮來の入江」などは此の六月の苦行で引續きてきた。非常に氣持よくすらすらとてきた。一つも難澁しなかつた。歌は百首位新作である。前期のものも大概訂正した。

前期のものを代表する歌は「二百二十日」や「雀の宿」や「田圃の晩秋の「向ひ風」薄に雀」「蝸牛」「獨樂」などである。

中期、動坂で作つたのが「猫柳の「春雨」」「春の耕田」の二三四等である。この時から私の歌境は一轉したやうに思ふ。後期、今度の新作では夏の田園ものと冬枯の歌と兩方面がある。夏の分は思ひきり明るくなつてゐる。中期から後期のものをよく見てほしいのである。

### 輪廻三鈔

本集の歌で最も古いものは「雲母集」の新作や「白金の獨樂」以前或は當時のものがある。三崎の歌で無いので後廻しにしたのである。



「流離抄」の「玉蜀黍」別離抄の「途上所見」ろくろなどは「眞珠抄」に載せた。然し今度のはすつかり趣が違つてゐる。

その他「流離抄」の「護謨の葉」「別離抄」の「女色」「隼人」「夜祭のころ」「發心抄」の全部がある。随分手を入れた。その頃は何も彼も麗かや時代であつた。「發心」の數首「機縁」の數首は然し忘れがたいものである。それから「白金の獨樂」を生み出したのである。

「序」及「別離抄」の大部分は七年動坂で書いた。

「子供の野球」はその後。全然根本から改作したので新作と云へば云はるゝものに「追憶」の二、三、四、五がある。

兎に角本集の抒情歌は大概以前のを棄てずにどうにか生かした。どうしても棄てかねた情痴が残つてゐるのには驚いた。

### 雀の卵

本集は「輪廻三鈔」以後六年葛飾へ移るまでの東京麻布十番の時代のものである。

本集でも抒情歌は大概生かした。自然靜觀の歌はその代りに思ひきつて嚴選した。「時雨と霜」「雪の翅ばたき」「白木蓮花」あたりを見ていただければわかる。

この中で新らしいのが「麻布山」「童と母」の長歌。「寒曉」の雉子。



れは動坂(七年)で作った。葛飾での作が「白木蓮花」の諸章、雉子の尾」  
の中のある数章「闇魔の咳」等。

他は概して麻布で作つてある。「石版職工」など古い方であるが、  
六年の一月から五月頃まで可なり作つた。そして「蛇窪村」の歌あ  
たりから一轉して、葛飾前歌あたりが「霜の夜聲」だとか「山内  
の時雨」だとか「雀の宿」だとかの歌になつた。

四月に二十日ばかり苦行して雀の卵の序歌以下一百首を作  
つた。然し、これも半数以上此集には削除して了つた。これがそも  
そもの「雀の卵」編纂の動機となつたものである。此集では各處に

散らかつてゐるが「茶の煙」の中の「鈴蘭」「沙羅の木」「冷たき微笑」「雪  
の翅ばたき」の中の「霞と雀」「石臼と杵」「現身」等である。

これらの歌は「潮音」「アララギ」等に主に載せて貰つた。葛飾での  
は「三田文學」「文章世界」「新潮」等に寄稿した。

訂正集成するに當つて、多少新作が交つた。

「山内の時雨」の中の鴨やもみぢの歌「厨邊の霜」の中の油畫のや  
うな三四首「冬の山水」中の「小閑」「寒雀」「白牛」の二三、四等である。

本集も随分手を入れた。

挿 畫



挿畫の十七葉は葛飾にゐた時描いた片端から版に廻はして印刷して了つたものである。その時はすぐにも歌集の方が出せさうだつたのであつた。

これらの畫は印刷された儘永い事印刷屋の土藏に藏ひ込まれてあつた。

今見れば歌と比較にならない。その頃はそれほど見劣りも爲なかつたかも知れぬが、今日ではどうにもならない。非常に耻かしいから何度も止さうと思つたが、折角印刷してあるのだからと云ふので、弟の云ふのに任した。

この中で「白牛」だけは自分でも好きである。

### 雀の生活と童心

本集を読まれる方は長篇散文詩「雀の生活」と散文抄「童心」とを是非参照してほしい。本集 歌はれた私の生活がはつきりわかるからである。前者は新潮社版、後者は春陽堂の版である。

以上



# 雀の卵目次

## 葛飾閑吟集

序に代へて	一
葛飾前歌	五
薄野	五
黍	六
蓮花	六
白馬	七
雀子囃遊	八



真間に移る	九
野ゆき山ゆき	一二
紫蘭咲く	一六
月夜	一七
燕	一八
雨のころ	二〇
物の芽	二〇
雨滴	二一
蟹と竹	二二
蝸牛	二三
螢	二四
晴日小閑	二五

朝	二五
晝	二六
夕	二七
鳥の啼くころ	二九
棗の花	二九
三谷に移る	三〇
前庭	三二
紫煙草舎	三二
向う土堤	三三
飯を食みつつ	三四
農家小景	三四
淺夜	三六



馬屋の前	三七
背戸	三八
藪蔭	三九
螢四章	四〇
朝	四〇
夜	四一
晝	四二
雨	四三
涼味	四四
櫻咲く	四四
時化前	四五
雨間	四六

四

日ざかり	四七
松山	四七
膠煮てゐて	四八
蜻蛉	五〇
かくれんぼ	五一
牛	五三
群蝶の舞	五四
揚羽の蝶	五六
アッシジの聖の歌	五七
贈り物	六三
蓮の花と童	六三
曼陀羅村にて	六五

五



こども	六六
唐 黍	六八
閑吟五抄	七二
木の上に	七二
貧しさに	七三
百日紅咲く	七五
寂しさや	七六
米の白玉	七七
犬と鴉	八六
月下の蝶	九〇
田園の立秋	九一
秋近し	九一

門前の立秋	九三
畔	九四
空は晴れて	九五
蓮の花採り	九六
蓮の雨	九七
木槿と雀	九八
三日の月夜	九九
二百二十日	一〇〇
月夜こほろぎ	一〇一
庭前秋景	一〇三
良 夜	一〇四
月前秋景	一〇四



河べり……………一〇六

庭前の秋……………一〇七

松風……………一〇九

栗鼠……………一〇九

夕焼……………一一〇

田圃の晩秋……………一一一

向ひ風……………一一一

夕照……………一一二

庭前の晩秋……………一一五

落葉……………一一五

閑けさ……………一一六

水邊の晩秋……………一一七

薄に雀……………一一七

泊り船……………一一八

冬日小閑……………一一九

射干……………一一九

椰子の實……………一二〇

獨樂……………一二一

新酒……………一二二

時雨……………一二四

松風……………一二四

松が根……………一二五

朝……………一二六

日の暮……………一二七



田圃	一二八
初夜過ぎ	一二九
霜の田	一三〇
霜と雀	一三二
立枯竝木の歌	一三四
潮來の入江	一三七
潮來抄	一四〇
田家の冬枯	一四三
野良の晩冬	一四六
枯尾花	一四六
薄と牛	一四七
蒲の穂	一四八

雀の宿	一五〇
柿日和	一五〇
古池の朝	一五二
一色に	一五三
咳すれば	一五五
かげ	一五六
ふと見たら	一五七
この冬は	一五八
今さらに	一五九
追離	一六一
冬枯遺抄	一六二
刈小田	一六二



田の畔	一六三
古利根	一六四
寒	一六五
路上	一六五
空	一六六
野川	一六六
夕照	一六七
山松風	一六八
夜の雪	一七〇
竹あちこち	一七一
浅春雑歌	一七二
椿	一七二

春立つ	一七三
雨後の月	一七四
春の耕田	一七五
春雨	一七七
夕べの虹	一七八

輪廻三鈔

序	一八一
流離鈔	一八七
風懷	一八九
一人のこる	一八九



嶋の永日(二)	一九一
嶋の子	一九一
海 龜	一九二
荒磯の洞	一九二
信天翁	一九四
弟嶋を眺む	一九五
嶋の永日(一)	一九六
椰子の實	一九六
玉蜀黍	一九七
護謨の葉	一九八
歸 途	二〇〇
歸心矢の如し	二〇〇

松風と雀	二〇二
歸 京	二〇四

別離鈔

蒼天に向つて	二〇九
妻 に	二一一
草の葉を見よ	二一二
我は貧し	二一三
金は無し	二一四
この父この母この妻	二一五
別 れ	二一九
今さらに	二一九



その時……………二二〇  
 妻を歸して……………二二二  
 別後……………二二三  
 苦しさに……………二二三  
 追憶……………二二四  
 女色……………二二六  
 憐憫……………二二七  
 悲願……………二二八  
 隼人……………二二九  
 蟹味噌……………二二九  
 兵兒……………二三一  
 田打蟹をおもふ……………二三二

途上所見

ろくろ……………二三三  
 子供の野球……………二三五  
 夜祭のころ……………二三八  
 十五夜……………二三八  
 満月と鴉……………二四〇

發心鈔

良夜……………二四五  
 路次……………二四五  
 陰影……………二四六  
 現身……………二四七



中秋	二四八
暗夜感電	二五〇
機縁	二五二
發電機	二五二
鴉	二五四
發心	二五五
圓	二五五
變態	二五六
雨ふれば	二五七
麗日	二五八
鳥のこゑ	二五九

### 雀の卵

序歌	二六一
時雨と霜	二六一
竹と山水	二六九
寒水臻る	二六九
竹林に人あり	二七〇
雨過ぐ	二七〇
小閑	二七一
時雨の後	二七二
寒雀	二七三



寒 曉	二七四
闇寛の咳	二七四
雉 子	二七五
雀の宿	二七六
蛇窪村	二七九
山内の時雨	二八四
寒 鴉	二八七
麻布十番	二八八
霜の夜こゝろ	二八八
厨邊の霜	二九二

雪の翹ばたき

大 王	二九七
白 牛	二九八
巷の吹雪	三〇〇
笹の雪	三〇二
朝	三〇二
夜	三〇三
雪 夜	三〇四
雪 曉	三〇七
浅草の雪	三〇九
路次の朝	三一〇
屋根の雪	三一〇
椎の葉の雪	三一二
石臼と杵	三一三



寂しさに……………三二五

霞と雀……………三二六

現身……………三一九

卵わりつつ……………三一九

朝の吸入……………三二一

夜明の鶴……………三二三

山家抄……………三二六

茶の煙

茶の煙……………三三三

南畫景情……………三三五

碧山……………三三五

永日……………三三七

あきらめ……………三三八

朝……………三三八

鈴蘭……………三三九

冷たき微笑……………三四〇

沙羅の木……………三四二

ひとりの冬……………三四四

寒薔薇……………三四四

幾夜……………三四五

折にふれて……………三四六

人のごとく……………三四六

人みなが……………三四八



財布	三一九
貧者と糧	三五〇
米の飯	三五〇
はだか鶴	三五二
うき世	三五四
石版職工	三五五
馬なれば	三五七
石かつぎ	三五九
長屋者	三六〇
合掌	三六二

雉子の尾

父と母	三六五
父母とその子	三六八
寂しき朝	三六八
老いし父母	三七〇
老いらく	三七〇
父の白髪	三七一
母の鏡	三七四
老いぬれば	三七五
霜は置くととも	三七六
貧しき食膳	三七七
ある日	三七七
ある時	三八〇



父の嘖び……………三八二  
 麻布山……………三八五  
 童と母……………三八八  
 春日遊樂……………三九一  
 うつり香……………三九四  
 白藤の花……………三九四  
 借着……………三九五  
 童のころろ……………三九七  
 俚諺に曰く……………三九七  
 蛭つり……………三九八  
 柳河の玩具……………三九九

白木蓮花

白木蓮花……………四〇三  
 竹屋の木蓮……………四〇七  
 春のめざめ……………四一〇  
 郊外所見……………四一二  
 病 鷄……………四一二  
 火葬場道……………四一三  
 雉 子……………四一五



挿畫目次

蟹と竹	二二
朝鮮の木挽	二六
群蝶の舞	五四
時雨	一一八
蟹味噌	二二八
田打蟹	二三二
暗夜感電	二五〇
麗日發心	二五八
閻魔の咳	二七四
竹林の火	二八〇

白牛	二九八
山家の冬	三二六
うき世	三三二
石上蓮花	三五六
童のころ 一	三八四
童のころ 二	三九八
竹屋の木蓮	四〇六



大正十年八月十八日印刷  
大正十年八月廿三日發行

(雀の卵)  
定價參圓八拾錢



著者 北原白秋

發行者 東京市神田區仲樂町十五番地  
合委會社アルス代表者 北原鐵雄

發行者 東京市神田區仲樂町十五番地  
鈴木泉藏

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
赤羽正己

發行所

東京市神田區仲樂町十五番地  
合委會社

了

電話 神田二一六九番  
振替東京二四八八番

入



# 白秋詩集 第一卷

全二卷  
第一卷  
第二卷  
定價  
十八錢  
送料  
錢

白秋氏の全詩を盛れる六百有餘の燦然たる美本

明治大正の詩歌を代表する巨匠白秋氏の全詩集成。本書第一卷は青燈集、赤い鳥小鳥、大悲集、畑の祭、雪と花火の五集三十二章總詩數實に參百有餘篇を收むるものにして、未發表の近作全部を包含するもの也。純情涙を流すべき小唄あり、輕快歌ふべき俗謡あり、天真自ら成せる童謡あり、法悦光明の歡樂境地を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象徴詩あり、印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、自由奔放なる散文詩體あり、各種の詩風交錯して燦然絢爛會て見ざるの壯觀を呈し、渾然美妙の一大交響樂を形成す。本書は實に新鑄ポイント活字を以てせる六百餘頁の彪然たる大詩集にして、恩地孝四郎氏の装帧及扉畫眞に清麗高雅藝術の士の愛誦すべきもの、書架に傳ふべきもの、本書を措いて何を他に求めんや。

中判箱入美本——恩地孝四郎氏装帧

定價八圓拾錢 送料拾錢

# 白秋詩集 第二卷

日本詩壇に永遠不滅の光輝を放つ白秋氏の全詩集愈完成す。

第二卷成る。本卷收むる處、象徴の秘奥、官能の極致、アプサンの芳香を偲ぶべき『邪宗門』純情涙を流して歌ふべき抒情小曲集『思ひ出』及氏が一舉にして詩壇に名聲を贏ち得たる大長篇詩、林下の黙想、全都覺醒賦、春海夢路、繪草紙店を始めとして才華爛漫たる少年時代の諸篇を收むるもの也。日本詩壇永遠不滅の金字塔たるべき白秋氏の全詩集は本集第二卷を以つて一先づ現在に至る全作品を網羅し茲に第一期の完成を告げたり。

定價八圓拾錢 送料拾錢



白秋小唄集

北原白秋氏著

小唄二百餘篇。燦爛寶玉の如き歌集

雨はふる、ふる、城ヶ島の磯に  
利休風の雨がふる。

雨は眞珠か、夜明の霧か、  
それともわたしの忍び泣き

(城ヶ島の雨の一節)

歌ひ易く解し易く愛誦措く  
能はざる小唄二百餘篇を収  
む  
附録「さすらひの唄」「酒場  
の唄」「こん度生れたら」「カ  
ルメンの唄」「山の唄」「別  
れの唄」本文二度刷、表紙  
サラセン模様絹縹子表紙袖  
珍判箱入

定價 圓十八錢 送料 六錢

好評嘖々 忽十版。日本詩壇の聖書

小抒情 ねわすれなぐさ

北原白秋氏著

斯の如く美しく、優しく、懐しき詩集他にありや

なわすれなぐさ

面皸のうしろに見えて、  
その眸にほふごとくも、  
空いろに透きて、葉かげに  
今日も咲く、なわすれの花

本書はその美しき、懐しき  
讀めば涙も溢れ出づべき白  
秋氏の抒情小曲を収めたも  
のである。装幀は山本鼎氏  
白金の光澤美しき絹縹子に  
クロバーと螢の模様をあら  
はした瀟洒清新の趣は見る  
からに心躍るばかりである

定價 圓十八錢 送料 八錢

忽十版。眩目燦爛たる美装



# 洗心雜話

北原白秋氏著

詩や歌はどうして作るか、これは詩歌に志す人々の第一に知らんとする處であるが、幽趣微韻を極むる微妙な詩歌の機微を説きあかすといふことは實に六つかしい事である。本書は詩歌壇の巨匠白秋氏が長い間の苦しい経験から體得された心境を誰れにも分るやさしい言葉で、詩歌を作るに何よりも大切な心の据ゑ方、感じ方、物の見方等を澤山の面白い例話をあげて説かれたもので、詩歌の根本、藝術の極致がこの一卷に收められてゐる。詩歌の作り方を知らんとする人、眞に詩歌を味はんとする人々の一讀を薦む。

□ 装幀恩地孝氏 四六判箱入極美本 □

定 價 壹 圓 八 角 送 料 八 錢

# 白秋小品

北原白秋氏著

寶玉の如く輝かに毒草の如く香高き白秋氏の散文を見よ。新鮮なる感覺と強烈なる印象と詩以上の美と鋭さを示せる氏の小品を見よ。本書收むる處紫の煙ほのかに簡素靜寂を極むる田園手記『葛飾小品』を卷頭に、芳烈なる熱帯の色彩美しき絶海の孤島の怪奇なる物語を收たる『小笠原小品』、瀟洒清新の筆致懐かしき『桐の花小品』、氏の出世作にして日本文壇に一新體を創始せる氏が半生の自叙傳『生ひたちの記』、南國の匂新らしき『朱樂のかげ』、其他『植物園小品』『折々の手記』七篇二十七章、すべて玉蟲の怪しき光と天鵲絨の惱ましき手觸りを偲ぶべき燦然たる一大散文集也。

◆ 装幀矢部季氏。血の如き眞紅の布に疊の模様を印し深◆  
◆ 碧の海の色の絹繻子を以てはぎ分けたる箱入小形美本 ◆

定 價 二 圓 送 料 八 錢



歌集雲母集

北原白秋氏著畫及裝

日本歌壇空前の大歌集出づ

白秋氏深く大自然の秘奥に沈潜して眞實一路の道を辿る。本書  
收むる處十二章六百首、度まじき懺悔の涙と切々として新なる  
流離の悲を歌ひ、更に一轉して赫奕たる新生の歡喜にうつり、  
光明無碍の法悦味と恍惚たる藝術の三昧境を叙せるもの、放膽  
或は莊麗、單純或は直截、高逸或は素朴、その彫心鏤骨の苦心  
と全卷に横溢せる潑刺たる生の躍動は日本歌壇嘗て類例を見ざ  
るの壯觀たり。神韻縹渺たる挿畫、華麗清新を極むる裝幀共に  
著者の筆になり高貴比すべきものなし。眞に白秋氏の全生命よ  
り燦めき出でたる渾然たる不朽の大歌集は即ち是。

木版色摺挿畫四葉 忽五版

定價貳圓參拾錢 送料貳錢

繪入童謡 兔の電報

北原白秋氏著

日本童謡の正風を示す天衣無縫の神品を見よ

白秋氏あらたに日本童謡を復興するや、所謂學校唱歌風の歌謡  
漸く其の跡を斷たんとし、作謡炎の流行又詩壇を風靡するに至  
る。然れども眞によく童心そのものの無邪素朴にして、原始的、  
直覺的なる心を氏の如く端的に、新鮮に、しかも藝術的にうたひ  
得るもの、現代氏を措いて眞に其匹儔を見ず。實に氏の童謡、  
そは日本童謡の正風にして、正にその最高標準を示すもの也。  
今や白秋氏の第二童謡集「兔の電報」出づ。收むる處「とんぼの  
眼玉」以後の作三十有六篇、悉く天衣無縫の神品にして、初山、  
矢部兩畫伯の名筆と相俟つて絢爛豪華を極むる空前の美本。  
學校、家庭及び一般文藝愛好家必讀の名著也。

原色版、一色版挿畫三十六葉。燦然たる美裝

定價壹圓九拾錢 送料十錢



繪入童謡 玉眼のぼんと

北原白秋氏著

矢部季氏装幀及畫

清水良雄氏  
初山滋氏畫

全國を風靡せる白秋氏の童謡集が出来ました。子供が手を叩き足を跳らして喜んで歌ふ唄はこれです。日本が上下三千年を費してやらやくただ一人生み得たる文字通りの最初の民謡詩人の傑作として永久に傳へらるべき傑作はこれです。殊に本書の誇とすべきは装幀に挿畫に最善の華麗をつくしたことで童謡一篇ごとに燦然たる色刷の挿畫を一葉づつ附してあります。

原色版、色刷挿畫二十八葉。忽五版

定價 圓九拾錢 送料 拾錢



